

1. にぶい黄褐色10YR5/3秒質土

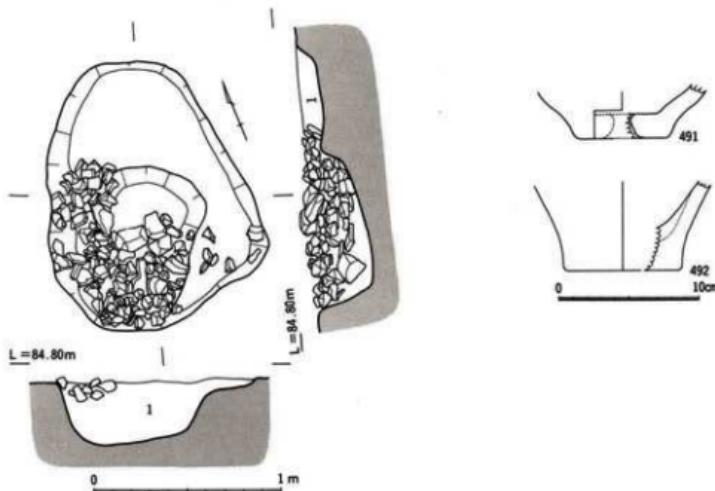
第100図 SK1061遺構実測図

頸部から緩やかに外反する口縁部を持つ広口壺形土器である。頸部から体部上半にかけて櫛描の直線文・波状文・円弧文を施す。489は体部倒卵形、口縁は緩やかに肩曲して直立気味に短く立ち上がる。

490は砂岩の円盤状の自然石を利用した砥石である。表裏面、一側面が凹面をなすほどに使用されている。

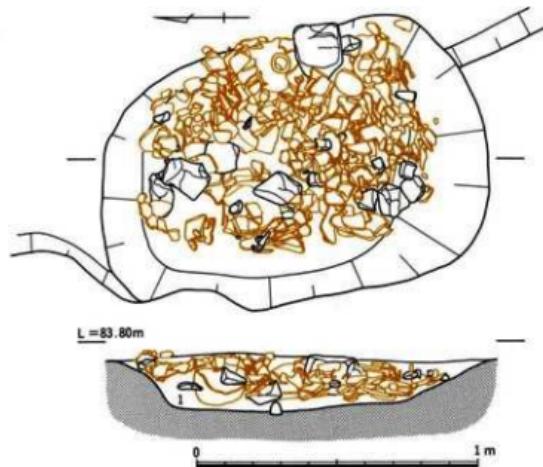
集石土坑（SK1061）（第100図）

第7調査区（Z・AA-23・24）のSB1008北半部で検出された。長軸2.08m、短軸は1.92mの隅丸方形状の土坑である。北半は一段深くなり、最深部で25cmを測る。土坑中央で長軸1.6m、短軸1.1mの範囲の楕円形状に砂岩角円礫が集中して出土しており、その中に少量の土器片が混じっていた。住居廃棄後に構築されたものと考えられる。



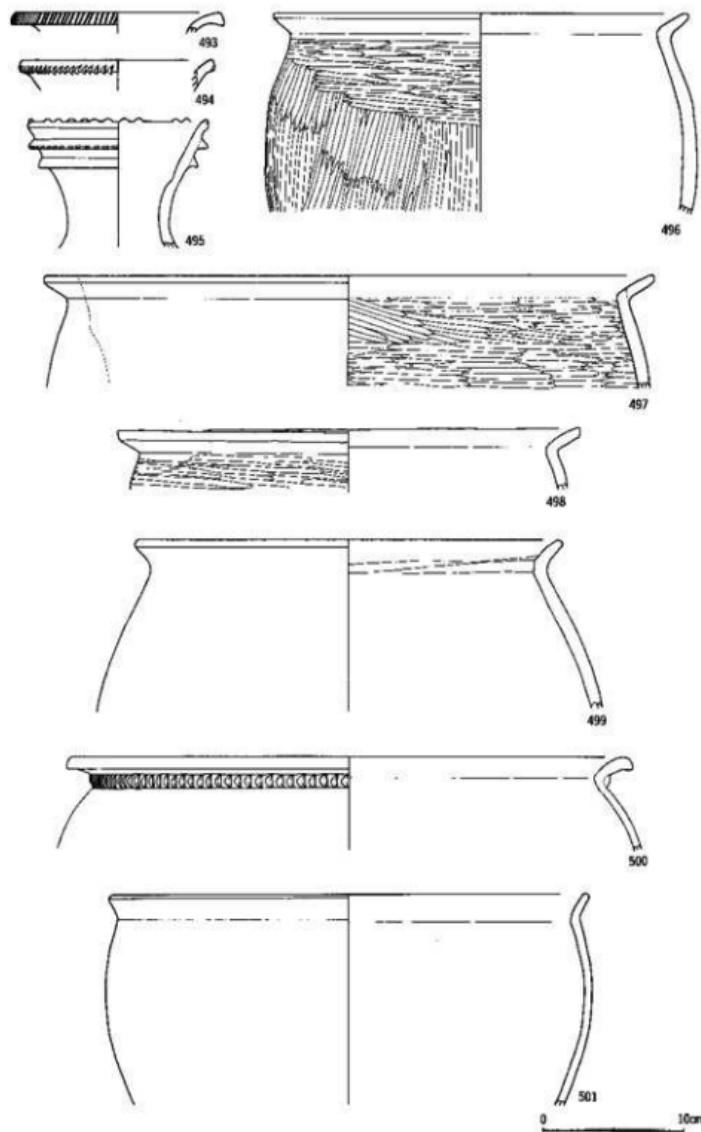
1. にじい黄褐色10YR5/4砂質土

第101図 SK1168遺構・出土遺物実測図

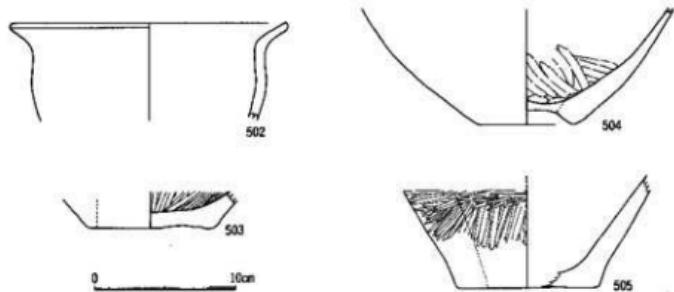


1. 喧褐色10YR3/3粘性砂質土

第102図 SK1178遺構実測図



第103図 SK1178出土遺物実測図 (1)



第104図 SK1178出土物実測図 (2)

出土遺物

弥生土器片が少量出土しているが、当初、SB1008の炉を土坑内に含めて検出、出土遺物もまとめて取り上げているため点数は明かではない。ちなみに炉を含めた出土点数は476点である。

集石土坑 (SK1168) (第101図)

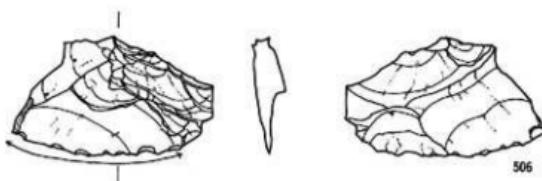
第11調査区(AE-23)、SB1010の北西部に接して検出された。長軸1.4m、短軸1.1m、深さ33cmを測り、平面形は隅丸台形状、西北よりで梢円形に一段深くなる部分があり、その部分に砂岩礫が集中して出土した。他の遺物は少なく、弥生土器片とわずかなサスカイト片が出土しているだけである。

出土遺物 (第101図)

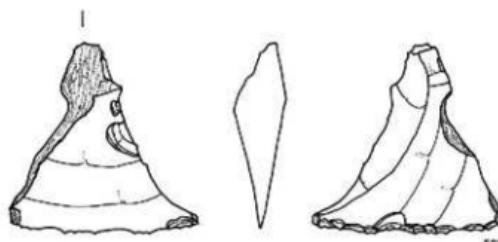
弥生土器片が17点と、3点のサスカイト片が出土している。491の底部は焼成前の穿孔が認められる。

集石土坑 (SK1178) (第102図)

第9調査区(AD-28)でSB1006の周壁に重なって検出された。長軸1.40m、短軸0.93mの隅丸長方形を呈し、断面皿形で深さは20cmを測る。壺形・甕形の土器片を破碎し、上部は砂岩角円礫と土器細片で被覆していた。出土土器は細片が多く、全体が復元できるほどの分量はない。また、土器には熱を受けているものか、変質しているものが含まれている。他に、打製石庖丁などの石器を伴う。

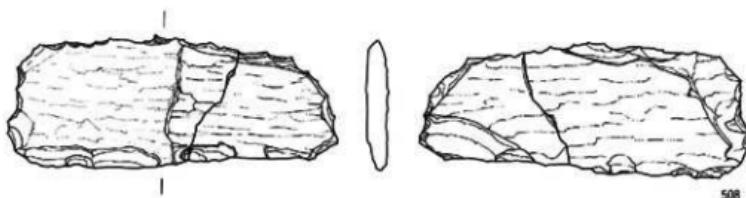


506

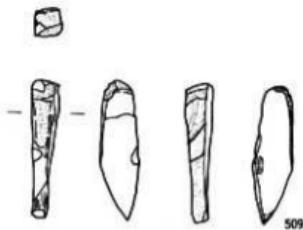


507

0 5 cm



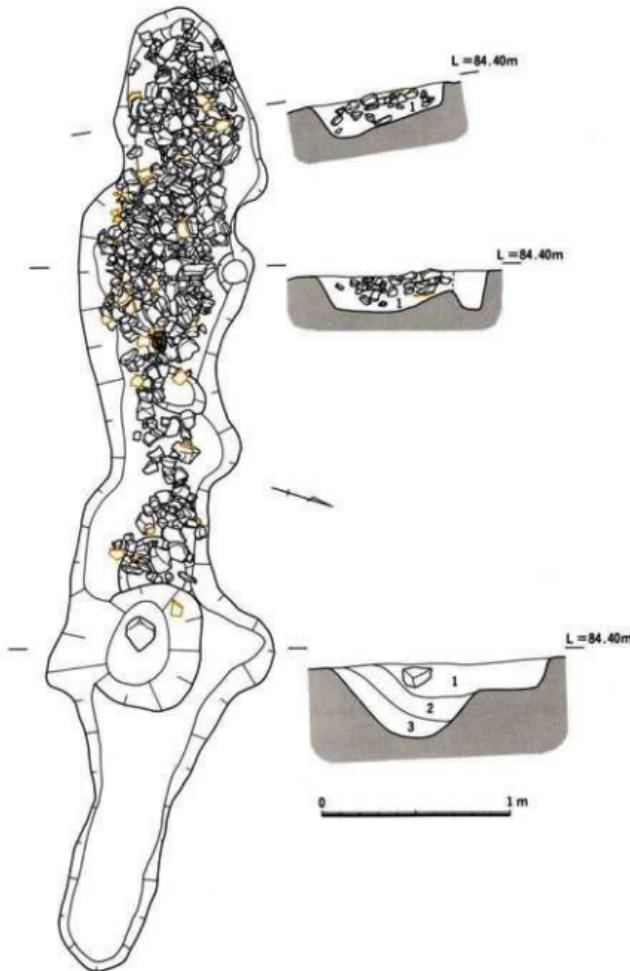
508



509

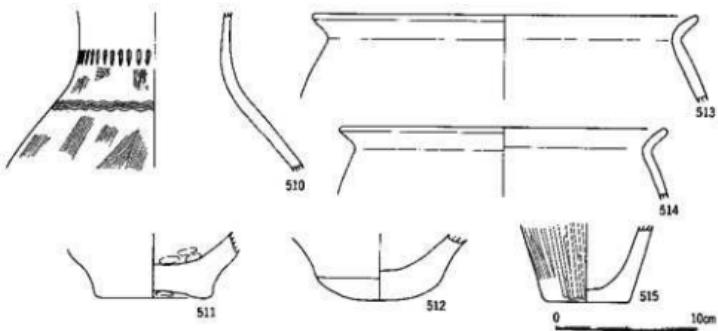
0 10cm

第105図 SK1178出土遺物実測図 (3)



1. にじい黄褐色10YR6/3砂質土
2. にじい黄褐色10YR5/3砂質土
3. 明黄褐色10YR6/6砂質土
(網目の遺物は石器をあらわす)

第106図 SD1001遺構実測図



第107図 SD1001出土遺物実測図

出土遺物（第103～105図）

弥生土器片1,775点をはじめ、スケレイバー2点、磨製石斧1点、打製石庖丁1点が出土している。

493・494は広口壺形土器で口縁端部にヘラ状工具による刻みが施される。495は漏斗状の口頸部を持つ壺形土器であるが、断面三角形の刻目突帯を2条巡らし口縁端部には2つ単位の粒状突起が8カ所に付く。この土器は変質・変形が激しく、表面は剥落している。496～500は「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ壺形土器である。500はヘラ状工具による圧痕文突帯を巡らす。他のものも口縁部直下がヨコヘラミガキで調整されている点に特徴がある。501・502は半球形の体部から屈曲してわずかに外反する口縁部を持つ鉢形土器である。503・504は内面にミガキが認められ、鉢形土器の底部と考えられる。

506・507はサヌカイト製のスケレイバーで、506は一辺に使用痕、507は片面調整による刃部を形成している。508は結晶片岩製の打製石庖丁。509は小型方柱状片刃石斧である。泥岩製で両側刃は欠損している。

集石土壤（SD1001）（第106図）

第2調査区（Y・Z-16・17）で検出された、溝状の遺構である。ほぼ東西に延び、規模は長さ5.05m、幅0.42m程度、深さは30cm程度で、断面形は、逆台形ないしはU字状を呈している。4カ所ピット状のくぼみがある。この遺構の特に西半において、弥生土器片と砂岩角円礫が集中して出土した。弥生土器片の分量は比較的少なく、砂岩角円礫は検出面から盛り上がって検出された。礫中には黒色チャート円礫が含まれている。砂岩円礫の中に赤褐色に変色しているものが含まれていることなどから火の使用があったことが推定できるが、炭化物等は目立たず、明確ではない。

出土遺物（第107図）

弥生土器片は587点を数える。叩石2点、結晶片岩2点、黒色チャート礫4点が出土している。510は広口壺形土器の頸体部で、頸部と体部の境は明瞭ではない。頸～体部上半に刺突列点文と柳描波状文が施されている。513・514は壺形土器で、「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもつ。端部は丸く曖昧に仕上げている。511はやや上げ底、512は丸底、515は平底を呈する。

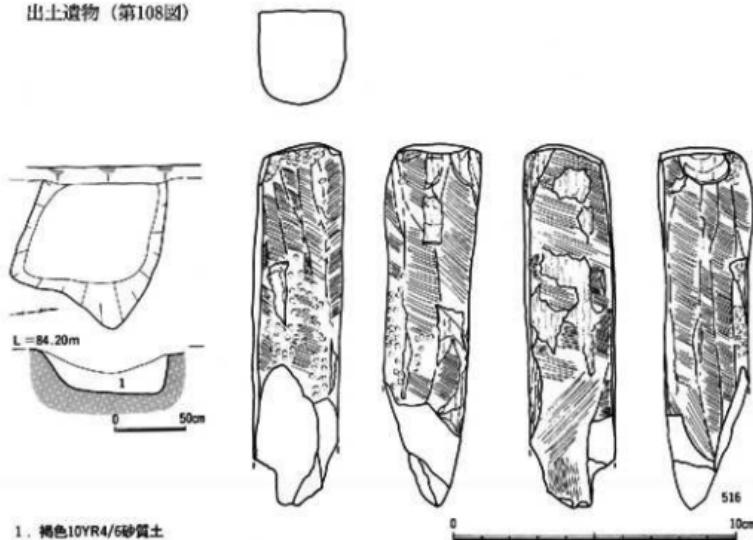
④ 土坑・土塙墓

土塙墓（SK1017）（第108図）

第2調査区（W-15）で検出された、長方形の土塙墓である。調査区外に延びている部分があるが、検出部分で、長軸0.9m、短軸1.03m、深さは32cmを測る。内部を欠損した柱状片刃石斧が1点出土しており、副葬遺物と考えられる。周辺は、集石土壤が点在するが、集石を伴わない土塙墓と推定できるのは、本遺構だけである。

なお、中世の建物（SA1001）の柱穴が重なっている。

出土遺物（第108図）

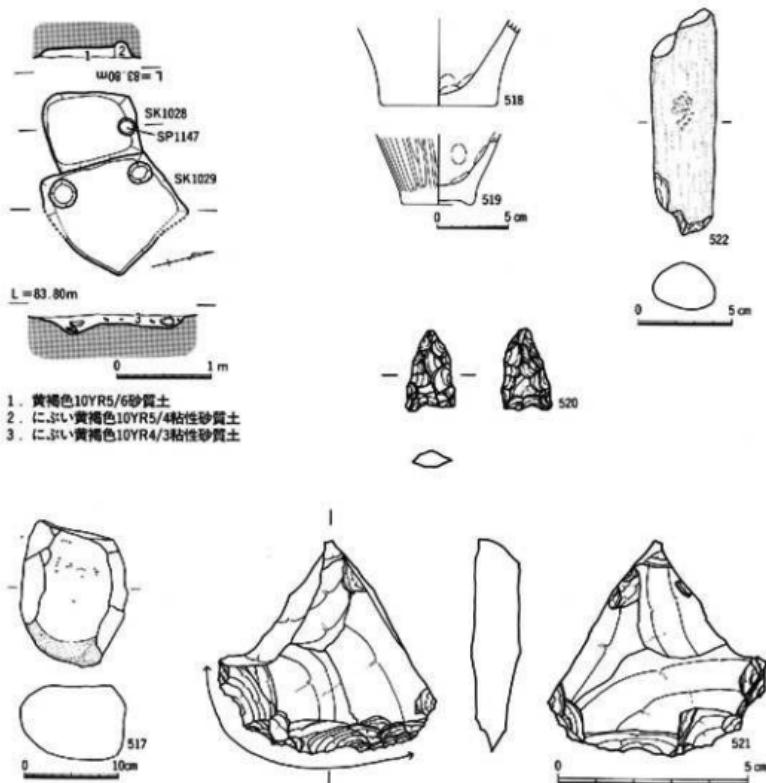


第108図 SK1017遺構・出土遺物実測図

覆土からは、柱状片刃石斧が1点出土している(516)。表面の抉り入りは退化して消えている。原材の形状にあわせたものか、方角柱ではなく、表面側がいくつもの棱を持ち、丸みをおびた形となっている。

土坑 (SK1028) (第109図)

第2調査区(W-18)で検出された土坑である。長方形の本土坑をSK1029が切って構築されていると判断した。両土坑の上に、中世の建物(SA1002)が建てられていたと考えられ、柱穴(SP1147)の重なりなどから、遺物が混入している。検出規模は、長軸1.0m、短軸0.74mの長方形で、深さは14cmを測る。



第109図 SK1028・1029遺構・出土遺物実測図

出土遺物（第109図）

弥生土器片95点と砥石1点が出土している。弥生土器片は体部の破片がほとんどである。517は砂岩の砥石である。自然の円錐を利用し、1面に砥面をもつ。

土坑（SK1029）（第109図）

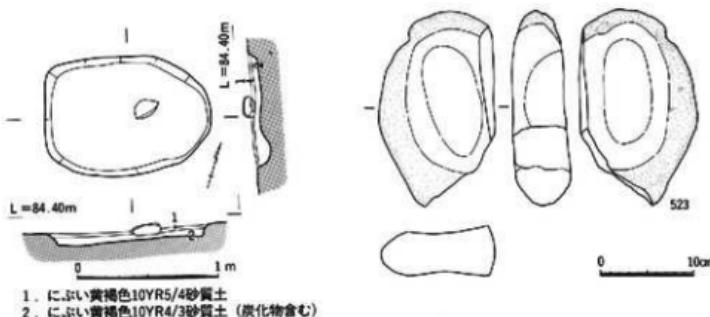
W-18グリッドで、第2調査区と第7調査区にまたがって検出された。不整形の土坑である。中世の遺物と、大量の弥生土器が混在する。中世の建物（SA1002）が重なっていることが、その原因と考えられ、中世の遺物はSA1002に帰属すると捉えた。検出規模は、長軸1.24m、短軸の中央部分で1.06m、深さは21cmを測る。

出土遺物（第109図）

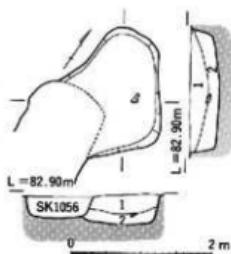
覆土からの出土遺物は、弥生土器片363点、石鎌1点、スクレイバー1点、磨製石斧1点、叩石1点がある。弥生土器片はその出土量に比して、図化可能な個体は少なく、壺形土器の底部だけである。518は平底、519はわずかに上げ底を呈している。520は凹基無茎の石鎌、521は下刃に粗い両面調整を施したスクレイバーである。522は棒状の叩石である。下端部に強い打撃痕、中央部に粒状の敲打痕が集中する。

土坑（SK1034）（第110図）

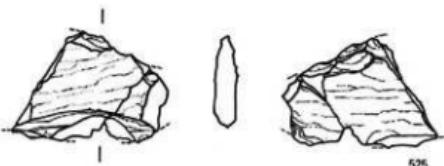
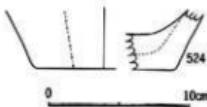
第3調査区（R-18）で検出された。やや角ばった梢円形を呈し、長軸1.18m、短軸0.86mで、上面は削平を受け、現存深は最深部でも12cmである。中央に砂岩の砥石が出土している。覆土は2層に分層でき、下層には炭化物が含まれている。



第110図 SK1034構造・出土遺物実測図



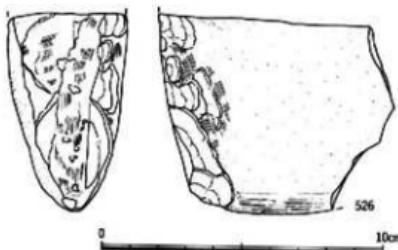
1. 噴灰黄色2.5Y5/2砂質土
2. 黄褐色2.5Y5/4砂質土



525

出土遺物（第110図）

砥石が1点出土している。砂岩の自然の円礫を利用したものであるが、表裏面とともに砥面は凹面を呈し、右辺は凸面であるが、いずれも入念に使用されている。熱を受けているものか赤褐色に変色している部分がみられる。



526

第111図 SK1051遺構・出土遺物実測図

土坑（SK1051）（第111図）

第8調査区（Z・AA-25・26）で検出された。長軸1.72m、短軸1.06mの隅丸方形状の土坑で、削平の影響を受けている地点であるが、深さは40cmを測る。覆土は2層に分層される。出土遺物は欠損が著しく、廃棄土坑の可能性が考えられる。

中世の土壤基SK1056が重なっている。

出土遺物（第111図）

弥生土器片19点、打製石庵丁片1点、不明石器1点が出土している。524は壺形土器の底部と考えられる。平底を呈し、大形品と思われる。525は欠損が激しいが、縁辺に調整痕が残っていることから、打製石庵丁と考えられる。526は、自然石の側辺を敲打し、敲打箇所を研磨

している。磨製石斧の未製品の一部と考えられる。

土坑 (SK1057) (第112図)

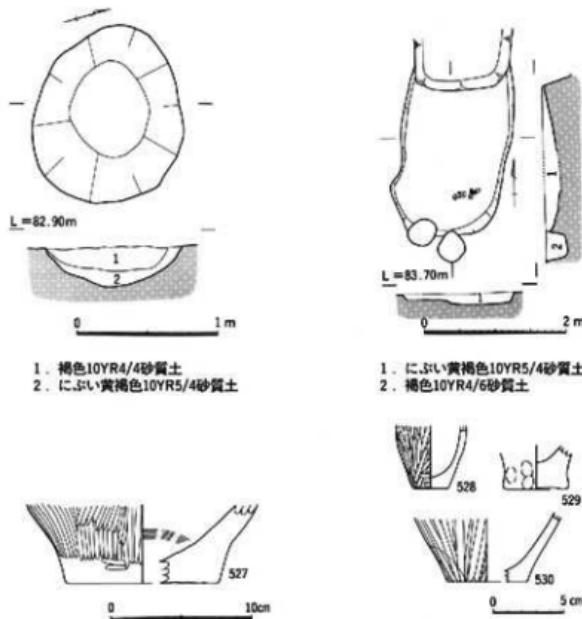
第8調査区 (Z-27) で検出された楕円形の土坑である。長軸1.28m、短軸1.07mを測り、深さは28cmである。

出土遺物 (第112図)

覆土からは、弥生土器片が30点出土している。527は壺の底部とみられ、体部外面タテヘラミガキが顕著である。

土坑 (SK1062) (第113図)

第7調査区 (Z-23) で検出された。竪穴住居跡 (SB1008) に先行して構築されていた隅丸長方形の土坑である。検出規模は、短軸が1.50m、長軸は試掘坑に切られているが、検出



第112図 SK1057造構・出土遺物実測図

第113図 SK1062造構・出土遺物実測図

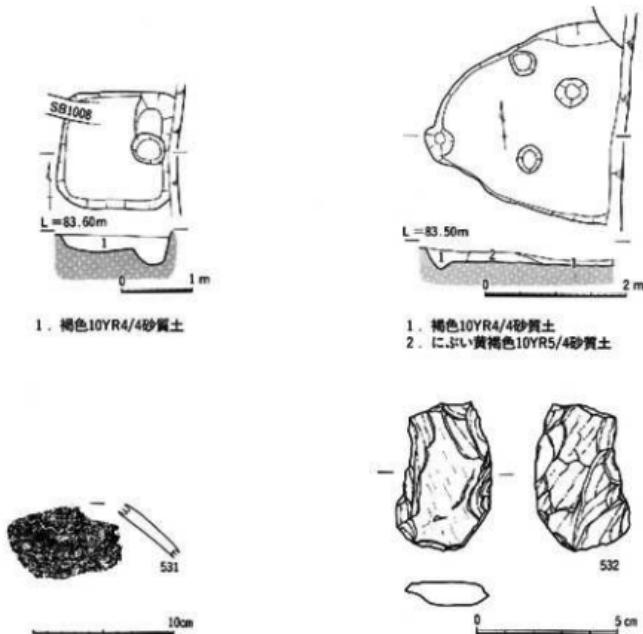
部分で2.08mを測る。深さは検出面から25cmである。多くのピットが、住居構築時あるいはその後に重なっている。ミニチュア土器等がまとめて出土した箇所がある。

出土遺物（第113図）

弥生土器片145点、サスカイト片1点が覆土から出土している。528はミニチュアの壺形土器とみられる。外面は単位の短いタテヘラミガキで丁寧に仕上げられている。壺形土器の底部529は、ほぼ平底で、分厚く小さい。530は平底で直線的に立ち上がる。

土坑（SK1063）（第114図）

第7調査区（Y・Z-23・24）で検出された。隅丸方形の土坑で、一辺が1.55m、深さは24cmを測る。周壁溝が一部重なっていることから、SB1008に先行して構築されていたものと考えられるが、周壁溝を検出できたのが遺構掘削後であり、続きは判明していない。壁側中



第114図 SK1063遺構・出土遺物実測図

第115図 SK1068遺構・出土遺物実測図

央にピット状のくぼみがあるが、土層では別遺構との認定はできなかった。

出土遺物（第114図）

弥生土器片が201点出土しているが、ほとんど細片である。531は壺形土器の体部上半で、櫛描の直線文と波状文を交互に施す。

土坑（SK1068）（第115図）

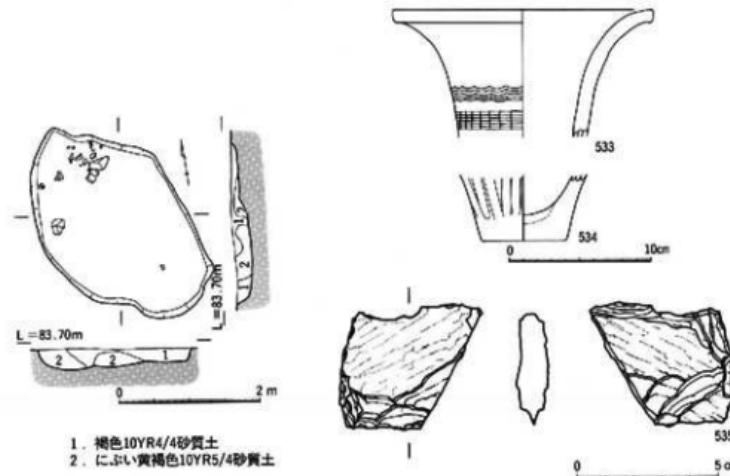
第7調査区（Y・Z-23・24）で検出された楕円形土坑である。検出部分の長軸は2.68m、短軸は2.80m、深さは28cmを測る。埋没後に4基のピットが重なっている。覆土は2層に分層できる。

出土遺物（第115図）

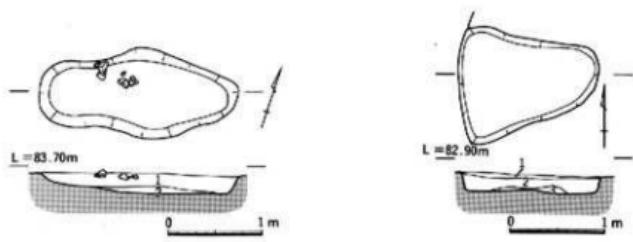
弥生土器片が72点、打製石庖丁片1点、石斧未製品が1点出土している。532は石斧の未製品とみられる。縁辺を敲打し、形を整えている段階とみられる。

土坑（SK1069）（第116図）

第7調査区（Y-22・23）で検出された不整楕円形の土坑である。長軸3.20m、短軸2.00mで、深さは21cmと浅い。北端に遺物の集中する部分がみられる。覆土は2層に分層でき、



第116図 SK1069遺構・出土遺物実測図



1. 棕色10YR4/4砂質土
 2. にふい黄褐色10YR5/4砂質土
 3. にふい黄褐色10YR5/4砂質土



第117図 SK1075遺構・出土遺物実測図
 やや複雑な堆積となっている。

出土遺物（第116図）

覆土からは弥生土器片173点、打製石庖丁1点が出土している。壺形土器（533）は、広口壺形土器である。ラッパ状に開く口頸部をもち、頸部に櫛描の波状文と簾状文を巡らせてている。534の底部は、壺形土器のものとみられ、平底を呈する。535は打製石庖丁の破片である。端部に抉りはみられない。

土坑（SK1075）（第117図）

第7調査区（X・Y-21）で検出された。SB1003の北側に隣接し、主軸はほぼ東西である。長軸2.15m、短軸1.00mの長楕円形を呈しており、深さは21cmを測る。

出土遺物（第117図）

覆土の上面で、弥生土器片26点が出土している。536は、ラッパ状に大きく開く口頸部を持つ小型の広口壺形土器である。

537は、甕形土器の外反する口縁部である。

土坑 (SK1082) (第118図)

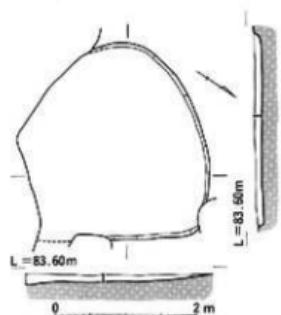
第7調査区(U-22)で検出された土坑である。SB1004の拡張後の周壁溝を切って構築されている。土坑上面で炭化物の広がりが顕著であった。検出規模は長軸1.54m、短軸0.91mの不整方形を呈している。深さは19cmである。

出土遺物 (第118図)

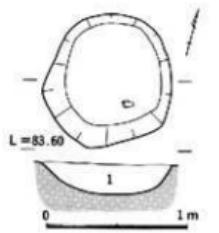
弥生土器片が50点、サスカイト片が72点、結晶片岩片が2点、石鐵が1点である(538)。サスカイト片が多いのは、石器製作を行っていたSB1004に重ねて構築された結果と推察できる。

土坑 (SK1109) (第119図)

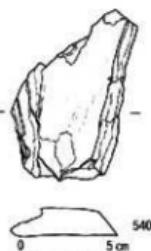
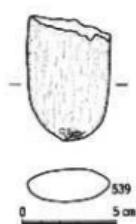
第6調査区(R-7・8)で検出された不整円形の大形土坑である。一部調査区外に延び



1. にぶい黄褐色10YR5/4砂質土



1. にぶい黄褐色10YR5/4砂質土



第119図 SK1109遺構・出土遺物実測図

第120図 SK1111遺構・出土遺物実測図

ているが、検出規模は長軸、短軸とともに2.7mを測る。深さは16cm、底面は平坦である。

出土遺物（第119図）

弥生土器片が31点、叩石が1点、出土している。539の叩石は破損しているが、扁平な棒状の結晶片岩で、先端部に粒状の敲打痕が観察できる。

土坑（SK1111）（第120図）

第6調査区（R・S-8）で検出された。長軸0.98m、短軸0.93mのほぼ円形の土坑である。断面形はU字状で、深さは23cmを測る。SK1057と同様の形状をしている。

出土遺物（第120図）

弥生土器片が5点、緑色片岩製の小型の砥石が1点出土している。540は、自然面を砥面とする砥石であるが、縁辺を強い敲打により、粒調整している。打製石庖丁ないしは磨製石斧に転用途上のものとみることもできる。

土坑（SK1127）（第121図）

第9調査区（AD-27）でSB1006の西側に隣接して検出された。長軸2.84m、短軸1.20mの不整な三角形を呈する。底面は複雑な凹凸があり、深さは最深部で27cmを測る。

出土遺物（第121図）

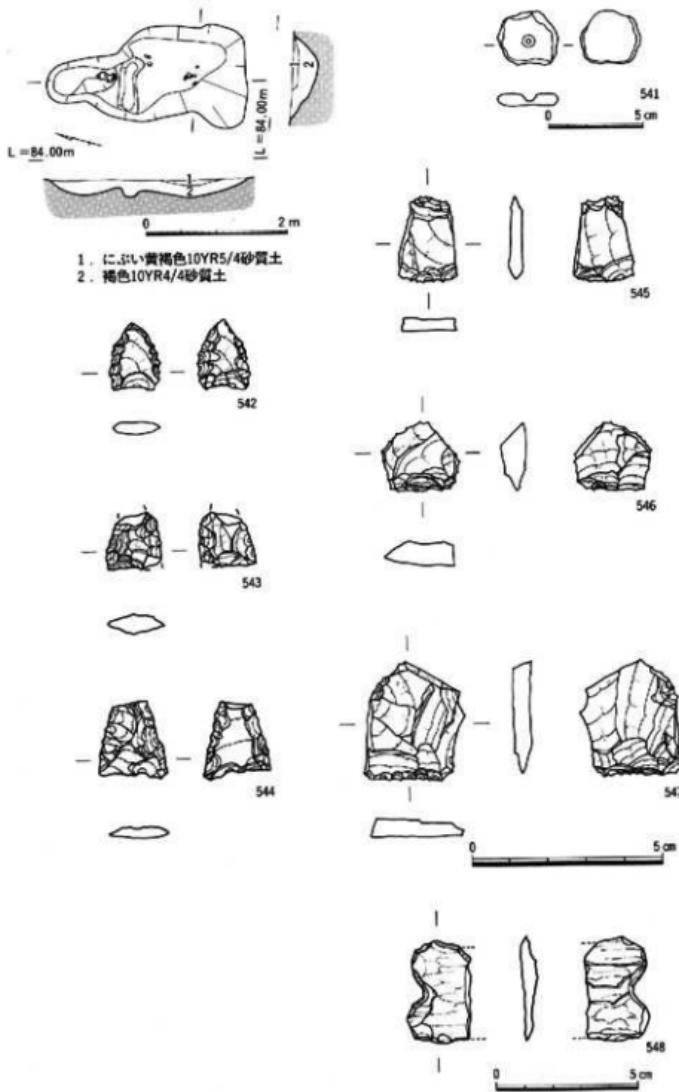
覆土から出土したのは、弥生土器片が204点、サヌカイト片が13点、結晶片岩片2点、叩石2点である。弥生土器は細片で岡化できるものはない。541は土器片利用の紡錘車である。表面から穿孔中で、貫通していない。542～544は石鍛である。542は浅い凹基、あとは平基の無葉鍛である。545～547は楔形石器。548は打製石庖丁片であり、端部には抉りが施されている。

土坑（SK1129）（第122図）

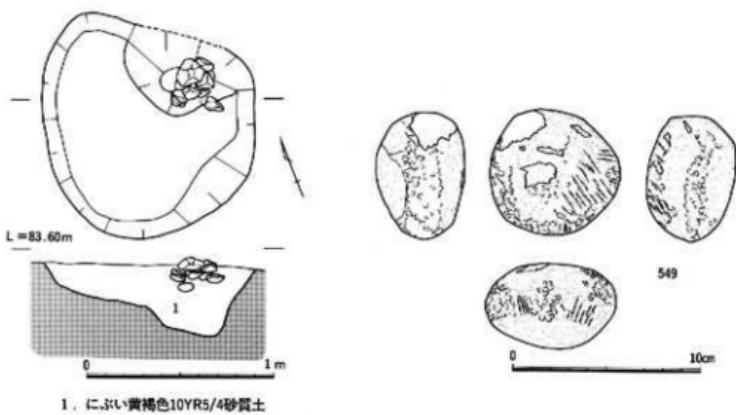
第9調査区（AC・AD-28）で、SB1006の南側に隣接して検出された。長軸1.16m、短軸1.10mの不整な梢円形を呈し、深さは最深部で36cmを測る。最深部の上面に遺物が集中して出土した。

出土遺物（第122図）

砂岩鍛とともに弥生土器片23点、サヌカイト片5点、叩石1点が出土した。549は叩石である。ハンレイ岩の円錐を利用し、側線を中心に粒状、筋状の敲打痕が観察できる。



第121図 SK1127遺構・出土遺物実測図



第122図 SK1129遺構・出土遺物実測図

土坑 (SK1132) (第123図)

第9調査区(AE-29)で検出された。長軸1.01m、短軸0.94mの不整な隅丸方形で、平坦な底面までの深さは、13cmと浅い。出土遺物から、後期の遺構と判断できる。

出土遺物 (第123図)

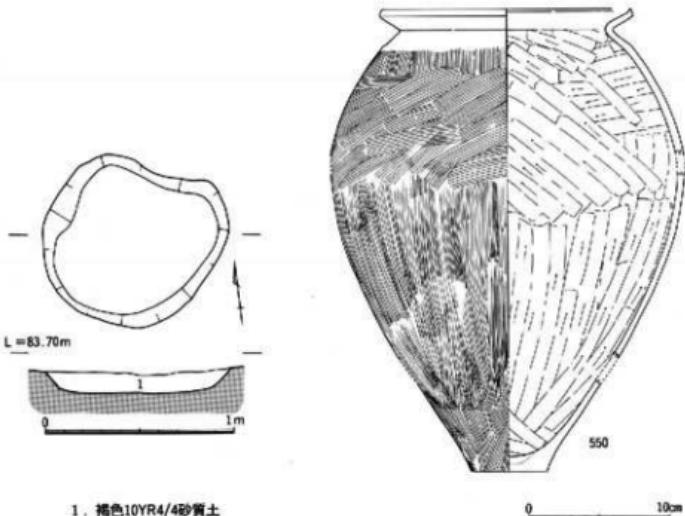
弥生土器片が37点出土している。550の壺形土器を図上で復元した。倒卵形の体部から「く」の字状に屈曲して外反する口縁部をもち、端部はわずかにつまみ上げる。体部外面は主にタテハケ、内面は全面に丁寧なヘラケズリを施す。形態・技法から、後期前葉の所産と考えられる。

土坑 (SK1133) (第124図)

第9調査区(AE-29+30)で検出された。長軸1.29m、短軸0.86m、平面形は不整な梢円形を呈し、深さ11cmで、断面形皿形である。中央部の覆土上面で、弥生土器片が集中して検出された。遺物は、弥生土器片130点、サスカイト片1点であるが、図化に耐え得る個体はない。

土坑 (SK1157) (第125図)

第11調査区(AD-17+18)で検出された。長軸2.18m、短軸1.34mの小判形を呈する土坑である。深さは22cmを測る。



1. 褐色10YR4/4砂質土

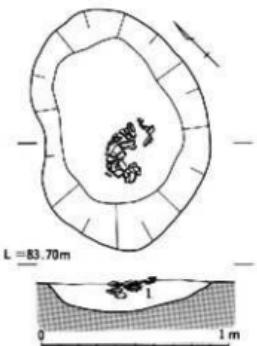
第123図 SK1132遺構・出土遺物実測図

出土遺物（第125図）

弥生土器片が27点出土している。551の壺形土器は、朝顔状に大きく開く口頭部を持つ。552の底部は、わずかに上げ底を呈する。壺形土器と考えられる。

土坑（SK1159）（第126図）

第11調査区（AE-20）で検出された。出土遺物の状況からすると、SB1009廃絶後に東端に重なって構築されており、さらに、土坑南半は中世の土坑SK1156が重なる。検出規模は、長軸2.28m、短軸1.44mの長楕円形を呈しており、深さは28cmを測る。覆土上面で土器の集中する部分がみられ、本来は土坑上面全体に広がっていたものと推定できる。土器は細片であり、砂岩礫の被覆は頗著にみられない。

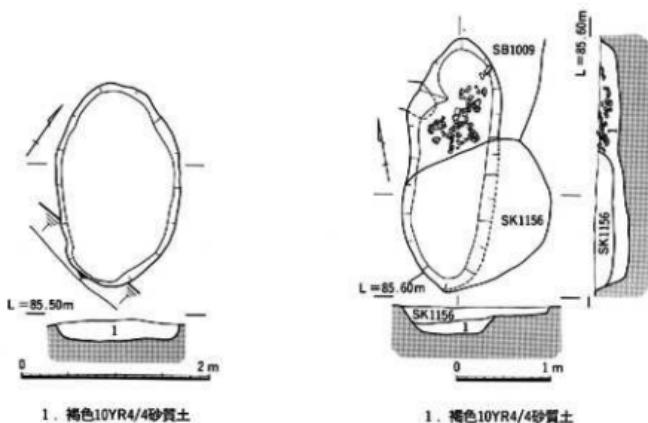


1. 褐色10YR4/4砂質土

第124図 SK1133遺構実測図

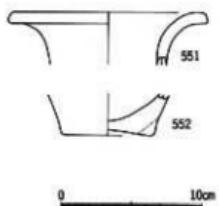
出土遺物（第126図）

弥生土器片が185点、結晶片岩片が4点出土しているが、図化できる個体はほとんどない。553は壺形土器の底部である。平底を呈し、体部は内嚢気味に立ち上がる。



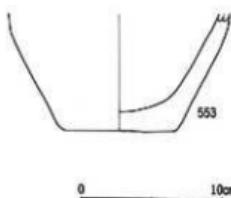
1. 褐色10YR4/4砂質土

1. 褐色10YR4/4砂質土



第125図 SK1157遺構・出土遺物実測図
土坑（SK1164）（第127図）

第11調査区（AD-22）で検出された不整な楕円形の土坑である。検出規模は長軸1.94m、短軸1.02m、底面は平坦ではなく、最深部で深さ36cmを測る。中央やや南側の底面で、大型始刃石斧が検出された。

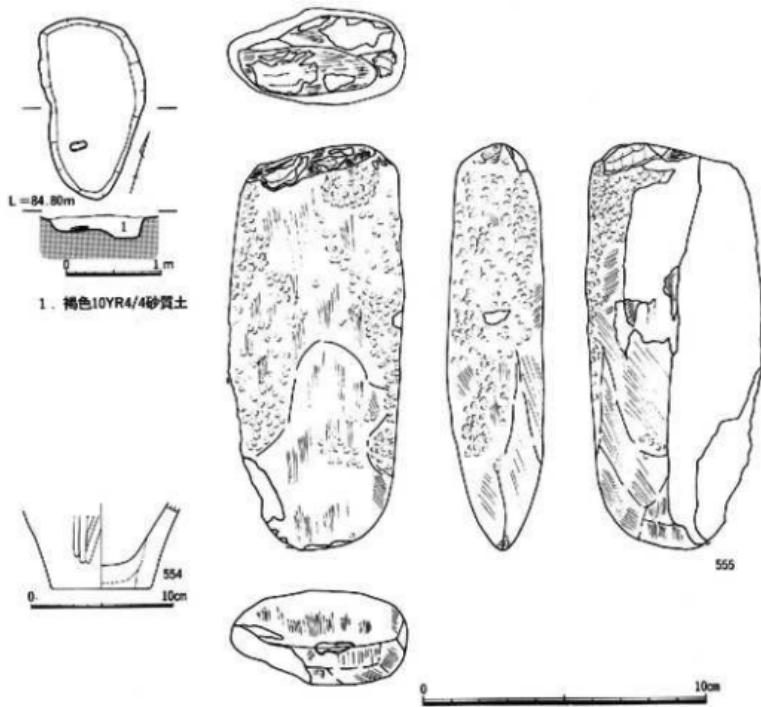


第126図 SK1159遺構・出土遺物実測図

出土遺物（第127図）

弥生土器片10点と、磨製石斧1点が出土している。554は壺形土器の底部である。体部外面はタテヘラミガキの痕跡が確認できる。555の大型始刃石斧は緑色片岩製で、全面に敲打痕がのこり、刃部を中心に研磨している。

土坑（SK1171）（第128図）



第127図 SK1164遺構・出土遺物実測図

第11調査区東南端 (AC・AD-24) で検出され、半分が調査区外へ延びている。検出されている部分で、長軸3.44m、短軸1.46mである。平面形は梢円形と思われる。深さは13~27cm、断面皿状を呈する。中央部やや北側で土器片が集中して出土した。

出土遺物（第129・130図）

土器の集中している地点のものを含めて、覆土から弥生土器片が396点、磨製石斧未製品1点、サヌカイト片2点が出土している。土器は分量の割に底部の破片が目立つ。

壺形土器が多く、広口壺形土器は口縁部の開く形状に差異が認められる。ラッパ状に開き、頸部に簾状文が施される556、体部から緩やかに外反する557、558は直立する頸部から折れ曲がるように外反する口縁部を持つ。559も頸部に櫛描の粗い直線文が施されている。560~562の底部には平底と上げ底がみられる。

563・564は壺形土器の底部とみられる。565も含め、いずれも平底である。

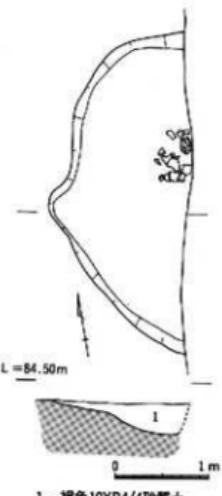
566（第130図）は、磨製石斧の未製品である。刃部にあたる部分を欠損しているが、大型始刃石斧の未製品であろう。形のよい緑色片岩の自然礫のほぼ全面を敲打、研磨前の段階と考えられる。

土坑（SK1174）（第131図）

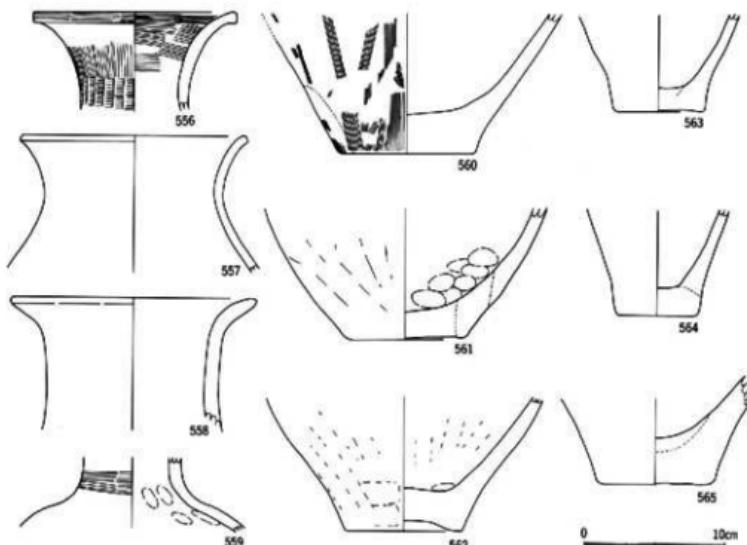
第9調査区（AC-27）の弥生時代の遺構の集中する地点で検出された。長軸1.08m、短軸0.68mのやや不整な楕円形、断面は階段状になる部分があり、最深部で41cmを測る。階段の部分で壺形土器の底部が上向きで出土した。

出土遺物（第131図）

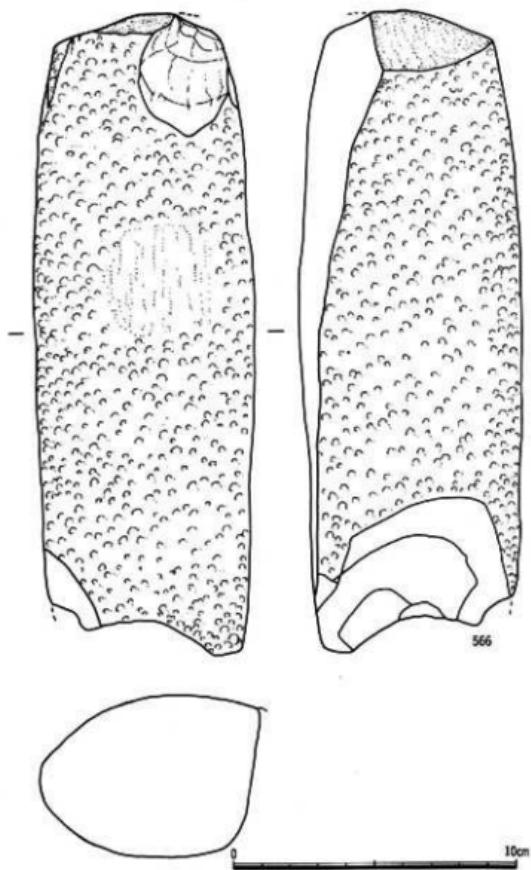
出土した567は、底面薄く、内縁気味にたち上がる体



第128図 SK1171遺構実測図



第129図 SK1171出土遺物実測図 (1)

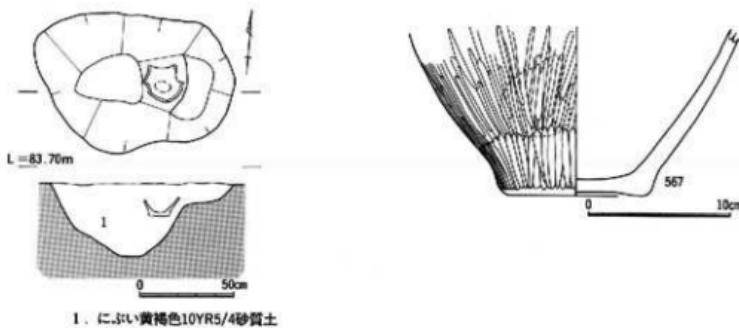


第130図 SK1171出土遺物実測図 (2)

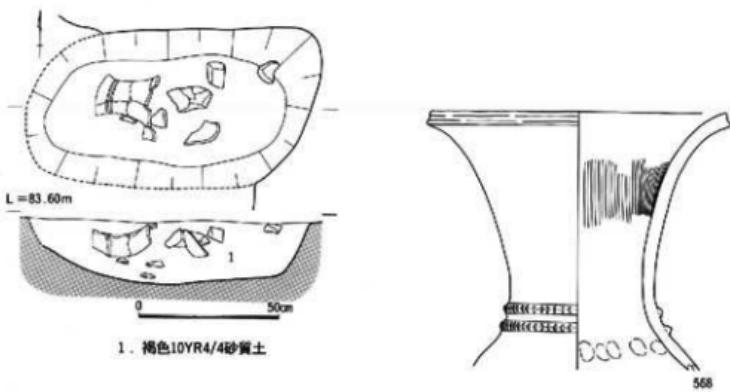
部にはタテヘラミガキが入念に施されている。ほかに弥生土器片が46点出土している。

土坑 (SK1175) (第132図)

第9調査区 (AC・AD-28) で検出された。やはり、SB1006南西側の遺構の集中する地点である。長軸0.96m、短軸0.54mの隅丸方形状を呈する、深さ24cmの土坑である。覆土中に弥生土器の大きな破片と砂岩礫が含まれている。



第131図 SK1174遺構・出土遺物実測図



第132図 SK1175遺構・出土遺物実測図

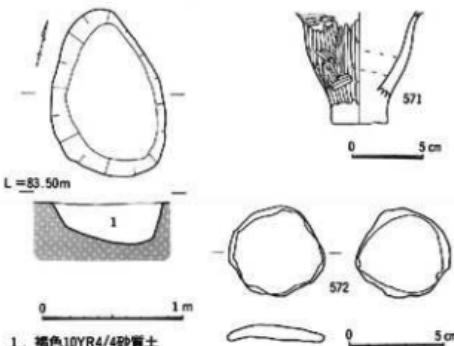
出土遺物（第132図）

覆土中からは弥生土器片44点、サヌカイト片1点が出土した。弥生土器は、壺形土器の口縁部と、臺形土器が出土している。568はラッパ状に開く長い口頸部をもち、頸部下端に断面

三角形の刻目突帯を2条巡らせ
る。569の壺形土器は、内湾気味に
直立する体部から屈曲して外反す
る短い口縁部をもつ。570の底部
は、前2者のものとは考え難いが、
やや厚い底部から直線的に立ち上
がる体部につながっている。

土坑 (SK1176) (第133図)

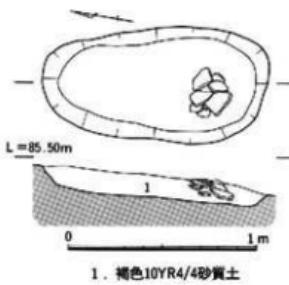
第9調査区(AC-28)で、
SK1129に南接して検出された土
坑である。平面形は卵形を呈し、
長軸1.24m、短軸0.83m、深さは
31cmを測る。



第133図 SK1176遺構・出土遺物実測図

出土遺物 (第133図)

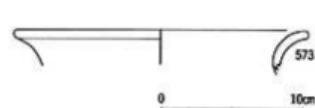
弥生土器片が7点出土している
だけである。571は小形の鉢であ
る。内湾気味に立ち上がり、緩や
かに外反する口縁部をもつ。572は
土製円板である。土器片を利用し
丸く成形しているが、穿孔はみと
められない。



1. 褐色10YR4/4砂質土

土坑 (SK1188) (第134図)

第11調査区(AF-20)で検出さ
れた。この土坑は平面形が長楕円
形を呈し、長軸1.22m、短軸62cm、
検出面からの深さは12cmと浅い。
土坑南側中央で、弥生土器がかたまって検出された。



第134図 SK1188遺構・出土遺物実測図

出土遺物 (第134図)

弥生土器片が24点、結晶片岩片1点が出土している。そのなかで、壺形土器の口縁部を図

化した(573)。同じ個体とみられる体部の破片も出土しているが、接合しない。口縁部は彎曲して外反し、端部は丸くおさめる。

⑤ 柱穴・小穴

小穴 (SP1343) (第135図)

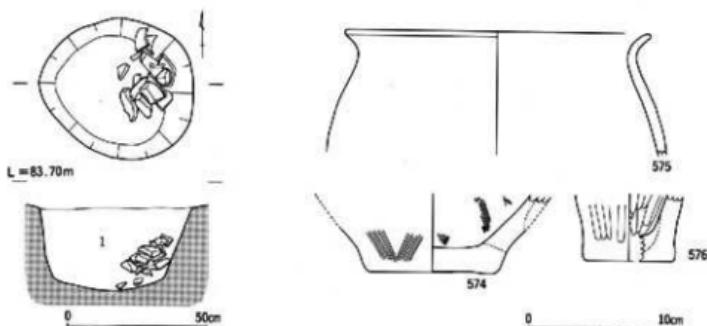
第7調査区(Y-23)で検出された。長軸54cm、短軸49cmのほぼ円形で、深さは27cmを測る。小穴東半に、積み重なるように弥生土器が検出された。土器は二次焼成を受けているのか、軽石状に変質しているものが含まれている。しかしこの小穴内で火を受けたものかどうかは覆土の状況からは判断できない。

出土遺物 (第135図)

弥生土器片が78点出土している。574は壺形土器の底部である。図化はできなかったが、体部上半には、2列の竹管文が観察できる。575は壺形土器である。緩やかに彎曲して外反する口縁部を持つ。576は壺形土器の平底を呈する底部である。

小穴 (SP1371) (第136図)

第7調査区(Y-23)で検出された。長軸80cm、短軸68cmの梢円形で、断面形は逆台形、深さは25cmを測る。



1. 褐色10YR4/4砂質土

第135図 SP1343遺構・出土遺物実測図

出土遺物（第136図）

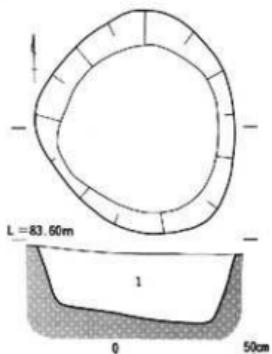
弥生土器片39点、サヌカイト片1点が出土している。577は筒状に延び、両端は緩やかに外反する。長頸壺の口頸部と考えられるが、内面のハケから脚台部、または筒形の器台⁽¹⁾の可能性もある。

小穴（SP1609）（第137図）

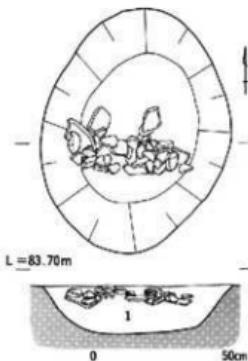
第9調査区（AE-29）で検出された。平面形は橢円形を呈し、規模は長軸87cm、短軸68cmを測り、断面皿状を呈し、深さは17cmである。覆土上面、中央で帶状に弥生土器片が集中して出土した。

出土遺物（第137図）

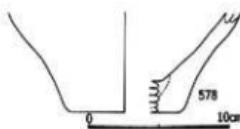
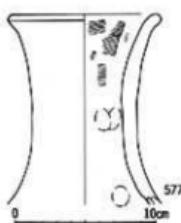
弥生土器片164点が出土している。ほとんどが体部の破片である。578は壺形土器の底部である。



1. 褐色10YR4/4砂質土



1. 褐色10YR4/4砂質土

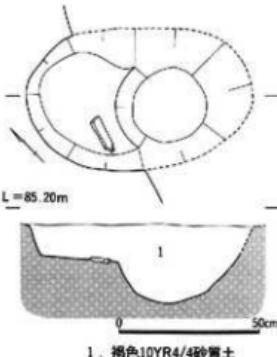


第136図 SP1371遺構・出土遺物実測図

第137図 SP1609遺構・出土遺物実測図

柱穴 (SP1748) (第138図)

第11調査区 (AE-21) で検出された。半分の上面を中世の溝 (SD1011) により削平されている。長軸76cm、短軸44cmの楕円形で、断面形は階段状となっており、最深部は28cmを測る。柱状片刃石斧の未製品がテラス底で出土している。

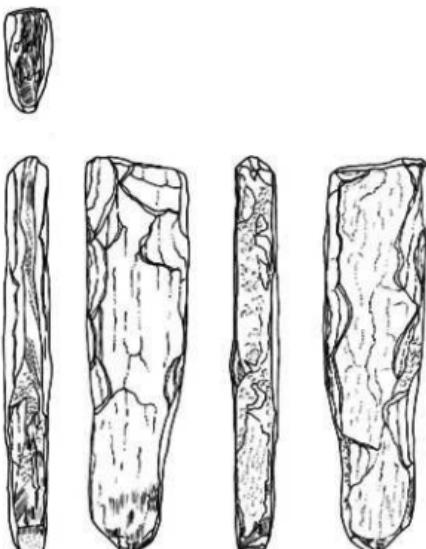


出土遺物 (第138図)

弥生土器片が2点と、柱状片刃石斧未製品が出土している (579)。緑色片岩の形のよい自然石を利用し、敲打による調整後、表面と刃部の一部を研磨している。

柱穴 (SP1762) (第139図)

第11調査区 (AF-20) で検出した。長軸33cm、短軸29cm のほぼ円形で、断面はU字形、深さは39cmを測る。大型蛤刃石斧が滑り込むような状態で出土した。



出土遺物 (第139図)

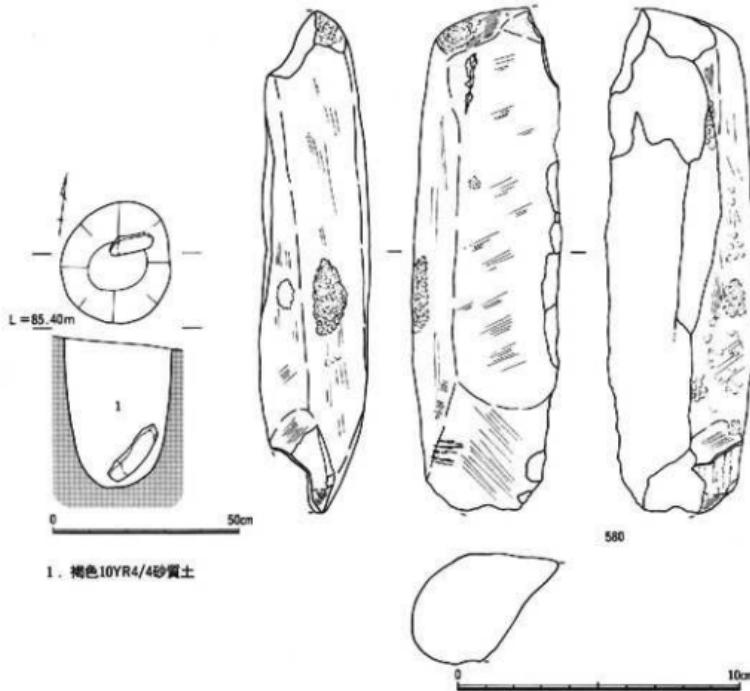
580の他に出土遺物はない。石斧は長軸方向に半分に割れ、欠損している。側面に研磨後につけた粒状の敲打痕の集中がみられる。

柱穴 (SP1880) (第140図)

第11調査区 (AD-22・23) で検出された。長軸58cm、短軸52cmのほぼ円形、断面は逆台形で、深さ26cmを測る。



第138図 SP1748構造・出土遺物実測図



第139図 SP1762遺構・出土遺物実測図

覆土中央で、壺形土器1個体の上半部が集中して出土した。やや浅いが、柱根の部分に抜き取り後、投棄した可能性がある。

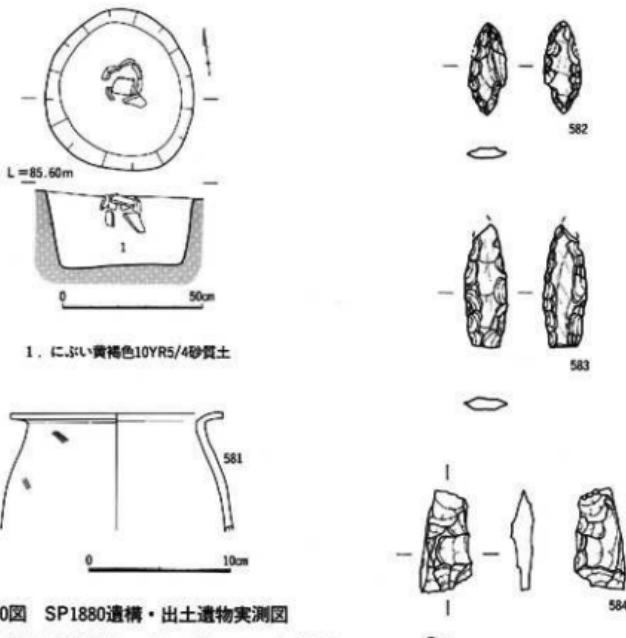
出土遺物（第140図）

581は内彎して立ち上がる体部から、屈曲して外反する口縁部をもつ。

その他の柱穴出土遺物（第141図）

582は、第3調査区（S-21）で検出されたSP1273出土の凸基無茎の石鏃である。柱穴自体は、中世の構築の可能性があり、混入と考えられる。

583の石鏃は、第7調査区（Y-Z-22）のSP1389で出土した。先端を欠損しているが、平基で平面形は細長い船形を呈している。

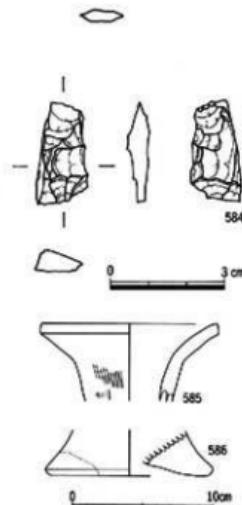


第140図 SP1880遺構・出土遺物実測図

584は、第7調査区(Z-23)のSP1361から出土した楔形石器である。左辺は裁断面、上下辺は両極打法によるものである。深さ22cmの浅い柱穴であるが、弥生土器片19点、サヌカイト片1点がともに検出された。弥生土器には、手づくね土器が含まれている。

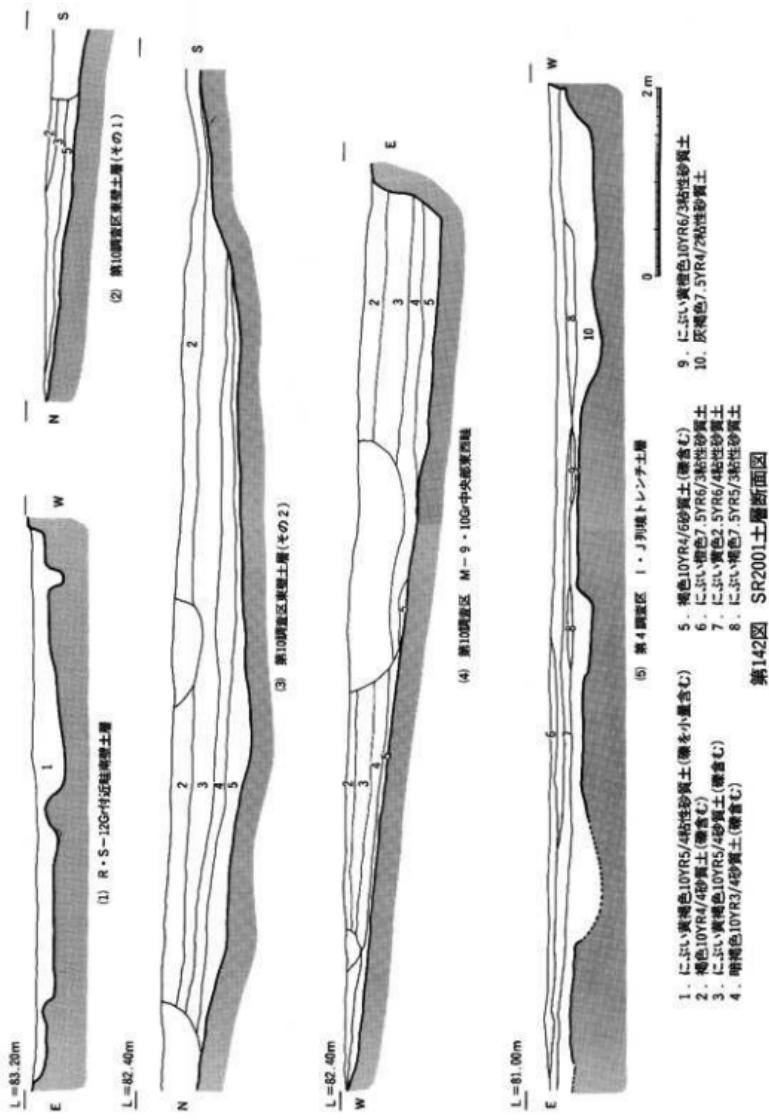
585は、第7調査区(U-18)で検出されたSP1552から検出された壺形土器である。広口壺形土器で、開き気味の頸部から屈曲して外反する口縁部をもつ。

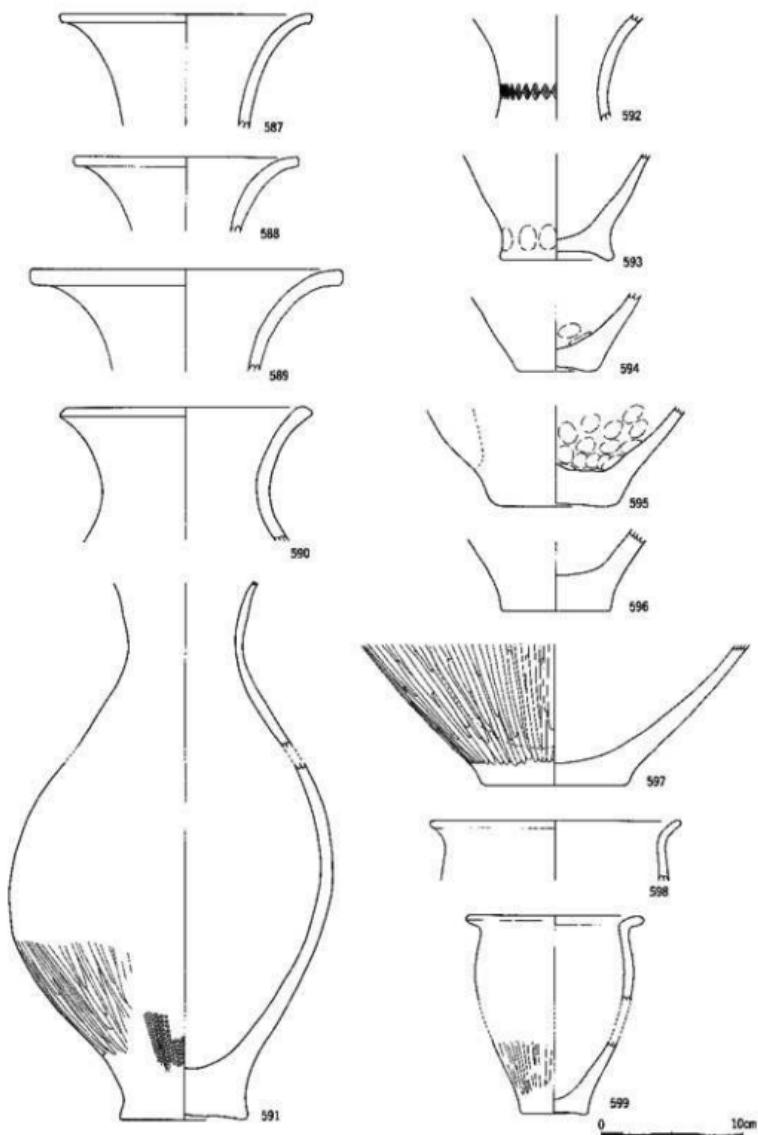
586は、第7調査区(X-22)のSP1548から出土した。鉢形土器の底部とみられ、底部端を大きく外方に拡張させている。



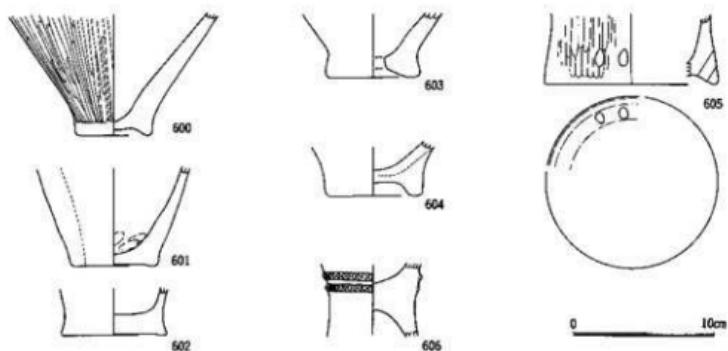
第141図 柱穴・小穴出土遺物実測図

⑥ 自然流路・不明遺構





第143図 SR2001出土遺物実測図 (1)



第144図 SR2001出土遺物実測図 (2)

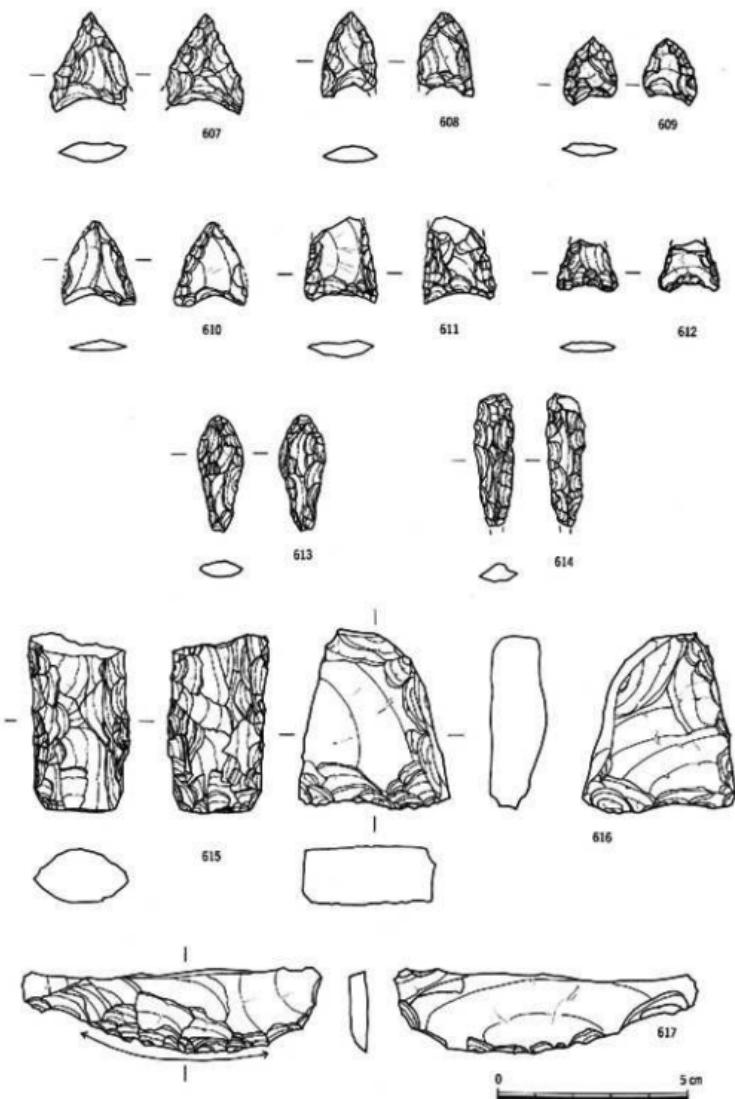
自然流路 (SR2001) (第142図)

第10調査区・第6調査区に端を発し、第4調査区を南下、調査区外に延びる自然流路である。第6調査区から第4調査区南端までの延長距離は約50m、幅は第4調査区で約11mである。これに続く調査区外の延長部分約90mは現在湿地となっているが、それより下流は、段丘を深く切り込む谷川となっている。第4調査区北西隅は耕地整理前まで貯水池として利用されていた(第9図)。

断面形は極浅い弓状を呈しており、地山が粘質土であることも手伝ってか、開析作用はほとんど進んでいない。流路内の堆積土は、第6調査区のR・S-12グリッド付近では、礫を含むにぶい黄褐色砂質土の単一層で(第142図-(1))、調査区付近ではその上層に、灰黄褐色の粘質土が被っている(第5図-6B)。この調査区内ではほとんど遺物は含まれていない。第10調査区の堆積をみると(第142図-(2)~(4))、ほぼ水平堆積で、褐色・にぶい黄褐色・暗褐色等の砂質土である。調査区内的最も下流にあたる第4調査区、I列とJ列の境では(第142図-(5))、にぶい黄褐色・にぶい橙色・にぶい黄色等のやや粘性の強い砂質土が堆積している。第1・6層中に弥生時代の遺物が多く含まれているが、土器は風化が激しい。第8層にあたる堆積層から有舌尖頭器、形態から縄文時代とみられる石錐は第7層にあたる堆積層から出土した。流路上層からは、瓦器や青磁など中世の遺物も出土している。

出土遺物 (第143~149図)

弥生土器片822点、須恵器1点、土師質土器4点、粘土塊1点、有舌尖頭器2点、石錐11点、



第145図 SR2001出土遺物実測図 (3)

石錐1点、石槍1点、スクレイバー3点、打製石庖丁2点、打製石鎌2点、磨製石斧2点、叩石7点、サヌカイト片14点、結晶片岩片13点、石英1点、と種々の遺物が出土している。

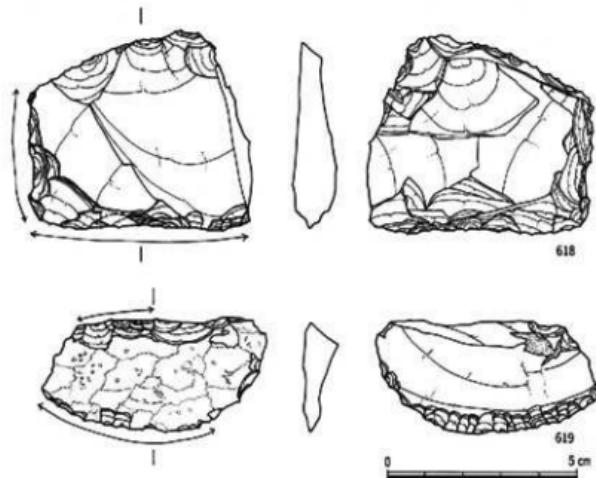
弥生土器は、かなり表面が剝落しているものが多い。壺形土器はラッパ状に開く口頭部をもつ広口壺(587～592)が中心である。591は頭部と体部の境が緩やかに湾曲する形態で、体部の最大径は中位、分厚い底部を持っている。592の頭部には、繊細な櫛描波状文が施される。593～597はいずれも壺形土器の底部とみられる。やや上げ底のものと平底がある。

甕形土器は、598・599のように、屈曲して短く外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめるものがみられる。いずれも口径が最大径となっている。600～603は底部であるが、上げ底、平底それぞれみられる。そのうち、603は焼成前に穿孔されている。602は、形態・胎土ともにやや異質で、同時に出土している土器群より、時期が下るものと考えられる。

604・605はともに鉢形土器の上げ底の底部である。605は、直立気味の体部でジョッキ形⁽³⁾を呈するものと思われる。底部端には斜めに2孔穿孔がみられる。606は高杯形土器の脚柱部である。脚柱上端に2条の突帯を巡らし、刻目を施す特徴的な形状である。

607～613は石鎌である。613が凸基有茎で、それ以外はすべて凹基無茎である。他に、旧石器時代と考えられる剝片(第7図-4)や、縄文時代のものと考えられる9～12の石鎌、5・6の有舌尖頭器、7・8の尖頭器状の石器が出土している(第8図)。

615は、石槍の基部、616は楔形石器である。617～619はスクレイバーである。618は両面調整により2辺に刃部が形成され、617・619は片面調整による。

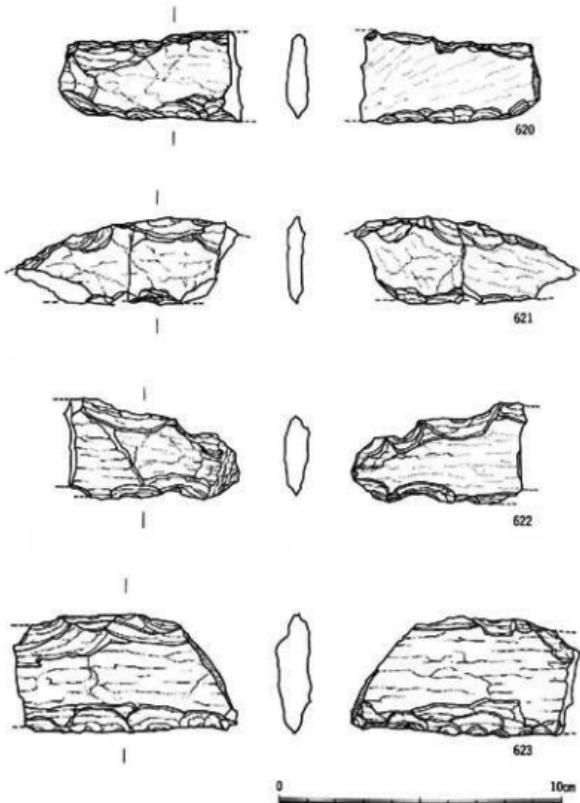


第146図 SR2001出土遺物実測図 (4)

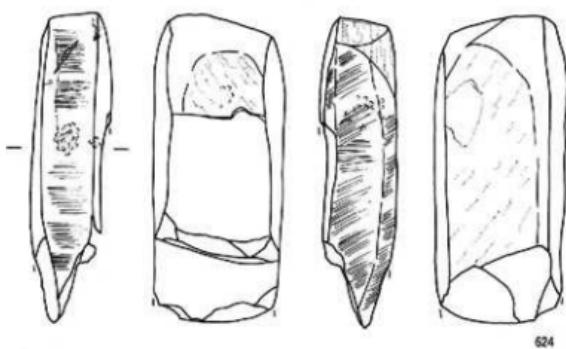
620～623は打製石庖丁と打製石鎌である。621が石鎌の先端部に近い部分と考えられ、622は基部に近く上下刃に抉りを持つ。620・623は打製石庖丁で端部の抉りはない。

624・625はいずれも刃部を欠損する柱状片刃石斧である。624は基部の抉り入りがみられず、625では、敲打による抉り入りが長辺側にあり、刃面は幅の広いものである。

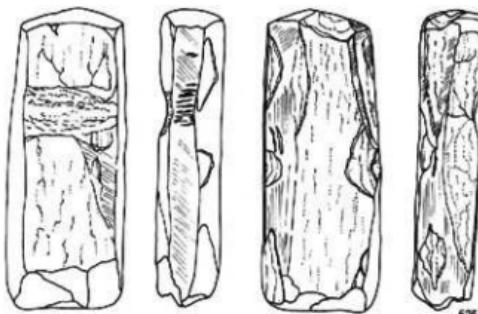
626～631は、叩石である。626は偏平な円錐の中央に粒状の敲打痕と、縁辺の一部に強い敲打痕が認められる。627～629は円錐の中央部や縁辺に粒状の敲打痕が、630は、棒状の円錐の両端に敲打痕が認められる。631は、同様に棒状の叩石として捉えたが、石棒である可能性も考えられる。



第147図 SR2001出土遺物実測図 (5)



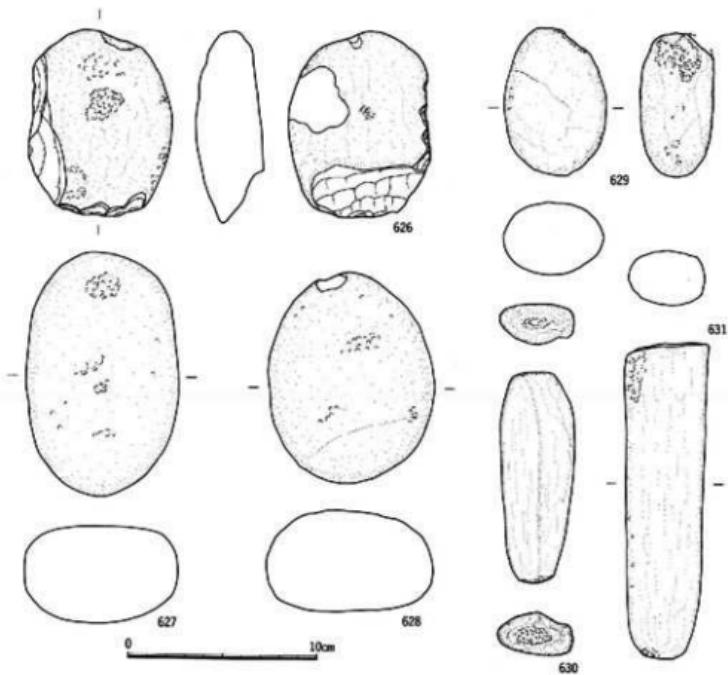
624



625

0 10cm

第148図 SR2001出土遺物実測図 (6)



第149図 SR2001出土遺物実測図 (7)

不明遺構 (SX1005) (第150図)

第2調査区 (X・Y-17・18) で検出された。不整形な溝状の遺構である。東西に長く、長軸7.5m、短軸は1.56m。断面形は概ね皿状を呈するが、東端で長軸3.04m、短軸1.24mの隅丸方形に一段落ちている。最深部で49cmを測る。竪穴住居SB1001のプランがこの遺構の影響を受けているとみられるので、住居に先立って構築、あるいは、並存したと考えられる。

出土遺物 (第150図)

覆土からの出土遺物は、弥生土器片326点、土師質土器2点、瓦質土器1点、石鏃2点、スクレイパー1点、サスカイト片25点である。遺構面積が広いことから、中世の柱穴等にともない遺物が混入している (第200図-778)。

632は先端を欠損しているが、円基無茎の石鏃である。633は剝片縁辺を利用したスクレイパーである。

⑦ 遺構に伴わない遺物

遺構以外から出土した弥生時代の遺物（弥生土器・石器）総数は、8,614点。調査地内の出土地区の分布をみると、遺構の集中する第2・7調査区を中心に、その周辺部で多く出土している。5・6・10区では出土点数は極端に少ない。

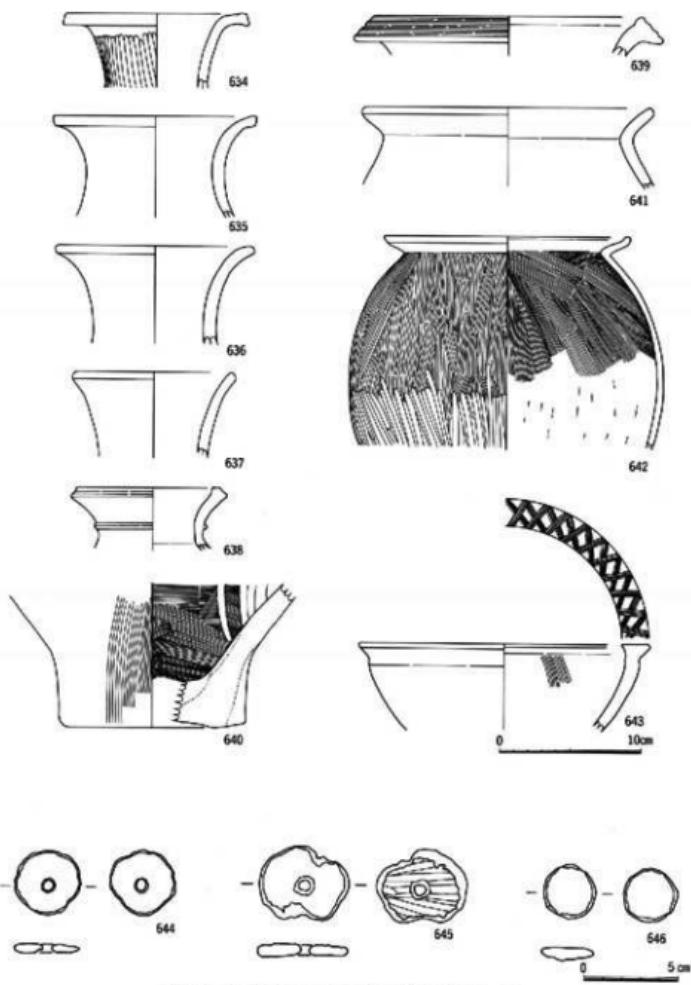
弥生土器（第151図）

634～640は壺形土器である。無文の広口壺形土器では、口縁部の外反の度合いが、屈曲気味に大きく開くもの（634）、彎曲して大きく開く（635）、緩やかに彎曲する（636）、直線的に外反する（637）、とそれぞれ異なっている。これらは、各遺構出土の土器の中にも含まれている、それぞれのタイプである。638・639は、本遺跡内では、他に例がなく、前者は、彎曲して口縁端部が肥厚し、上端面は平坦に、側端面は、凹面に仕上げられている。さらに頸部に1条の突帯を持つ。639は口縁端部を下外方に拡張し、端面に3条の凹線を施す。拡張の大きさ等から、中期後半、凹線文の盛行期のものと考えられる。

641は端部を丸くおさめる甕



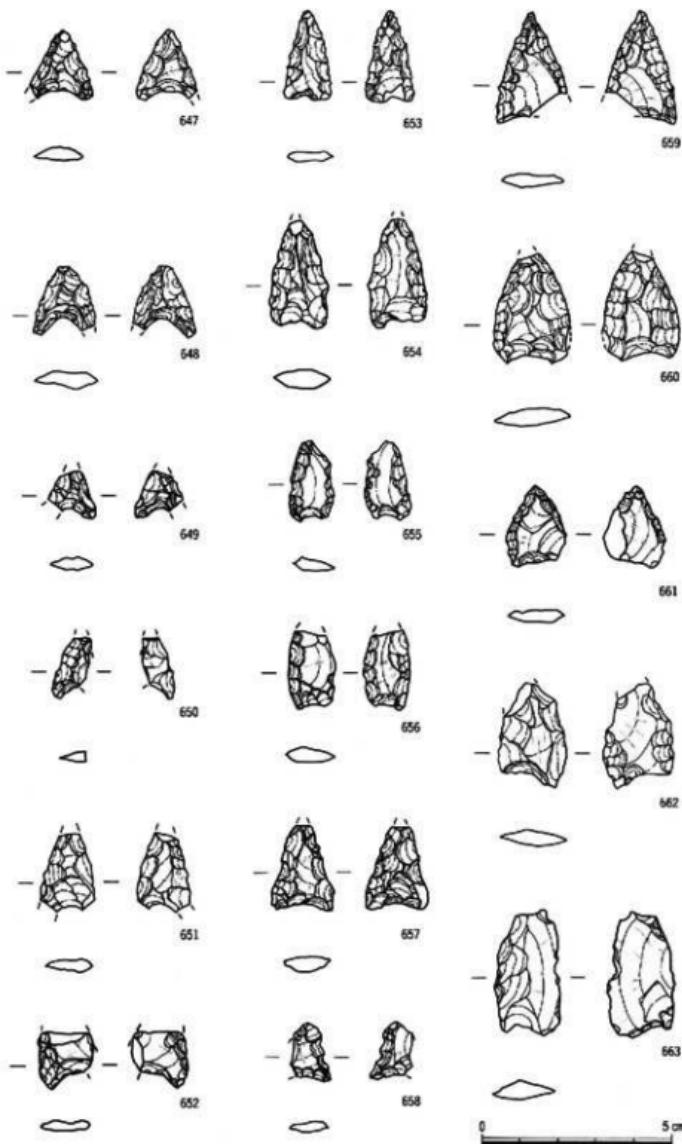
第150図 SX1005遺構・出土遺物実測図



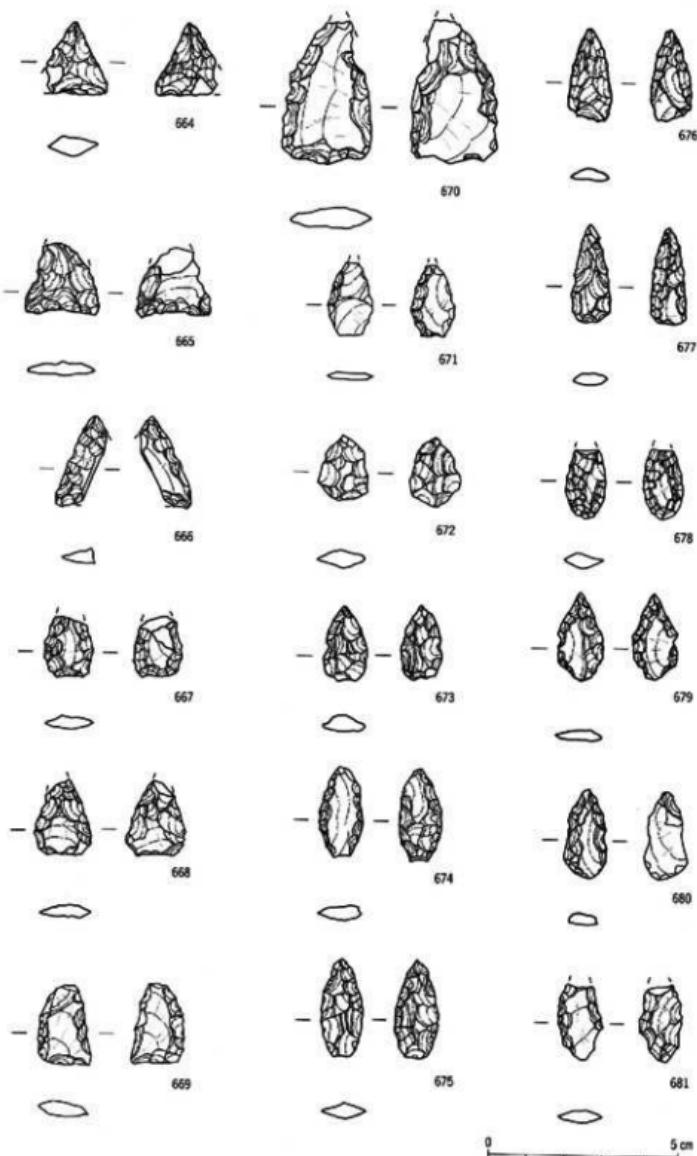
第151図 遺物包含層等出土遺物実測図 (1)

形土器、642は、球形の体部、鋭く屈曲して外反する口縁部、端部はやや上方に拡張しながら丸くおさめる。器壁が薄く、焼成は良好である。角閃石粒を含んでおり、讃岐地域からの搬入品とみられる。

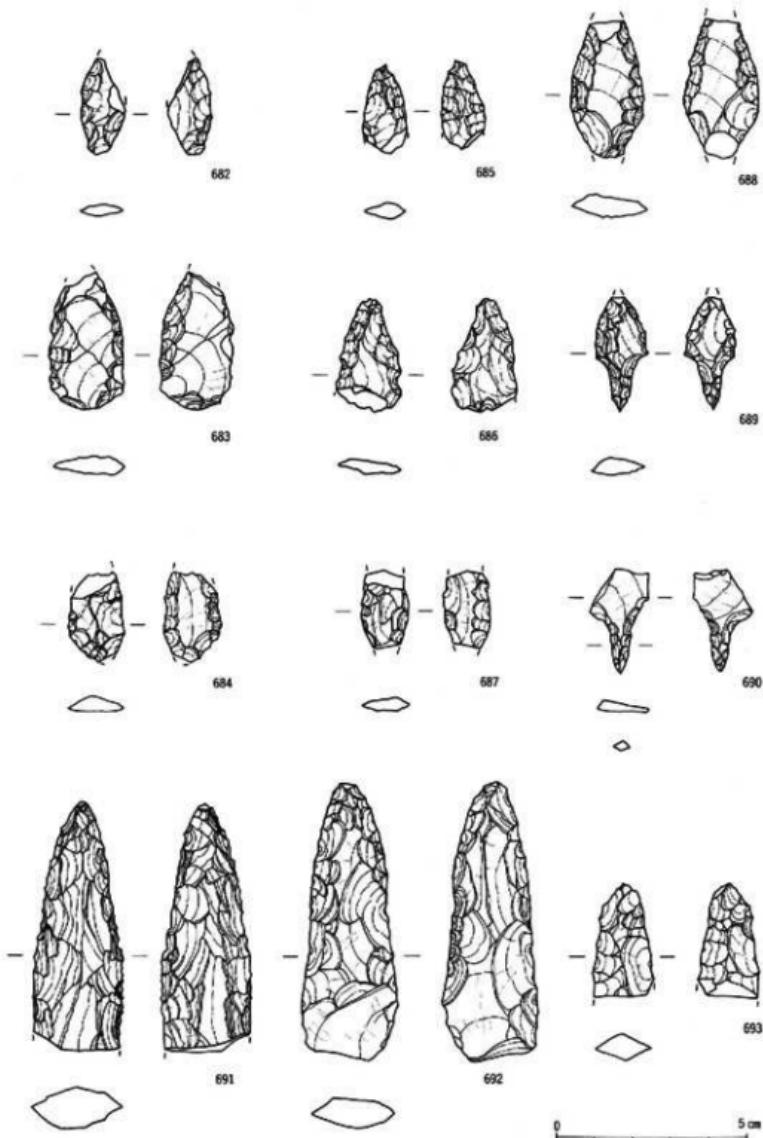
643は、鉢形土器。口縁端部を内外に拡張し上端面に、櫛描の斜格子文が施されている。



第152図 遺物包含層等出土遺物実測図 (2)



第153図 遺物包含層等出土遺物実測図 (3)



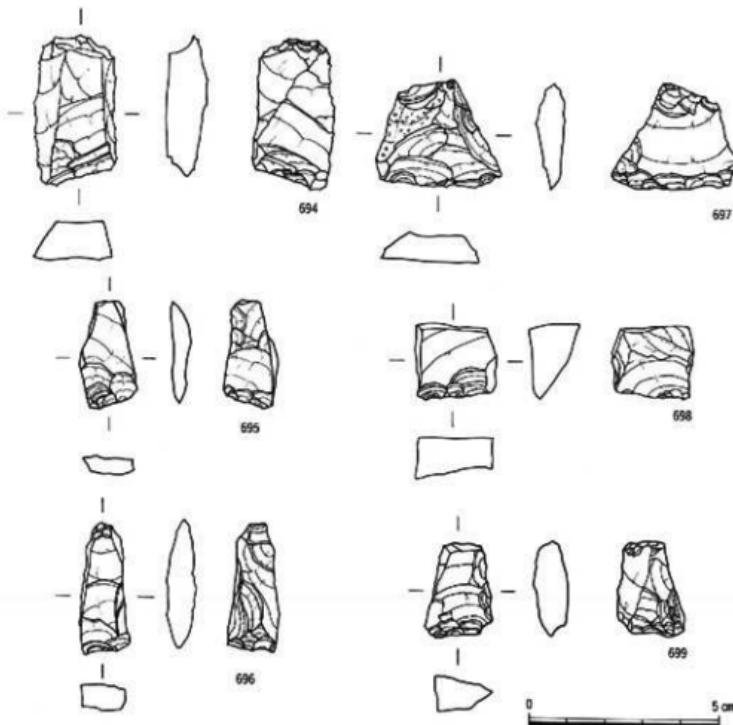
第154図 遺物包含層等出土遺物実測図 (4)

土製品（第151図）

土器片利用の土製紡錘車が2点（644・645）、穿孔されていない土製円板が1点出土している。遺構出土の場合でも、未穿孔や、途中までの穿孔のものが目立つ。

石鎌・石錐・石槍（第152～154図）

石鎌は、基部の形状でみれば、647～652・654～662は凹基無茎、663は同末製品、653・664～666・668～670は平基無茎、667・671～684が円基無茎、685～687は不明、688は凸基有茎、689は平基有茎である。平面形は二等辺三角形を基本とするが、側線が内湾弧を描く形状のもののがかなりあり、木葉形、ないしは船形になっているものが円基無茎鎌の中に目立つ。



第155図 遺物包含層等出土遺物実測図（5）

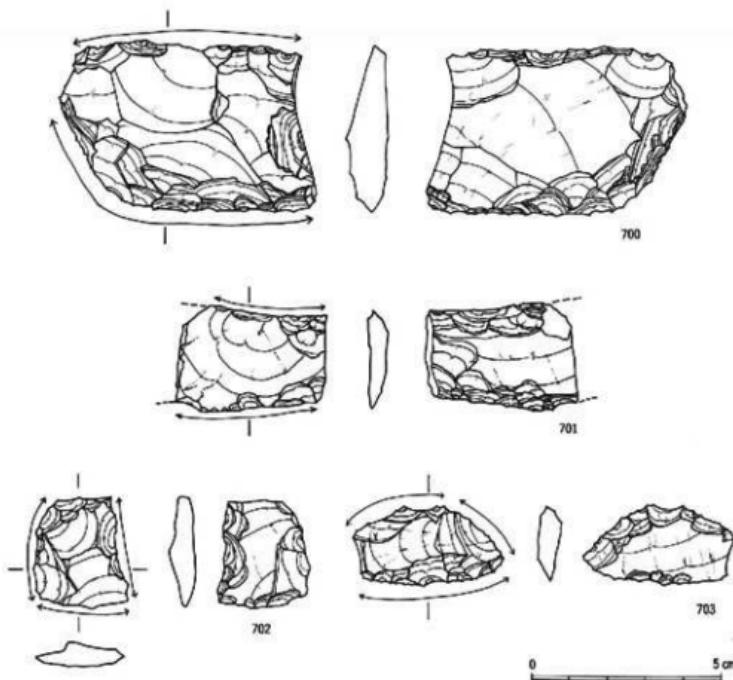
他に、明瞭ではないが、側縁基部に翼状の突起を持つ657・658がみられる。689は茎部の調整が非常に丁寧で石錐の可能性もあるが、鐵身部の形状から石錐と捉えた。

690は石錐、基部の形は不定形で、調整も粗雑である。

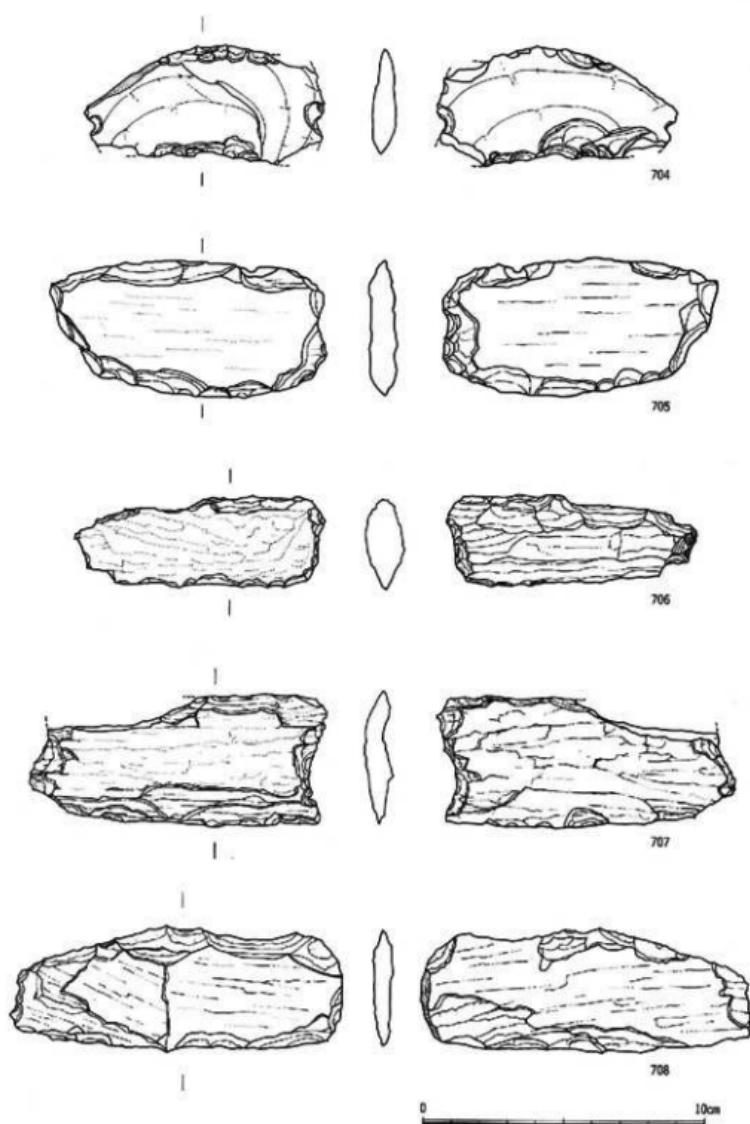
691～693はともに基部を欠損しているが、石槍である。691は、階段状の剥離を多く観察することができ、両極打法を多用しながら、丁寧に成形・調整を行っている。断面形は菱形に近い。692は、691に較べると、やや調整は粗い。剥離面の大きさは不揃いで、形状も非対称である。693は前2者に較べると、やや小振りであるが、断面形は菱形を呈している。

楔形石器（第155図）

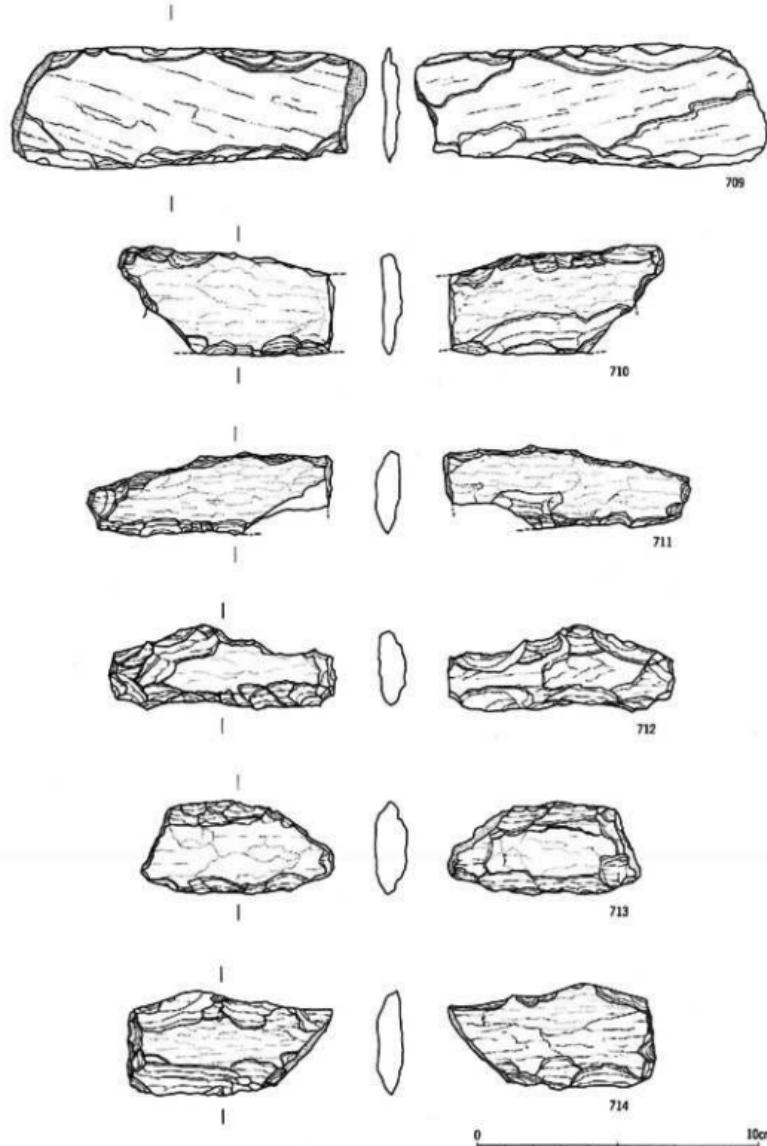
694～699は楔形石器である。多くは左右両刃が裁断面で、上下端は両極打法による。



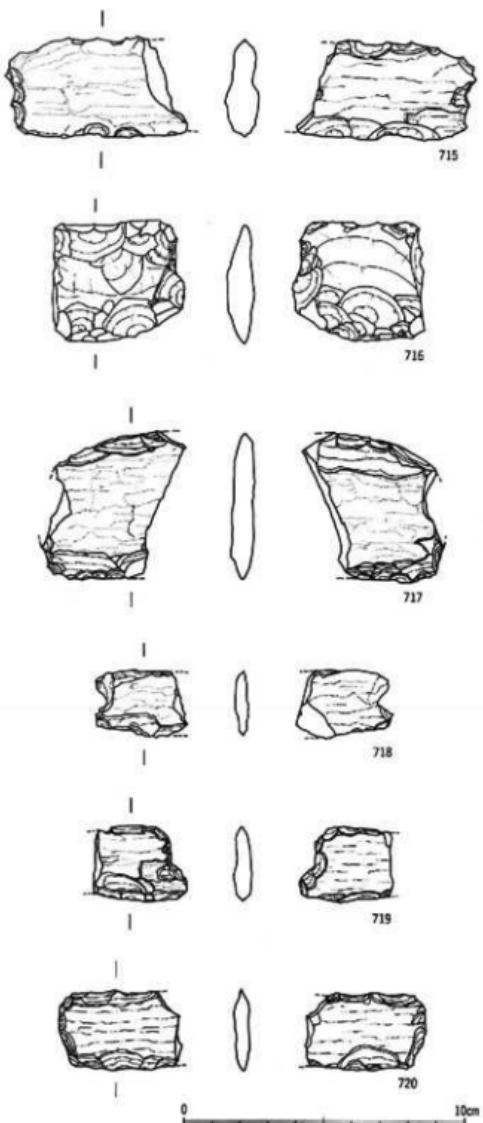
第156図 遺物包含層等出土遺物実測図 (6)



第157図 遺物包含層等出土遺物実測図 (7)



第158図 遺物包含層等出土遺物実測図 (8)



スクレイパー（第156図）

700～703はいずれも剥片を利用し、縁辺部に両面調整あるいは、両極打法による粗い刃部を形成している。

打製石庖丁（第157～160図）

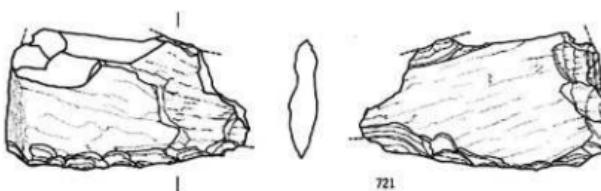
704・716は、本遺跡内では数少ないサヌカイト製の打製石庖丁である。704は両端部に小さな抉りを施し、716は半分欠損しているが、わずかに抉りが認められる。705以下は、結晶片岩製で、端部に抉りのあるもの（705・707・715・718・719）とないもの（706・708・709～714・720～726）がある。欠損品が多く、はっきりしたことはいえないが、大きさにはいくつかのタイプがあると考えられる。

石鎌・石鋸（第161図）

727は、緑色片岩の剥片で、幅広い部分の両端に擦り切るようすに抉りを施している石器である。抉りと全体の形状から、石鎌と考えたが、刃部は特に調整を加えているわけではなく、疑問も残る。

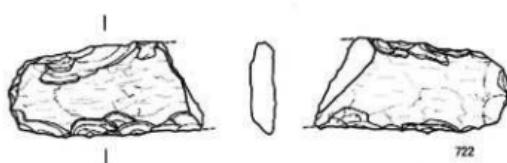
728・729は、石鋸状の石器である。刃部が擦り潰されている。刃部の形成は、728が両極

第159図 遺物包含層等出土遺物実測図 (9)



721

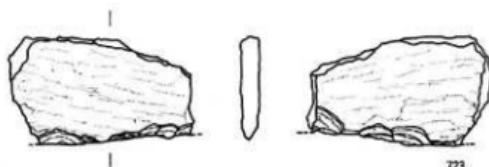
打法、729は側片の縁辺をそのまま利用したものである。



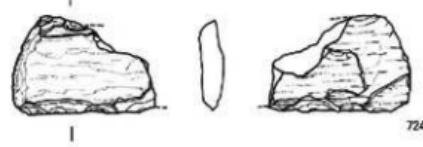
722

磨製石斧（第162～164図）

730～735は柱状片刃石斧である。刃面側基部の抉り入りは、施されていない（730・735）か、敲打による滑り止め程度の簡略なもの（731・732）となっている。また、側離面・自然面や、敲打痕等をそのまま残すものも目立ち、全面を丁寧に研磨するものはほとんどない。

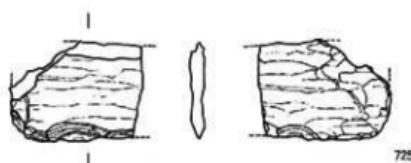


723



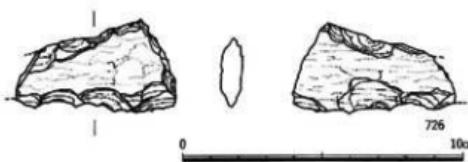
724

736は、扁平片刃石斧で、これも丁寧に研磨されているのは刃部だけである。



725

737は小型円柱状石斧、738・739は小型扁平石斧で、737は未製品である。



726

740は大型蛤刃石斧。刃部を欠損するが、刃部のみ丁寧な研磨を施す。基部は自然面と敲打痕を多く残す。

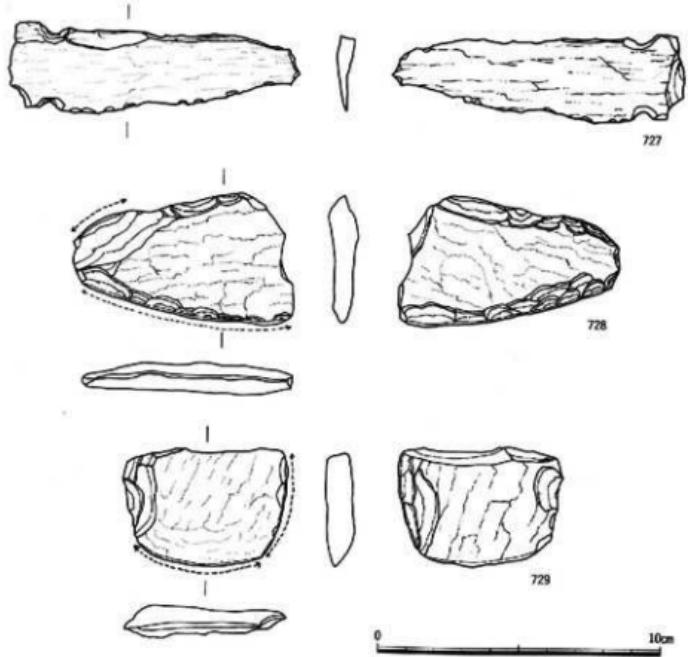
叩石（第164図）

741は自然縫を利用、縁辺を中心多く敲打痕を残す。

第160図 遺物包含層出土遺物実測図 (10)

0

10cm



第161図 遺物包含層出土遺物実測図 (II)

注

- (1) 百間川今谷遺跡等で、「く」の字状に外反する口縁部をもち、最大径の張る形態を壺IIと分類する。岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財調査報告51百間川兼基遺跡1、百間川今谷遺跡1」1982
 - (2) 愛媛県・城ノ向遺跡に器台とした中期後半の例があり、器高・口径もほぼ同じものである。後期の例として、矢ノ塚遺跡・仮ノ宗遺跡・旧練兵場跡遺跡で出土している。
- 財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター「城ノ向遺跡」「一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財調査報告書」II 1981
- 香川県『香川県史13資料編考古』1987
- (3) 吉備で中期前葉に底部に2孔一対の穿孔がある鉢形土器がみられる。西讃三豊郡天神遺跡でも同様の例がみられる。

岡山県教育委員会「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40 1981

香川県『香川県史13資料編考古』1987



730



731

0

10cm

第162図 遺物包含層等出土遺物実測図 (12)



732

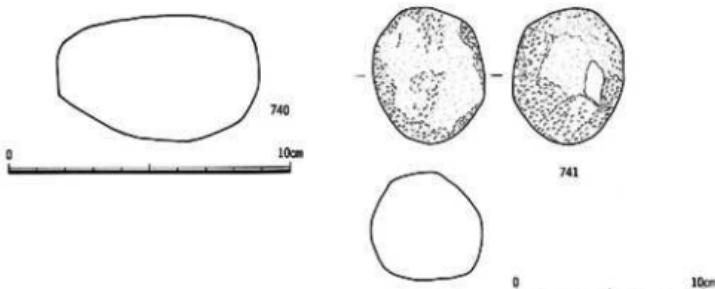
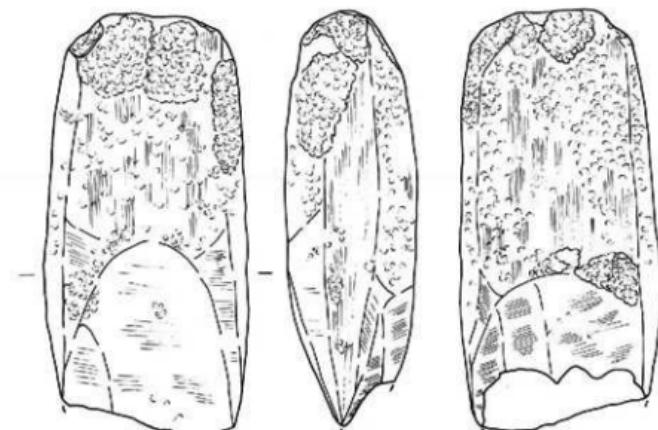
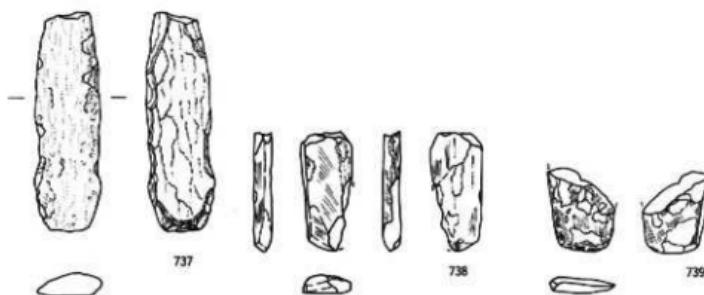


735



0 10cm

第163図 遺物包含層等出土遺物実測図 (13)



第164図 遺物包含層等出土遺物実測図 14

(3) 中世

中世には、掘立柱建物、土塙墓等がつくられる（第165図）。遺物包含層出土の遺物から、12世紀～16世紀の時期幅があるとみられるが、個々の造構の時期を特定することは困難である。中世に構築されたとみられる遺構は、掘立柱建物跡19棟、溝7条、土塙墓・土坑27基、柱穴・小穴50基である。段丘面の中央部やや東よりに遺構は集中する傾向である。掘立柱建物跡は全体に散在傾向にあるが、棟の方向からみると大きく2方向に分かれる。また、溝はSD1011、SD1006、SD1007が真北からやや東に振った同じ方向を指しており、本来一条の溝であった可能性が高い。SD1005、SD1010もこれらと直交に近い方向を示しており、これらによって区画されていた可能性が考えられる。

① 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡（SA1001）（第166図）

第1調査区・第2調査区（W-12～15）にまたがって検出された。規模は1間×1間、主軸方向は真北より82°東に偏し、梁間2.80m、桁行4.80mを測る。中央部分に、水路による調査不可能な部分を挟んでいるので、桁行2間の可能性も考えられる。

P-1から土師質土器の細片が出土している。

掘立柱建物跡（SA1002）（第167図）

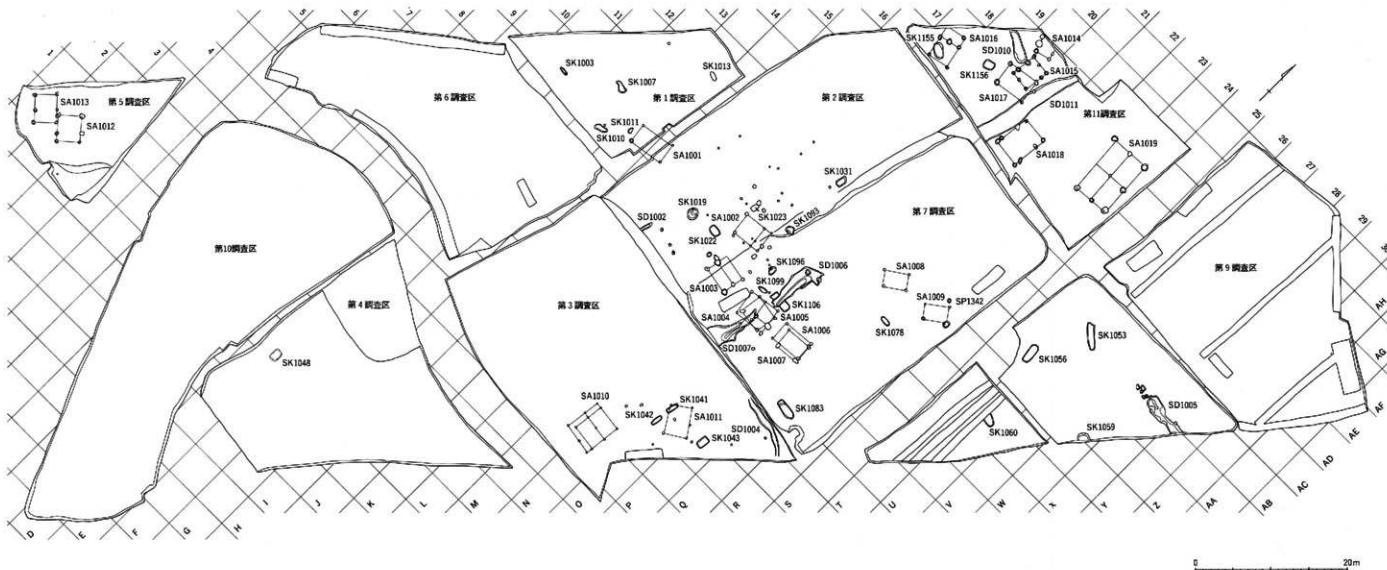
第2・7調査区（X・W-18）で検出された。規模は梁間1間×桁行3間（3.00m×4.00m）、主軸方向はN83°Eである。P-1・3、9・4、7・6は、それぞれ対応するものの、P-5・8が偏在するために、柱心間距離は一定しない。P-2・10の存在から、区画された部分が想定でき、この部分が弥生時代の土坑SK1029と重なっているため、弥生時代の遺物と中世の遺物の混在がみられる。

出土遺物（第167図）

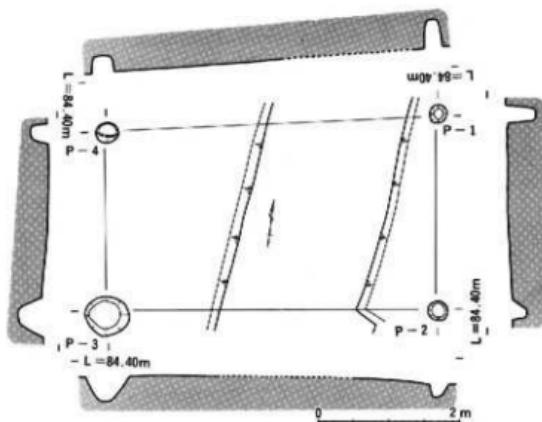
742と743はP-4から出土した。742は片口のついた土師質のこね鉢である。口縁端部は肥厚させ、端面は凹面に仕上げる。743は土師質で、断面円形の脚部である。

掘立柱建物跡（SA1003）（第168図）

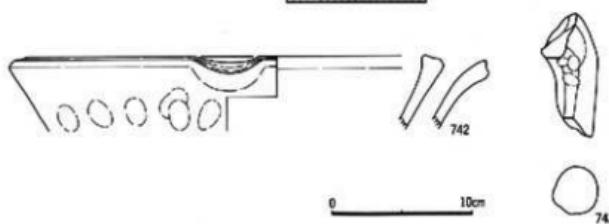
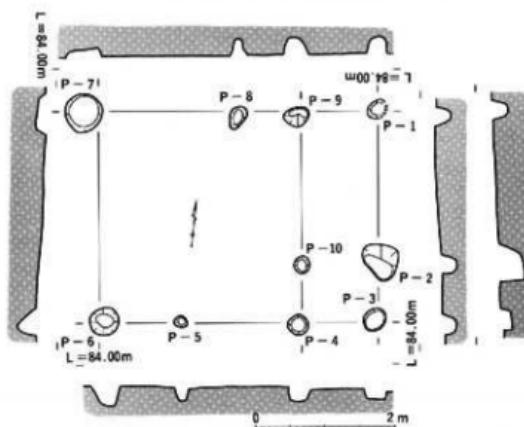
第2・7調査区（V-18・19）で検出した。規模は梁間2間×桁行1間（3.14m×3.80m）で、北西隅の柱穴を欠く。棟持柱を持つ構造とみられる。主軸はN82°Wを指す。P-1～2、



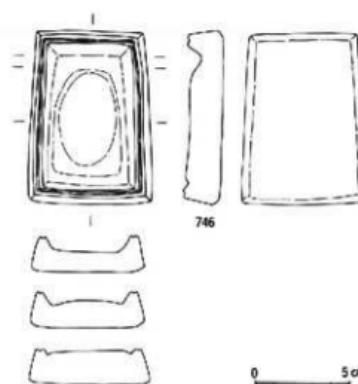
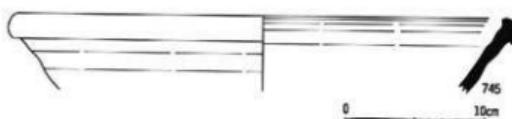
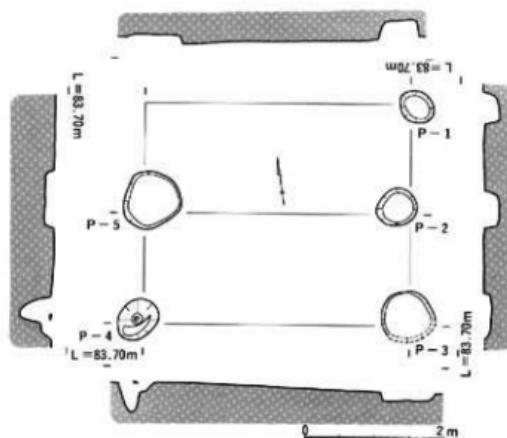
第165図 中世の遺構配置図



第166図 SA1001遺構実測図



第167図 SA1002遺構・出土遺物実測図



第168図 SA1003遺構・出土遺物実測図

2～3、4～5、それぞれの柱心間距離はほぼ1.6mで、一定である。

出土遺物（第168図）

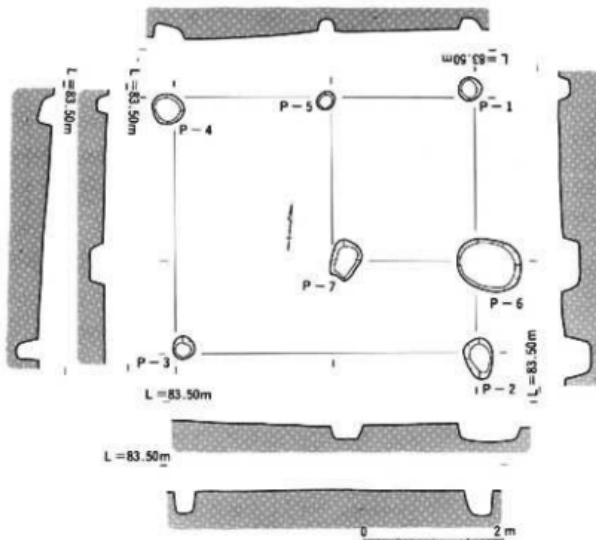
P-5から出土した744は土師質土器の碗である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや内彎。内外面ともにヨコナデを施す。745は東播系のこね鉢である。体部は直線的に立ち上がり、端部は上下に拡張、端面は丸く、口縁部外面に黒色帯がめぐる。

P-4から土師質土器片2点、瓦質の長方形硯が1点出土している。硯は長さ9.2cm、幅6.6cm、厚さ1.9cmである。

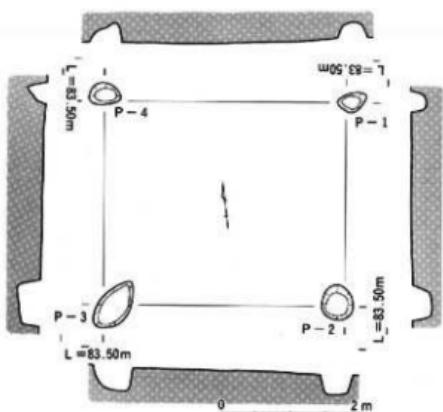
掘立柱建物跡（SA1004）（第169図）

第7調査区（V-19・20）で検出された。規模は梁間1間×桁行1間（3.62m×4.30m）だが、P-5・6・7の存在から、区画を持つ構造であろうと推定できる。この区画部分の柱心間距離は2.2～2.4mである。主軸方向は、真北から84°東に偏している。遺物はP-2から土師質土器の細片が出土している。

掘立柱建物跡（SA1005）（第170図）

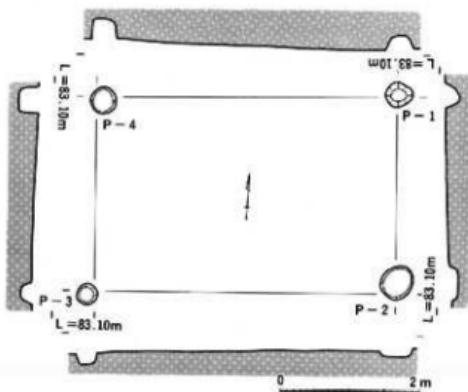


第169図 SA1004遺構実測図



第170図 SA1005遺構実測図

第7調査区(U・V-19・20)で検出された。梁間1間×桁行1間(3.00m×3.50m)の規模を持つ。主軸は真北から82°西に偏する。SA1004とほぼ重なる形で検出されており、どちらが先行するかは不明であるものの、建て替えが行われた結果であろうと考えられる。遺物はP-3に弥生土器片が混入しているだけである。



第171図 SA1006遺構実測図

掘立柱建物跡(SA1006)(第171図)

第7調査区(U・V-20・21)で検出された。規模は梁間1間×桁行1間(2.70m×4.30m)である。主軸方向は真北から82°東に偏している。柱穴は径40cm前後のほぼ円形である。柱穴からの出土遺物はない。

掘立柱建物跡(SA1007)(第172図)

第7調査区(U・V-21)で検出された。規模は梁間1間×桁行1間(2.70m×3.50m)である。主軸方向はN82°Eである。柱穴は北西隅のP-4が円形である他は長軸60~90cmの長楕円形を呈する。柱穴からの出土遺物はない。SA1006とほぼ重なっており、先後関係は不明であるが、建て替えが行われた結果と考えられる。

掘立柱建物跡(SA1008)(第173図)

第7調査区(Y-21・22)で検出された。規模は梁間1間×桁行1間(2.20m×3.20m)である。主軸方向は真北から53°東に偏する。柱穴は径40cm前後のほぼ円形で、深さは48~19cmである。遺物はP-4から土質土器片が出土している。

掘立柱建物跡(SA1009)(第174図)

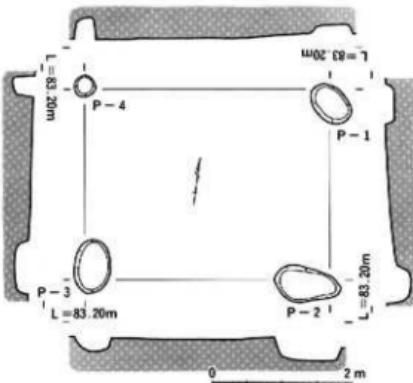
第7調査区(Y-Z-23)で検出された。規模は梁間1間×桁行1間(2.20m×3.20m)である。主軸方向は真北から55°東に偏する。柱穴は、P-1・4はほぼ円形であるが、P-3は重なるビットの一部、P-2は土坑状の大きいプランであるが、その中の一部分が柱根部分にあたる。遺物は弥生土器片のみ混入があるだけである。

掘立柱建物跡(SA1010)(第175図)

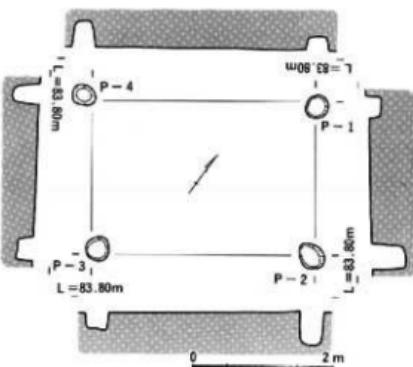
第3調査区(P-Q-18・19)で検出された。梁間1間、桁行2間で、南側と西側に庇をもつ構造である。庇の部分を含めて4.40m×5.10mを測る。建物本体部分は3.60m×4.30m、桁行の柱心間距離は2.15mである。主軸は真北から7°東に偏する。庇部分は幅0.80mである。

建物の中央に柱穴P-7があり、瓦質土器の椀が出土した。一部を欠くが、底からやや浮いた状態で、上向き、やや上位に拳大の砂岩が出土している。地鎮に伴う行為の遺物であろうと考えられる。柱抜き取りの後の、または、地鎮目的の小穴の両方の可能性が考えられる。

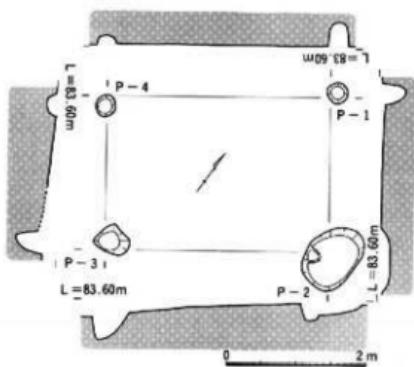
出土遺物(第175図)



第172図 SA1007遺構実測図



第173図 SA1008遺構実測図

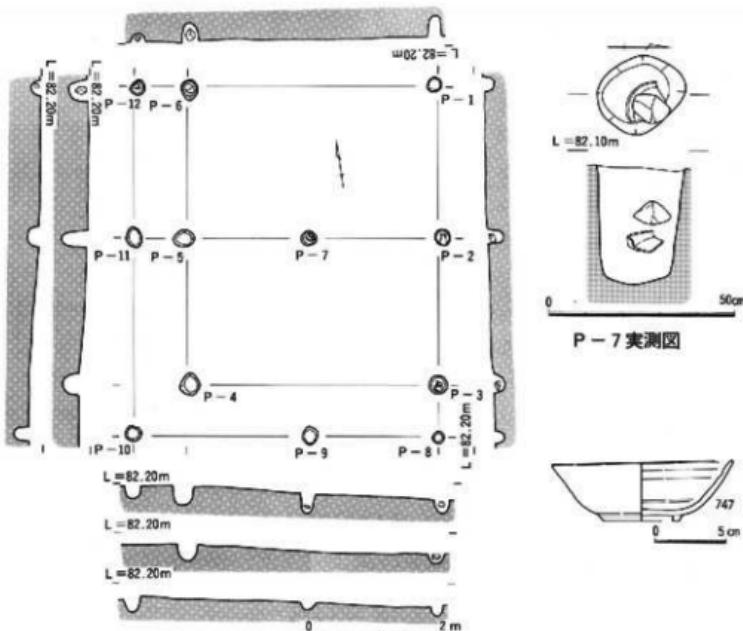


第174図 SA1009遺構実測図

柱穴より出土した瓦質土器の椀(747)は、体部・口縁部やや内縁気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部は回転糸切り後、断面方形の低い高台を張り付ける。内面にはハケともユビナデともみえる線条痕が観察できる。

掘立柱建物跡(SA1011)(第176図)

第3調査区(R・S-20・21)で検出された。規模は梁間1間×桁行2間(3.00m×4.00m)である。



第175図 SA1010遺構・出土遺物実測図

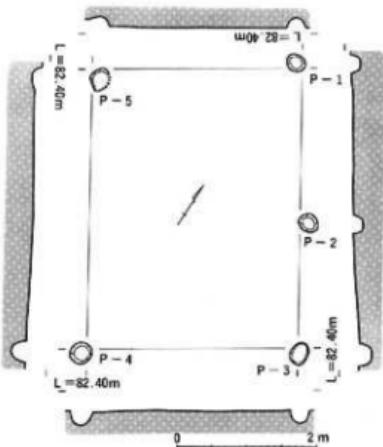
る。主軸は真北から32°西に偏する。柱穴は径30cm内外で、梢円形を呈するものが多い。桁行で西辺中間の柱穴を欠く。東辺中間のP-2も、やや南に偏在することから、東南側に入り口が設けられる構造と考えられる。P-4から土師質土器片が出土している。

掘立柱建物跡(SA1012)(第177図)

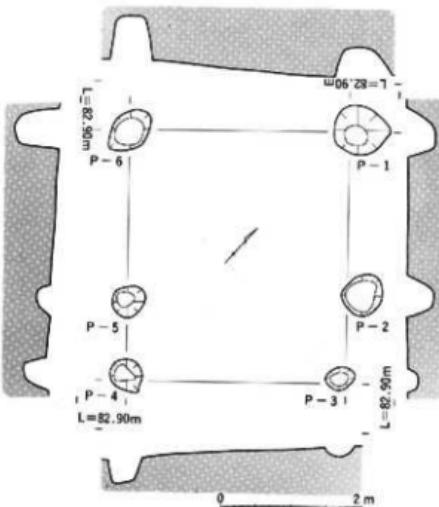
第5調査区(L・M-3・4)で検出された。規模は梁間1間×桁行2間(3.14m×3.60m)である。棟方向は真北から42°西に偏する。柱穴は円形で、径は40cmから80cmとばらつきがある。桁行の柱心間距離はP-1・2間は2.35m、P-5・6間で2.45mとやや南側に偏在する。出土遺物はなく、この調査区自体の出土遺物が少ないため、時代についてはまったく不明である。

掘立柱建物跡(SA1013)(第178図)

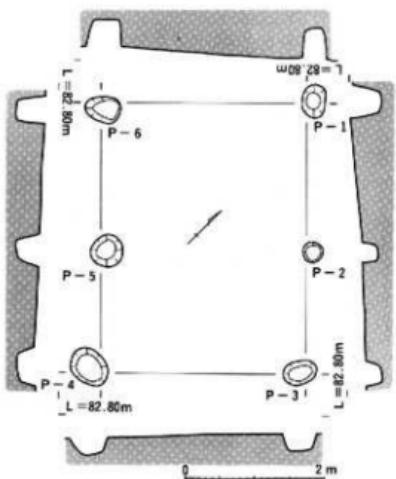
第5調査区(K・L・M-2・3)で検出された。規模は梁間1間×桁行2間(2.93m×3.86m)である。棟方向は真北から45°西に偏する。柱穴は円形または梢円形で、径は30cmから60cmとややばらつきがある。P-1・2間、P-5・6間の柱心間距離は2.07mでわずかに南側に偏在する。SA1012



第176図 SA1011遺構実測図



第177図 SA1012遺構実測図



第178図 SA1013遺構実測図

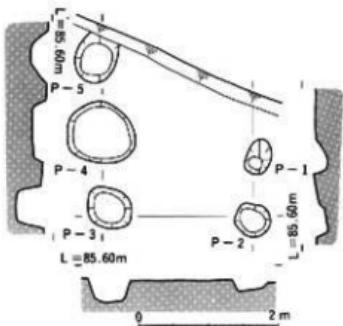
と一部接しており、棟方向がほぼ一致することから、先後関係は不明だが、建て替えが行われた結果であろうと考えられる。

掘立柱建物跡 (SA1014) (第179図)

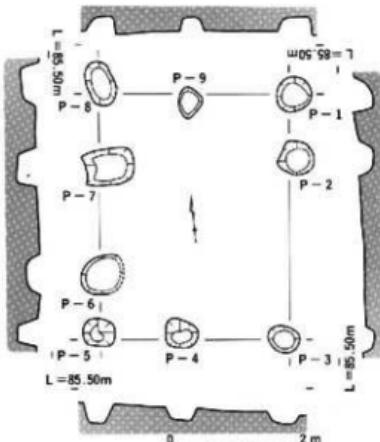
第11調査区 (AF-20) で検出され一部が調査区外に延びる。規模は梁間1間 (2.14m)、桁行は検出部分で2間 (2.50m) である。棟方向は真北から17°西に偏する。柱穴はほぼ梢円形で、P-4は大きく、浅いが、P-1に対応するものと捉えた。

掘立柱建物跡 (SA1015) (第180図)

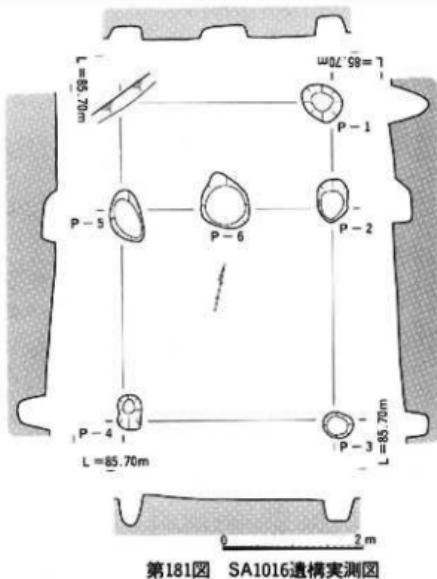
第11調査区 (AE・AF-20・21)



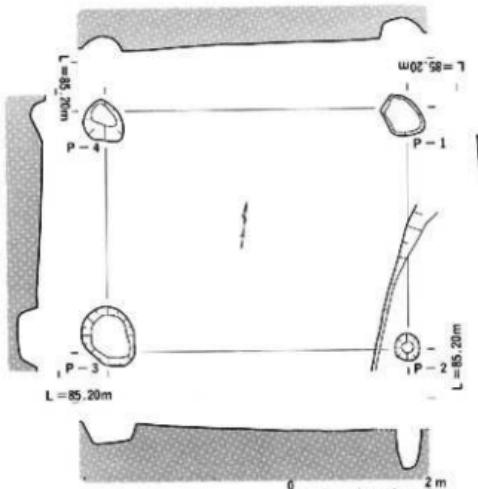
第179図 SA1014遺構実測図



第180図 SA1015遺構実測図



第181図 SA1016遺構実測図



第182図 SA1017遺構実測図

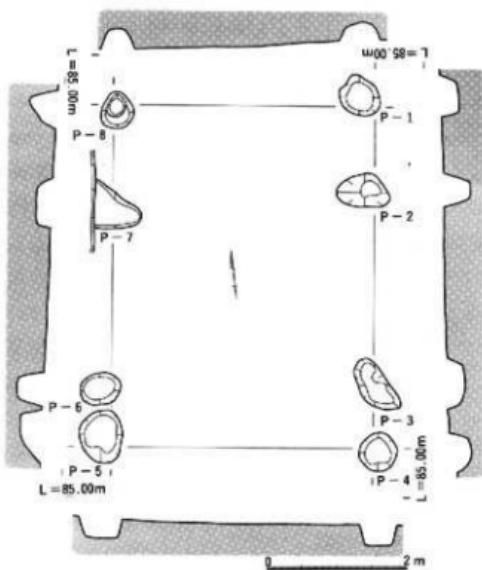
で検出された。梁間2間×桁行3間(2.70m×3.50m)の規模で、棟持柱を持つ構造である。棟方向は真北から5°東に偏する。桁行でP-2・3間にP-6と対応する柱穴を欠く。他の柱はそれぞれが対応するものの、0.92~1.52mと一定しない。柱穴は隅丸方形状のものが多い。出土遺物はP-9から土師質土器片が出土している。

据立柱建物跡(SA1016)(第181図)

第11調査区(AD・AE-18・19)で検出された。P-1に対応する柱穴は調査区外だが、梁間1間×桁行2間(3.00m×4.50m)の規模を有するものと考えられる。棟方向は真北から13°西に偏する。柱穴は円形・方形など様々で、大きさもばらつきがある。P-1・3・4は31~58cmだが、P-2・5・6は17~27cmと浅い。P-1・2間、1.50m、P-2・3間は3.00mとP-2・5・6が北側に偏在する。

据立柱建物跡(SA1017)(第182図)

第11調査区(AE-20・21)で検出された。規模は梁間1間×桁行1間(3.40m×



第183図 SA1018造構実測図

掘立柱建物跡 (SA1019) (第184図)

第11調査区 (AD~AF-23・24) で検出された。弥生時代の竪穴住居跡SB1010にほぼ重なって建てられている。規模は梁間2間×桁行2間で、5.20m×8.10mを測る。棟持ち柱を持つ総柱の建物とみられるが、P-5・6間に柱穴を欠く。棟方向は真北から5°西に偏している。柱穴は梢円形の長軸1m程度の大きなものが含まれているが、それに比して深度が25~50cm程度と浅い。柱穴からの出土遺物はない。

② 溝

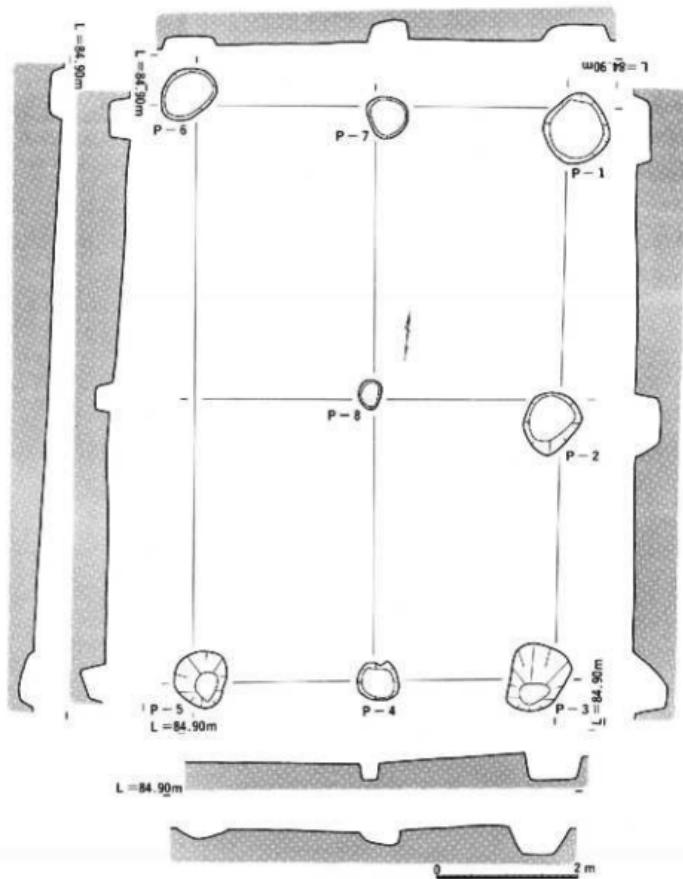
溝 (SD1006) (第185図)

第7調査区 (W・X-20) で検出された南北方向の溝である。検出部分の長さ5.3m、幅は最大部分で2.2mを測る。東側側辺に添って、幅0.7mで延長5.8mにわたり一段深くなる部分があり、断面形は階段状となっている。土層観察によると、一段深い部分が再掘削によるものとは認められないが、北半で一部再掘削が行われた様子が観察できる。

4.30m) である。棟方向は真北から83°東に偏する。柱穴は溝SD1011に重なるものがあり、溝の埋没後に構築されたものとみられる。

掘立柱建物跡 (SA1018) (第183図)

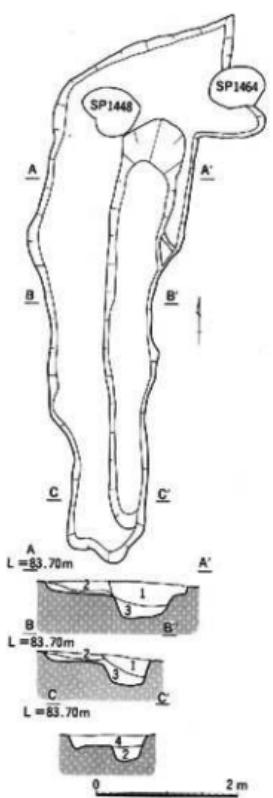
第11調査区 (AC~AE-21・22) で検出された。規模は梁間1間×桁行3間 (3.74m×4.86m) である。棟方向は真北から7°東に偏する。桁行の柱穴はそれぞれ対応するものの、柱心間距離がP-1・2間は1.20m、P-2・3間が2.80m、P-3・4間は0.90mと異なる。



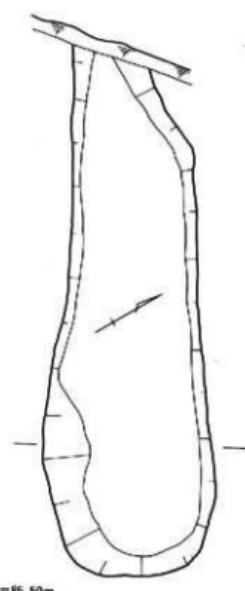
第184図 SA1019遺構実測図

本来は南北に長くつながっていたものと考えられ、すぐ南側のSD1007、第11調査区のSD1011はその一部であった可能性が高い。また、検出部分の北端でやや東側に曲がるもの、東西に延びていた可能性が考えられる。

出土遺物（第185図）

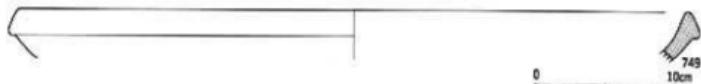


1. 深褐色10YR4/4砂質土
2. に、いし黄褐色10YR5/4砂質土
3. 増褐色10YR3/3砂質土
4. に、いし黄褐色10YR5/3砂質土



1. 深褐色10YR4/4砂質土

第186図 SD1010遺構・出土遺物実測図



第185図 SD1006遺構・出土遺物実測図

検出部分の覆土からは、土師質の皿片 2 点、鍋片 2 点、こね鉢片 1 点、瓦器片 3 点、陶器片 2 点が出士している。748は土師質の皿である。底部はヘラ切りである。749は瓦質のこね鉢である。小片から径を起こしたので正確さにやや不安がある。口縁端部、やや肥厚し、端面は平坦でわずかに下方に拡張する。

溝 (SD1010) (第186図)

第11調査区 (AE・AF-19・20) で検出された北西-南東方向の溝である。北西側は調査区外に伸び、検出部分の長さは 4.58m、幅 1.14m を測る。断面形は中央で一段深くなる形状かとみられる部分もあるが、明瞭ではなく、不整方形を呈しており、深さは 34cm 程度である。

覆土は単一層である。

出土遺物 (第186図)

土師質土器片 4 点の他は、弥生土器片が混入しているだけである。750は土師質の杯である。他の土師質土器とは焼成が異なり、かなり良好で硬く締まっている。

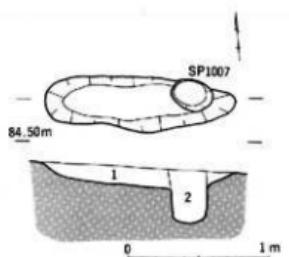
③ 土坑・土塙墓

土坑 (SK1003) (第187図)

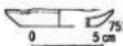
第1 調査区 (W-11) で検出された。細長い橢円形の土坑で長軸 1.37m、短軸 0.34m、深さは 35cm を測る。主軸はほぼ東西方向である。柱穴 SP1007 が重なっている。

出土遺物 (第187図)

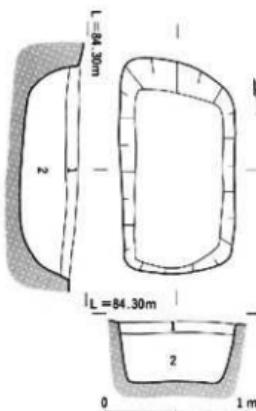
混入の弥生土器片が 4 点、土師質の小皿片が 1 点出土した (751)。底部は糸切りである。



1. 橙色10YR4/4粘性砂質土
2. にじむ黄褐色10YR4/3粘性砂質土 (SP1007)



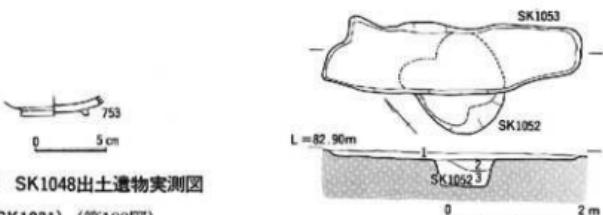
第187図 SK1003遺構・出土遺物実測図



1. 橙色10YR4/4粘性砂質土
2. 橙色10YR4/6砂質土



第188図 SK1031遺構・出土遺物実測図

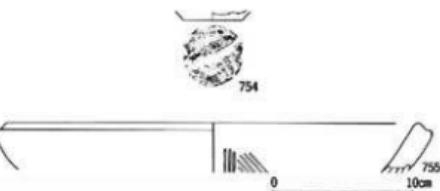


第189図 SK1048出土遺物実測図

土壤墓 (SK1031) (第188図)

第2調査区 (Z-19) で検出された。長辺1.57m、短辺0.8mのやや隅の丸い長方形をなしており、深さは44cmを測る。主軸はほぼ北を向き、遺構形状から、土壤墓であると考えられるが、副葬品とみなされる遺物ではなく、土師質土器、瓦器等の破片が出土している。

1. にぶい黄褐色10YR5/3砂質土
2. 棕色10YR4/4砂質土 (SK1052)
3. にぶい黄褐色10YR5/4砂質土 (SK1052)



第190図 SK1053遺構・出土遺物実測図

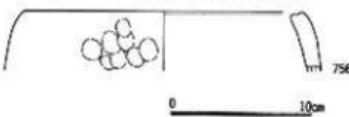
出土遺物 (第188図)

土師質土器片25点、瓦器片2点等が出土した。752は土師質の小皿である。底面は静止糸切りとみられ、内面等はロクロナデによる。

土壤墓 (SK1048) (第189図)

第4調査区 (K-12) のSR2001上層に位置する。流路掘削中、長方形の土坑底面のみ検出した。平面規模は長辺1.65m、短辺1.10mである。長軸はほぼ北を向く。形状・主軸から土壤墓であった可能性が高い。753は遺構検出面の上位から出土した瓦器碗である。高台は断面逆台形状を呈し、内面見込みのミガキは乱雑な格子状をなす。

1. 棕色10YR4/4砂質土
2. にぶい黄褐色10YR5/4砂質土



土坑 (SK1053) (第190図)

第191図 SK1056遺構・出土遺物実測図

第8調査区 (AA・AB-26・27) で検出された。長軸3.60m、短軸1.00mを測る不整な長方形形状を呈す。遺構面は削平を受けている部分であり、検出時の深さは14cmである。位置関係から溝SD1005の一部であった可能性もある。中央部分で弥生時代の土坑SK1052に重なって構築されている。

出土遺物 (第190図)

遺物は土師質土器片4点、土師質の擂鉢1点が出士している。754は土師質の小皿である。底面は、静止糸切り痕が明瞭に残っている。755は土師質の擂鉢である。口縁端部は凹面に仕上げ、内面は5条の横描条線が認められる。

土壤墓 (SK1056) (第191図)

第8調査区 (Z-25・26) で検出された。弥生時代のSK1056を切って構築されている。長軸2.65m、短軸1.12m、削平を受けている地区であるが、深さは45cmを測る。隅丸方形で、主軸はほぼ北向きである。土壤墓である可能性が高い。

出土遺物 (第191図)

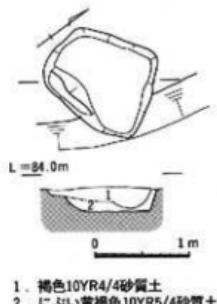
土師質の鍋が出土している (756)。体部・口縁部は内弯し、口縁端部は凹面に仕上げる。

土坑 (SK1093) (第192図)

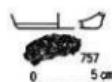
第7調査区 (X-19) で検出された。長軸1.33m、短軸1.12mの平面形不整方形をなしており、深さは27cmを測る。断面形が階段状になる部分があり、土層観察によると再掘削された可能性がある。

出土遺物 (第192図)

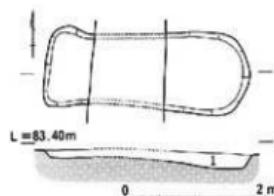
土師質土器片6点、土師質の小皿1点が出土した。



1. 褐色10YR4/4砂質土
2. にじい黄褐色10YR5/4砂質土



第192図 SK1093遺構・出土遺物実測図



1. 褐色10YR4/4砂質土



第193図 SK1106遺構・出土遺物実測図

757は底径5.8cm、回転とみられる糸切り痕が観察できる。

土坑 (SK1106) (第193図)

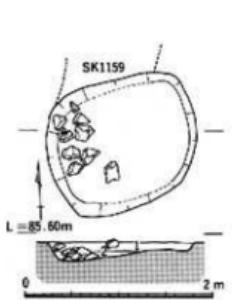
第7調査区(V-20)で検出された。規模は長軸2.92cm、短軸1.16cm、深さ26cmである。隅丸方形で、長軸はほぼ東西方向である。中央部をSD1006によって切られている。

出土遺物 (第193図)

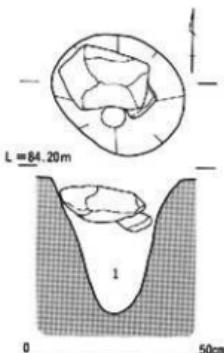
土師質土器片が10点、土師質の皿が2点、杯が3点、椀が1点、小皿、鍋、瓦器椀も出土している。758は瓦器椀の底部、759は土師質の脚部である。

土坑 (SK1156) (第194図)

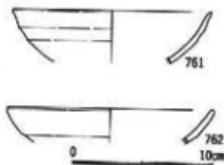
第11調査区(AE-19)で検出された隅丸方形状の土坑である。規模は長軸1.63m、短軸1.25m、深さは20cmを測る。SB1009に重なって構築されたSK1159にさらに重なる。土坑西端底に



1. 棕色10YR4/4砂質土
2. に、ない黄褐色10YR5/4砂質土



1. 埃褐色10YR3/3砂質土



第194図 SK1156遺構・出土遺物実測図

第195図 SP1181遺構・出土遺物実測図

20cm大の砂岩礫がやや集中して出土している。青磁碗はこの礫の下から出土した。

出土遺物（第194図）

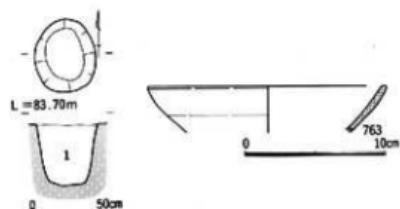
760は青磁碗の底部である。高台内を除いてオリーブ灰色の釉が施され、釉厚は0.4mm程度である。

④ 柱穴・小穴

柱穴（SP1181）（第195図）

第2調査区（Y-19）で、SB1001に重なって検出された。規模は復元で長軸36cm、短軸30cmのやや楕円形を呈し、深さは36cmを測る。柱穴を塞ぐように扁平な砂岩礫が覆っている。

出土遺物（第195図）



1. 褐色10YR4/4砂質土

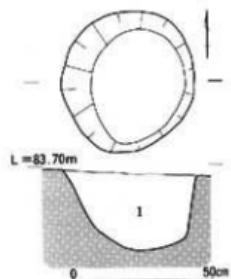
瓦器片が11点出土している。761・762は瓦器碗である。いずれも内彎して立ち上がり、口縁部外面はヨコナデ、内面のミガキは認められない。

柱穴（SP1342）（第196図）

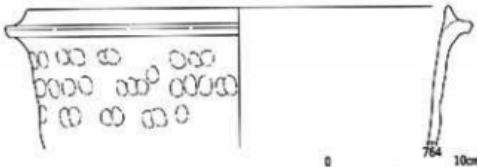
第7調査区（Z-23）で検出された。隅丸方形状を呈する土坑SK1065に重なって検出された。

長軸52cm、短軸46cmの楕円形を呈し、

第196図 SP1342構造・出土遺物実測図



1. 褐色10YR4/4砂質土

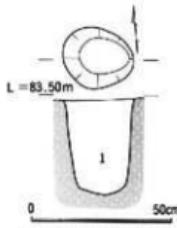


第197図 SP1485構造・出土遺物実測図

深さ49cmである。

出土遺物（第196図）

瓦器片が2点出土している。763は瓦器椀である。内縁気味に立ち上がっている。

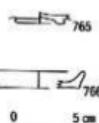


柱穴（SP1485）（第197図）

第7調査区（W-19）で検出された長軸52cm、短軸48cm、深さ26cmの楕円形の柱穴である。

出土遺物（第197図）

土師質土器片が4点出土している。764は土師質の羽釜である。体部は直線的で、端部を折り曲げ、方角状の鉗とし、口縁部を貼付け、尖り気味におさめる。



第196図 SP1494遺構・出土遺物実測図

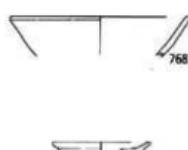
柱穴（SP1494）（第198図）

第7調査区（W-19）で検出された、長軸25cm、短軸22cmの楕円形の柱穴で、深さは35cmを測る。



出土遺物（第198図）

土師質土器片2点、瓦器片1点が出土している。765は瓦器椀の底部。高台は断面方形である。766は土師質の小皿、口縁がわずかに内彎し、底面は糸切りの痕跡が認められる。



その他の柱穴出土の遺物（第199図）

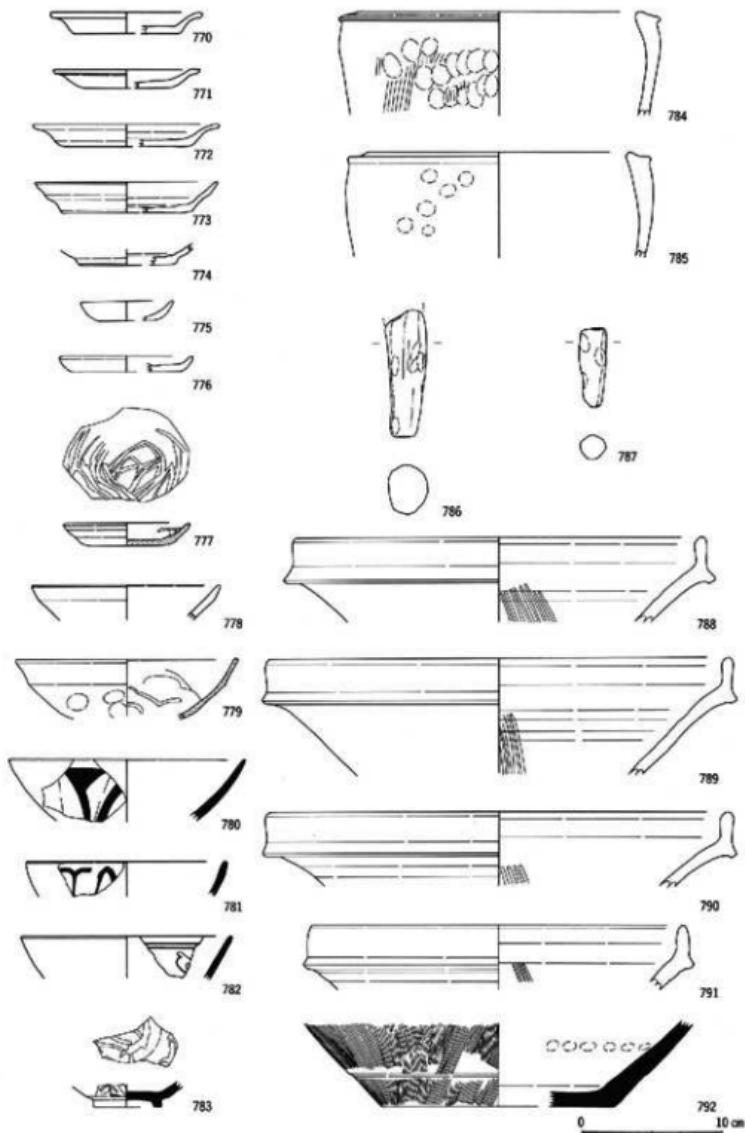
767は、第2調査区（Y-16）で検出された径27cmの円形の柱穴（SP1055）で出土した土師質の椀である。

第199図 柱穴・小穴出土遺物実測図

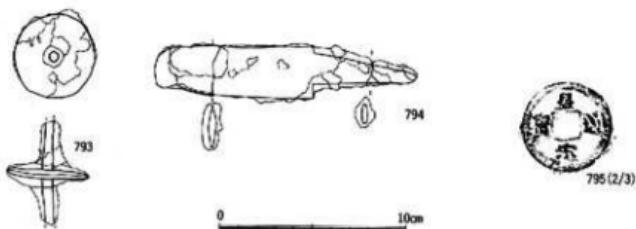
768は第2調査区（Z-17）で検出された楕円形の柱穴（SP1113）で出土した土師質の椀である。体部・口縁部とも直線的に立ち上がる。

769は第7調査区（U-20）で検出された柱穴（SP1535）から出土した土師質土器の小皿である。底面はヘラ切りとみられる。

⑤ 遺構に伴わない遺物（第200・201図）



第200図 遺物包含層等出土遺物実測図 (1)



第201図 遺物包含層等出土遺物実測図 (2)

遺物包含層から、中世の遺物は総数654点出土している。第2・3・7調査区を中心にその周辺部で多く出土している。

770～772は土師質の皿で、口縁部は外彫して立ち上がる。773の土師質の皿は外彫して立ち上がり、口縁部は直線的にのびる。774も同様の形状を持つと考えられる。775・776は土師質の小皿である。内彫して口縁部は短く立ち上がる。700～776の底面は776が静止糸切りの他は、いずれも回転ヘラ切りである。

777は瓦器の皿である。円弧状のミガキが観察できる。

778は土師質の椀、779は瓦器椀である。

780～782は龍泉窯系の青磁碗である。780・781は、鎬蓮弁の陰刻が、782は内面に飛雲文が施される。783は唐津焼、内面の白色釉の文様のモチーフは不明。

784・785は土師質の鍋である。口縁部肥厚し端面は凹面をなす。786・787は脚部である。

788～791は備前焼の擂鉢である。口縁部は大きく拡張させる。792は須恵質の壺の底部である。

793は鉄製の紡錘車。794は両刃の鉄製品である。先端を欠損し、茎の主軸が歪んでいるが、槍の可能性が考えられる。

795は銅錢、「皇宋通寶」。

3 まとめ

(1) 弥生土器の様相

本遺跡出土の弥生土器はほとんどが中期に属し、後期の土器がわずかに混じる（550）。出土状況は柴石土壤中心で、一括資料と言い難いものが含まれるが、短期間使用の遺構と考えられ、吉野川中流域の凹線文出現前後の傾向を示す良好な資料と考えられる。このことについては、すでに柴田昌児氏の予察⁽¹⁾があり、それを土台として若干の考察を加えてみたい。

それぞれの遺構出土の土器については、本文中で概観し、個々については遺物観察表に詳しい。ここでは器種別にまとめ、そのうえで各遺構での組み合わせを再点検し、周辺各地との併行関係について考えたい。

① 中期弥生土器の形態

形態については、各器種を特徴によって細分し、壺（A～H）、甕（A～C）、鉢（A～C）、高杯（A～D）、大型高杯、蓋とする。さらに、中期後半の特徴である凹線文の有無、その他装飾を記号化して傾向を探る。

1. 凹線文が認められないもの

2. 凹線文が施されたもの

- a. 口縁端部に刻目文などが施される
- b. 口縁部内面に斜格子文、波状文などが施されるもの
- c. 頸部下端に断面三角形突帯をつける
- d. 頸部下端に圧痕文突帯を巡らせる
- e. 頸部に圧痕文または櫛描文が施される
- f. 体部に櫛描文が施される
- g. 体部に圧痕文が施される

これらの記号については、本項と観察表にのみ用いている。

壺A 頸部が直立し、口縁部が大きく外反する朝顔状を呈するものが最も多い。紫雲出山遺跡⁽²⁾、矢ノ塚遺跡⁽³⁾、百間川今谷遺跡⁽⁴⁾の壺Aに相当する。口縁部の外反の程度は斜め上方に開くもの（271・272など）と、水平に開くもの（276など）があり、例外的に斜め下方にまで曲がるもの（312）がある。形態上の細別も可能であろうが厳然と分離できない中間的な

ものが多い。全体の形状がわかる個体は多くはないが、体部は細長い梢円形状(272など)と体部中央の張る形状(276など)がある。底部はほとんどが平底ないしはわずかな上げ底である。

多くは無装飾で、口縁部の内外面は幅広くヨコナデが認められ、口縁端部は平坦に收める。一部にヨコナデの結果、上下にわずかに拡張されるものもある。例外的に口縁端部を下方に拡張する240・268や、紐穴を持つ234がある。装飾は口縁端部の刻目が多く、それ単独のもの(275など)、頸部下端の断面三角形突帯や、ヘラや指頭による圧痕文突帯との組み合わせによるもの(305・354)、更に体部上半の櫛描文や刺突文、圧痕文と組み合わされるものもある(276など)。頸部には他に、連続的なヘラによる圧痕文(356・357)や、櫛描波状文・鱗状文など(533など)もみられる。488や510は頸部と体部の境が曖昧なこともあるが、頸部下半～体部上半にかけて連続的に櫛描文等が施される。他の広口壺形土器は、突帯や刺突文など頸部と体部の境がはっきりするような装飾を持つものが多く、やや異なる特徴をもつ。

口縁部内面に、ヘラまたは2～3条の櫛による斜格子文や、櫛描波状文が施されるもの(312・365)がある。この場合口縁部の外反の程度は水平か、斜め下まで彎曲する。

口縁端部に凹線文を持つ広口壺形土器(72・309・370など)は、同時に口縁部内面に斜格子文が施される。形態的にも凹線文を持たない広口壺とほとんど変わらない。たとえば凹線文のある309と凹線文のない365は頸部の突帯が異なるだけで、ほぼ相似形である。口縁端部の拡張も顕著ではなく、やや肥厚する程度である。

遺物包含層出土の639は例外で、端部を上下に大きく拡張し、凹線もしっかりしている。頸部突帯が変化したとされる凹線文B種⁽⁵⁾がみられるのはSK1016出土の385だけである。

壺A' 朝顔状に開く口縁部を持つが、頸部と体部の境が曖昧で判然としない形態が少量ある(255・314・557など)。器面の損傷が激しいが、口縁部のヨコナデ技法はみられない。

壺B 開き気味に立ち上がるやや長い頸部から外反する口縁部を持つ(68・256・568など)。佐原編年の畿内第III様式、壺形土器A⁽⁶⁾に似る。しかし、紫雲出山・矢ノ塚・百間川今谷遺跡の各遺跡では、これに相当する形態がない。頸部下端に圧痕文や断面三角形突帯をつける。この形態に凹線文を施した土器は出土していない。

壺C 直立する頸部と外反する口縁部を持つが、頸部が短いものがある(260・267・372・447など)。また、同形態で、口縁端部に凹線文が施される373、374がある。紫雲出山遺跡の壺E、矢ノ塚遺跡の壺Cにあたる。百間川今谷遺跡には該当する形態はない。372～374は頸部に圧痕文突帯を巡らしている。

壺D 開き気味に立ち上がり、わずかに外反する口縁部を持ち、口径20cmを超える大型の壺。百間川今谷遺跡の壺Dに相当するが、紫雲出山遺跡では壺Aに含まれ、矢ノ塚遺跡では壺Bの一部にあたる。本遺跡ではSK1014の317・318、SK1039の452などがあるが、いずれも凹線

文はない。しかし口縁端部はやや肥厚気味の方角状におさめ、ヨコナデ技法がやや幅広くみられる。

壺E 直線的で、わずかに外反する口頸部を持つ。紫雲出山遺跡の壺Cにあたるものだが、口縁を曖昧に、または方角状に收めるやや薄手の315・379（E）、口縁をやや分厚い方角状に收める313・380・450（E'）があるが、後者は矢ノ塚遺跡包含層出土の壺Eと酷似する。他に口頸部の短い74・216・375（E''）もあり、百間川今谷遺跡の壺Gと似る。凹線文を持つのは2例（381・382）である。

壺F 73・277・316・453・495は直線的に、あるいはやや内彌氣味に外方に立ち上がる、漏斗状の口頸部を持ち、口縁下に断面三角形の突帯を巡らす。突帯には刻印を施す場合がある。体部は中央部の最大径部分が張る形状である。紫雲出山遺跡壺B、矢ノ塚壺Eにあたる。百間川今谷遺跡では壺Bがあるが、それよりも備中・備後地方により類似する例がある⁽⁷⁾。凹線文のない5例のうち3例は角閃石粒を含む明かな撒入土器である。また、凹線文が施される場合、376のように、口縁下の突帯が凹線文化したものと、突帯はそのままで、口縁端部に凹線文が施される377・378の場合がある。

壺G 482は筒状の長い頸部を持ち、口縁部はわずかに外反する。577もこの器形の可能性があるが、いずれにしても紫雲出山・矢ノ塚両遺跡で各1例みられるだけで類例は少ない。

壺H 489は倒卵形の体部を持ち、短い口縁部が直立する。類例は見当たらない。

281の把手も、壺形土器の縦につくこと、中空であることなど、同様の例は見あたらない。

なお、本遺跡では紫雲出山遺跡壺Dや、矢ノ塚遺跡壺IIにあたるような無頸壺形土器は出土していない。百間川今谷遺跡にみられる広口壺形土器の口縁部内面に突帯を付けたものもない。また、紫雲出山遺跡壺F、百間川今谷遺跡壺Eに相当する形態のものは不明である。

壺A 壺形土器は、ほとんどの個体が「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部の形状で細分すると、拡張せず平坦に收める287・288など(イ)、上方に拡張する24・401など(ロ)、肥厚させて平坦に收める22・289・332など(リ)、肥厚せず曖昧に收める286・337など(ニ)がある。上方に拡張された形状のものに撒入品（80・401など）が多い。口縁部内外面のヨコナデは端部肥厚または上方拡張の形態にはすべて施されており、方角状や曖昧な收め方のものではヨコナデは半数程度である。

また、口縁端部が平坦な258・485、肥厚した336の端面に刻目が施される。463・500は肩曲部に圧痕文突帯を巡らし、463は端部に刻目がある。

凹線文の施される壺形土器は、口縁端部を上方に拡張（238・404・406など）、または肥厚させる（405）。409は肩曲部に圧痕文突帯を巡らす。

体部の形状は概ねイチジク状を呈す。調整は、内外面ともにナデによるものが最も多く、

外面上半タテハケ、下半タテヘラミガキ、内面ナデが次に多い。内面ハケのものも散見される。内面下半ヘラケズリ技法はSK1016出土の411にみられるだけである。

甕B 口縁部の屈曲の度合いが弱いものがある(23・250・598など)。さらに266・483は端面に刻印を持つ。これらの口縁端部は拡張や肥厚せず、方角状にまたは丸く收める。

甕C 338・410・599は口縁部の屈曲の度合いが弱い、器高15cm以下の小型の甕である。

鉢A 25~27・290・501・502は半球形の、ボウル状の体部に屈曲して外反する口縁部を持つ。底部は平底と短い脚台を持つものがある。紫雲出山遺跡には該当する形態はなく、矢ノ塚遺跡の鉢1にあたる。290は百間川兼基遺跡土壙10出土例⁽⁸⁾と酷似している。

鉢B 28・643は半球形を呈すボウル状の体部で、口縁端部を内外に拡張する。28は無文だが、643は口縁端部上面に櫛描斜格子文を施す。また凹線文を持つ161・420は半球形で口縁部がより内彎する。口縁端部は内外に拡張し口縁部下に凹線文が施される。紫雲出山遺跡の大型鉢3と同様の形態である。

鉢C 419は体部が倒卵形を呈し、口縁は内彎したまま方角状に收める。瘤状の一対の突起がつく。瘤状突起を持つ鉢形土器は、岡山県門田遺跡T-6SD03出土例⁽⁹⁾、大阪府美園遺跡BSD201出土例⁽¹⁰⁾などがあるが、いずれも前期または中期初頭と捉えられており、形態的にも半球形の体部で、本遺跡例とは異なるものである。

鉢D 605はジョッキ形を呈する鉢形土器とみられる。口縁部及び底部に2孔一対の穿孔がみられる場合が多く、吉備地方で前期末に現れ、中期前葉に普及し、中期中葉前半までのころとされる⁽¹¹⁾。

他に内面調整の丁寧なものについては鉢形土器の可能性が高いと考えられる。突出する底部(83)、高台状の上げ底(212・604)、平底(192・503)などがみられる。

160は、低い脚台で、貫通しない三角形の透かしがある。紫雲出山遺跡では透かしのはいる低い脚台は無頸壺のものと考えられているが、本遺跡では無頸壺は出土しておらず、鉢形土器の脚台と考えられる。

高杯形土器は非常に少なく、はっきりとわかるのはわずか10個体、そのうち7個体がSK1016に集中する。

高杯A 291は半球形で屈曲して外反する口縁部をもつ鉢形土器と同様の杯部。脚台部を欠く。

高杯B 424・425は同様に半球形で屈曲して外反する口縁部を持つが、屈曲部内面に断面三角形の突起を持つ。紫雲出山遺跡高杯E1、矢ノ塚遺跡高杯D1と同じ形態をしている。424の脚端は肥厚せず、やや曖昧に收める。

高杯C 421・422は半球形で、ボウル状の深い楕円形の杯部を持つ。421の脚端はやや肥厚し、平坦に收める。

高杯D 423・426は皿状で口縁部が内弯し、ほぼ直立する。口縁端部は内外に拡張する。426は上端面に凹線文が施され、423もヨコナデの範囲は幅広い。ともに、紫雲出山、矢ノ塚両遺跡の高杯Aに相当する。

大型高杯 427は大型高杯である。皿状の杯部、口縁端部は内外に拡張し、上端面と口縁下に凹線が施され、口径が30cmを越える。紫雲出山遺跡大型鉢2と同形態、矢ノ塚遺跡高杯A4、百間川今谷遺跡の大型高杯にあたる。

30は中実の短い脚柱部、同じ形状の606は2条の刻印を施した突帯を持つ。いずれも他の脚台部と異なり、円盤充填と確認できない。脚上端部に突帯を持つ例は、紫雲出山・矢ノ塚両遺跡で2例ずつみられる。

高杯形土器の中では、紫雲出山遺跡高杯B、C、D、Fにあたるものは出土していない。

蓋 円板状で、2孔一対とみられる孔がある、254の1例だけである。

なお、吉備・畿内とともに第II様式に登場する水差形土器を欠き、器台も出土していない。國化した個体の内、原則として口縁部数を基にした個体数は236。各器種別の比率は、壺形土器136(57.7%)、菱形土器78(33.1%)、鉢形土器12(5.0%)、高杯形土器10(4.2%)である。高位台地の集落のあり様の一端を示す。

以上のように器種別に検討してみると、西讃・吉備地方にみられる中期弥生土器と形態上、文様の上でも類縁関係を示すものが多く、極一部で、広口長頸壺形土器のように畿内的な器形を持つことが確認された。また、西讃地方の紫雲出、矢ノ塚、吉備地方にはない廉状文を施す土器(68・202)も散見され、これも畿内的要素の受け入れといえよう。

② 嵌入土器の問題

また、本遺跡出土土器の胎土中に、頗著に角閃石粒や長石粒を観察できるものがある。先に挙げた236個体の内20個体(8.5%)がそれである。吉野川流域においては、角閃石粒が混入することはなく、讃岐地域からの嵌入品と考えられる。ただ、讃岐においても、そのような混和材を使用した土器ばかりではなく、角閃石が混じる土器群については高松平野西部・旧香東川流域にその中心があろうといわれている⁽¹²⁾。そこは、本遺跡の立地する長峰台地から、清水岬を越えて国分台・金山へ至る最短距離の道筋にあたる。

嵌入土器が出土した遺構は、SB1001・1004・1011・SK1008・1016・1039で、住居跡と集石土壇である。器種別では壺形土器が最も多く、前述したように、壺Fに占める比率が大きい。壺Aでは、口縁内面に斜格子文を持つ272・365・367・369や体部中央に貝殻腹縫による圧痕文

が施された355がある。壺Cもある(374)。壺形土器では、口縁端部を肥厚させるか、上方に拡張するものに限られる。壺A 2はSB1011出土の238だけである。鉢形土器も包含層出土の643をみるだけである。

讃岐地域の弥生時代中期の資料は西讃地域では比較的知られているが、本遺跡と直接関わりのあったと考えられる高松平野の様子はいまだ明かではない。しかし、高松平野の産とみられる搬入品が本遺跡内で特異な存在ではなく、彼の地との緊密な交流が想定できる。

③ 遺構内での組み合わせ

本遺跡では住居内での床面遺物に恵まれない。冒頭に挙げた難点はあるものの、資料的には完形に近い個体の出土量が多い集石遺構を中心に検討したい。

時期区分の基準となる属性は、凹線文の有無であろう。凹線文を有する土器の出土する遺構は、SB1004、SB1005、SB1011、SK1014、SK1016の5遺構である。SB1004は壺A 2 bが1点(搬入品)、SB1005は鉢B 2が1点、SB1011は壺A 2口が1点(搬入品)、SK1014は壺A 2 bdが2点みられ、SK1016は各器種に凹線文が施される。

SK1016の壺形土器は、壺A・C・E・Fで構成される。凹線文を有するものと、ないものの両方が出土し、その形態はほぼ同じで凹線文の有無だけが差異となっている。壺形土器にも同じことがいえる。これは土壌使用期間に問題ありとはいえ、凹線文出現直後の様相と理解できる。高杯形土器については口縁・脚端とともに拡張しない形状から、双方ともに拡張し、凹線文を施した変化過程を同時に含む。

SK1014は、凹線文を施す壺Aが2個体あるものの、他は壺A・D・E・E'・F、壺A・Cで、壺は口縁部を肥厚させたものが最も多い。凹線文のないSK1008やSK1039により近いと捉えられる。

SK1008は壺Aが中心で、口縁端部刻目と、頸部下端の突帯が装飾として混じる。壺Fは搬入品である。壺Aのほか、鉢Aと高杯Aが1点ずつ混じる。SK1039は壺Aに刻目等の装飾がSK1008より目立つ。搬入の壺Fの他、壺E'・B・Dがある。壺形土器はほぼAであるが、1点だけ頸部突帯の搬入品が混じる。他の器種は出土していない。

さらに、一括性の高いSA2001の資料では、口縁端部下方拡張の壺Aや、壺B・Cがあり、壺はAの他に、口縁部の屈曲が十分でないBや、端部に刻目を持つものが含まれている。凹線文はなく、広口壺の頸部下端の突帯や、口縁部上面に装飾を持った土器もみられない。

壺Aの口縁内面に櫛描文や斜格子文を施すものはSK1016・1014・SB1004だけでしかみられない。壺頸部下端の突帯はSB1010・1011、SK1008・1014・1016・1039・1045でみられる。これらの文様と、凹線文の登場は壺形土器の口縁端部からとされる⁽¹²⁾ことに着目し、微視的な前後関係を考えると、SA2001→SK1008・1039→SK1014・SB1004→SK1016、ということ

になる。しかし、それぞれの遺構内の組み合わせが阿波中期弥生社会において普遍的である、とはまだ言い難く、何よりも一括性に問題があり、傾向性を重視して、巨視的な段階を考えると、各器種に凹線文が施される SK1016以後と、SK1014以前の 2 段階を想定したい。そしてこれを 1 段階、2 段階と仮称する。ただし、1 段階については、SA2001 にみられるように中に屈曲の少ない壺形土器に刻目が施されているものや、頸部と体部の境が曖昧な壺形土器など古い要素と考えられるものを含んでいる。現段階では、慎重にならざるを得ないが、周辺地域の資料の増加のより様相がはっきりすれば、細分の可能性が十分考えられる。

次の通りである。

(1 段階)

壺形土器は壺 A が主体で、壺 B、壺 C、壺 D、壺 E、壺 F、壺 G が少量ある。文様的には口縁端部の刻目、頸部下端の断面三角形突帯または圧痕文突帯、頸部～体部上半の櫛描文、圧痕文などがあるが、無文のものが多い。極一部に凹線文 A 種が登場する。

壺形土器は「く」の字状に屈曲する壺 A が主体を占める。屈曲の度合いの弱い壺 B、小型の壺 C が少量混じる。中に口縁端部に刻目を持つものがある。

鉢形土器は半球形で口縁部が屈曲外反する鉢 A と、屈曲せず内外に拡張する鉢 B がある。高杯形土器は非常に少なく、円盤充填法が出現する。

(2 段階)

壺形土器は壺 A が主体で、壺 C、壺 E、壺 F がある。いずれも凹線文が施されるものとそうでないものが共存する。凹線文 B 種の出現。口縁内面の斜格子文、頸部下端突帯は残り、櫛描文も一部残る。

壺形土器はほとんどが「く」の字に屈曲する壺 A。凹線文の出現。内面ヘラケズリ技法の出現。

鉢形土器にも凹線文が施される。高杯形土器が増加し、凹線文を持つものもある。大型高杯の登場。

④ 桜ノ岡遺跡（1）出土土器の位置づけ

さて、これらの段階の位置づけであるが、中期の土器の編年作業の最も進んだ畿内では唐古編年を基にして発展された佐原編年¹⁰ が長く影響力を持ち、畿内第 III 様式は櫛描文の盛行期（古段階）から凹線文を採用はじめた新段階、さらに凹線文の盛行期・第 IV 様式へ推移すると理解してきた。しかし新資料の増加は必ずしもそれを補強するものばかりではなく、井藤編年¹¹ のように第 III・IV 様式とまとめた上で細分するなど「第三・四様式は近年、多くの研究者が唐古編年を白紙に戻した上で再検討を試み」¹² ている。その結果、最新の編

年作業では凹線文の登場を画期とし、旧来の第III様式新段階以降を第IV様式として捉え、その細分を試みているもの、旧来のものを尊重した形のものが、地域性を絡めて混在している。また従来の古段階の細分も行われている⁽¹⁷⁾。

一方、四国では紫雲出山I～III式の設定⁽¹⁸⁾があり、吉備地方でも精力的な編年が行われ、中期を含めたものでは鎌木編年⁽¹⁹⁾、雄町編年⁽²⁰⁾、高橋編年⁽²¹⁾などがあり、それぞれの併行関係がおさえられている。百間川今谷遺跡では、百間川中期II新相の土器群についてまとめられている⁽²²⁾。第III様式は雄町編年、高橋編年のように、凹線文なし、壺に凹線文、各器種に凹線文と、3小期に細分されるのを基本とするが、一括資料の不足から、最新の正岡編年⁽²³⁾では2小期にまとめられている。

さて、吉野川流域であるが、名東I～III式の設定⁽²⁴⁾、鮎喰川流域の検討⁽²⁵⁾が畿内の佐原編年に準じて行われてきた。しかし当時は採集資料が多く限界があり、近年の発掘調査によって資料自体は増加しているものの、詳細な検討には至っていない。名東遺跡方形周溝墓、溝資料等⁽²⁶⁾が下流域の様相を示すが、中流域とはやや様相が違い、畿内の要素が多いように思われる。他に鳴門市光勝院寺内遺跡⁽²⁷⁾で中期後半について、凹線文盛行期の詳細な検討が行われている。これも、全体として中部瀬戸内の様相と結論づけられているが、桜ノ岡遺跡(I)と比較すれば、より多くの属性で畿内・播磨との類縁関係が指摘されている。

本遺跡の1段階は紫雲出山I式、吉備では高橋編年IV-a・b期、正岡編年III-1様式に併行するものとみて大過なかろう。畿内では凹線文出現前後の第III様式古段階併行と考えられる。県内では三好町土取遺跡住居跡出土土器⁽²⁸⁾、名東遺跡調査地IX区SD01出土土器⁽²⁹⁾が併行期と考えられる。

凹線文が各器種に施されるようになった2段階は紫雲出山II式、吉備では高橋編年IV-c期、正岡編年III-2様式、特に百間川今谷遺跡の中期II新相に併行すると考えられる。畿内との対応では旧来の第III様式新段階併行とみられる。県内では光勝院寺内遺跡1号住居跡床面遺物と近いが、地域差を考慮してもこれに先行する段階と考えられる。

(2) 弥生時代の集落構成

今回の調査では11軒、建て替えの住居を別に数えると13軒の竪穴住居跡と2棟の掘立柱建物跡が検出された。ただ、住居跡の集中している段丘面東半の第2・7・11・9・8調査区のうち、第11調査区以外は調査区の約4割が削平を受けており(第6図参照)、削平部分に住居跡が存在した可能性は十分考えられる。

住居群は、大きく2期にわけられる。すなわち、SB1001の当初の住居(Aとする)、SB1001の建て替え後の住居(Bとする)SB1002、SB1004の当初の住居(Aとする)、SB1004の建て

替え後の住居(B)とするSB1006、SB1008、SB1009、SB1010とSB1003、SA2001が1段階、SB1005、SB1011が2段階で、SB1007とSA2002は出土遺物がほとんどなく、時期の決定は困難である。

1・2段階を通じて、住居の平面プランは梢円ないし不整円形を呈している。

① 1段階の住居跡について

SB1001・SB1004は建て替えが行われて、なお1段階で廃絶されたものである。SB1003廃絶後のほぼ同じ位置にSA2001が構築され、さらに1段階のうちに廃絶されている。

主柱数は、6本が4軒、5本が2軒、4本が2軒と、ばらつきがある。主柱数の規則性は乏しい。周壁部分では、溝を持つのが3軒、柱穴が並ぶのが2軒、何も検出されなかつたのが2軒である。周壁溝を持つ住居は6本主柱であるが、周壁と主柱数の構造の関連は他に認められない。主柱穴の配置から、棟方向を推定すると、SB1001ABはそれぞれN80°W、N75°E、SB1010がN80°Wで、ほぼ東西方向、SB1002、SB1004B、SB1006が、N20°W、SB1004AがN5°E、SB1009がN20°Eと、南北方向に近い。SB1008はN40°Wである。

特徴的なのは、1段階の住居の多くに集石遺構が重なることである。SB1001Aは同じ位置に建て替えられているので、除外すると、SB1001Bは覆土中に、SB1006は覆土中と、切りあってSK1178が、SB1008には集石土坑SK1061が重なり、SB1010は覆土中と集石土坑SK1168が近接する。SB1009は廃棄後構築されたSK1159が集石土坑と考えることもできる要素を持っている。SA2001は集石遺構そのものはないが、柱穴に柱穴抜き取り後の集中的な土器投棄がみられる。

② 2段階の住居跡について

2段階の住居跡は確実なものは2軒であるが、調査区内ではやや南東よりに偏在している。SB1011は半分が調査区外、SB1005は全体の形状が不明である。柱穴数、周壁溝、集石遺構などのことも傾向性をつかむにはいたらない。

集石遺構もSK1016が確認できるだけで、本遺跡の衰退期と考えられる。

③ 捜立柱建物跡について

独立棟持柱を持つ捜立柱建物跡SA2001は、住居群の中央やや西よりで、SB1001・1002・1008・1004に三方を囲まれるように位置する。廃絶後の主柱穴に土器を詰め込んでいる点でも、特異な建物であると認識できる。このような独立棟持柱をもつ構造の建物の、弥生時代に属する例は次のとおりである。

王子遺跡⁽³⁾ 鹿児島 弥生中期末～後期初 2×2間、3×3間、3×4間2棟

前畠遺跡 ⁽¹⁾	鹿児島	弥生中期末	3×4間
上野原遺跡 ⁽²⁾	鹿児島	弥生中期末	3×3間
立野遺跡 ⁽³⁾	佐賀	弥生中期中葉（III期）	3×4間3棟、1×1間5棟
大山池遺跡 ⁽⁴⁾	鳥取	弥生中期	1×3間
西長峰遺跡 ⁽⁵⁾	徳島	弥生中期末～後期初	1×4間

他に近江地方に中期後半以降の例がある⁽⁶⁾。立野遺跡を除いて、いずれも弥生時代中期後半以降である。先行する例は、繩文時代後晩期の北陸地方にみられる⁽⁷⁾。しかし、地域的時間的隔たりとも現在は埋まらない。

宮本長二郎氏は、銅鐸などにも描かれる独立棟持柱を持つ建物が祭式儀礼に関わる可能性が高く、神殿につながる可能性を指摘している⁽⁸⁾。

柱穴に土器を投棄するのは、中期後半の美作地方・津山市押入西遺跡⁽⁹⁾で2例みられる。1間×4間の建物で、柱穴上端径50～60cm、深さ50～95cm、北東隅の柱穴を除き、柱の抜きとり跡が確認され、多量の土器が投棄されていた。しかも、各柱穴の出土土器は接合するものがある。もう1例も1間×1間で同じ状況である。SA2001と同様、廃絶の際の祭祀として、一ヵ所で土器を破碎する行為を含む祭祀の後、各柱穴に分納したものと考えられる。

またSA2001に先行するSB1003は4本主柱で炉がない。住居に用いられたものではなく、構造は異なるが、SA2001と同様の意義を付与された建物の可能性が考えられる。ただ、SA2001が廃絶されたのは1段階の中でも出土土器の様相は古相を示すと考えられる。SA2001が集落の中で特殊な役割をはたしていたのであれば、その廃絶以後、SB1003構築以来使用してきた場所を放棄した理由が疑問として残る。また、同じ長峰台地上の西長峰遺跡例はSA2001より後出するもので、規模もかなり大型である。本遺跡を形成した集団が移動した可能性を含め、相互の比較検討は今後の課題である。

(3) 弥生時代の集石遺構

本遺跡に特徴的な集石遺構は、土坑を伴う10基と、住居跡内の掘り形が認められない3基を併せて14基である。これらについては、石川直章氏の考察⁽¹⁰⁾がある。

集石遺構は本遺跡内でも、集石や土器の状況から、形態のバリエーションに富んでいるが、概ね、土器の破碎・砂岩礫の被覆・砾石を含む石器・黒色ないしは白色円錐・火の使用が、共通する点となっており、次のタイプに分けられる。

1類 住居内のもの (SB1001B、SB1006、SB1010)

住居内で掘り形を持たず、炉に重ねて、土器、石器、砂岩礫を集中させたものである。

2類 集石中心のもの (SK1061、SK1168、SK1178)

住居に重なり、あるいは近接し、集石が中心で他の遺物が少ないもの。SK1178は他の2基に比べて土器の分量が多い。SK1159もこれに属する可能性を有する。

3類 不整形土壙墓 (SK1045、SD1001)

土坑は細長い不整形で、礫の被覆は一部に限られる。土器の分量は少なく、黒色チャート礫が目立つ存在である。

4類 小穴状土壙墓 (SK1049)

柱穴状の小さな土坑で集石を伴う部分と、そうでない部分があり、詰め込まれている土器は隣のものと接合する。これはSA2001の主柱穴内に詰め込まれた土器が互いに接合することと共通する行為があったことを指摘できる。

5類 集団土器棺墓 (SK1008)

隅丸方形の土坑中央部に合わせ口で土器が対になって埋置された状態のもの。石器を伴い、砂岩礫を被覆する。

6類 大型土器棺墓 (SK1014、SK1039)

大型土器棺を中心とし、周囲にも大量の土器を土坑内で破壊、石器を伴い、砂岩礫を被覆したもの。

7類 大型土壙墓 (SK1016)

隅丸方形の土壙中央部に、土器と礫で被覆するが、棺にあたる土器は認められない。石器を伴い、大量の土器は土壙上で破碎されたものと、それ以外の場所で破碎されたものの両方が使用されている。

このうち、1～6類は1段階、7類が2段階である。また、住居に関係する1・2類と墓の可能性の強い3～7類に分けられる。

1類は、住居廃絶の際の祭祀に伴いものと捉えられる。炉に重ねて集石が行われることに意味があると考えられ、住居の中心である火処を塞ぐことで住居の持つ意義を終焉に導く儀礼であったと推測される。しかし遺跡内すべての住居跡に共通の行為ではない。要因としては、集落内の禁忌などの社会関係に基づくものと考えられる。

2類も住居内外に重なった集石行為で、住居に関する意味を持つものと考えられるが、SK1061、SK1178は住居埋没後のものである。廃絶後、時間をおいてなお必要であった2次の

な儀礼行為として捉えておきたい。そうすればSB1006・SB1010において1類を持ち、かつ、2類も持つこと、また住居と集石土坑の位置がずれることも理解できる。ただ、この考え方には墓域と住居域を固定的にみているため、椎ヶ丸～芝生遺跡集石土壙墓例⁽⁴¹⁾と比較すると墓の可能性を排除することはできない。

3～6類に関しては、自然科学的分析では墓説の補強はできなかったが、出土状況、集落内の位置関係から、被覆疊堆墓と推定できる。しかし、その形態の差が何に起因することなのかが問題である。まず、土器の量、土壙の規模・石器の有無などから、3・4類→5類→6類→7類という形態の変遷が考えられる。出土土器からは現段階では確定的な証左を与えることはできない。とすれば、やはり社会関係における差異が、形態差となったことも要因として考えておきたい。

また、5～7類にみられるように、土壙掘削直後の火を伴う行為があり、その後土器棺など方法は違うが、埋葬行為が行われている。儀礼の場と埋葬の場が一致したものである。石川氏は炭化材が構造材として用いられ、儀礼の場としての上屨構造の可能性を指摘する。さらに埋葬後の行為として疊の被覆がある。これは住居廃絶の際の火処を「塞ぐ」集石行為と共に通する「思想」があったものと思われる。疊の被覆に前後して土器の破碎が行われる。土器の破碎はしばしば祭祀的行為と捉えられ、この場合も土器棺を除いて、そのように考えて大過なかろう。石器や黒色円疊は副葬遺物として捉えられるが、1類にもみられる黒色円疊には特別な意味があったものと推定できる。

このように、住居の廃絶と葬送に共通な集石を中心とする儀礼的行為は、弥生時代中期の本遺跡にあって、優れて特徴的な遺構として残る。しかし、埋葬施設上の疊の被覆は、本遺跡にとどまらず、弥生時代中期後半以降の吉野川流域の各所で確認されている⁽⁴²⁾。特に中期末～後期初頭の土成町山麓部に多く、北原遺跡土壙11、集石土壙1～3⁽⁴³⁾、北原大法寺遺跡SK1009⁽⁴⁴⁾、前田遺跡SK1004、SK1060⁽⁴⁵⁾、土成前田遺跡土坑3⁽⁴⁶⁾ 椎ヶ丸～芝生遺跡集石土壙墓が報告されている。それぞれの集落内での位置については、前田遺跡例を除いて不明であるが、墓であると認識されている。北原遺跡集石土壙を除いて構築方法には共通点が多い。桜ノ岡遺跡（I）7類と比べても、白（黒）色円疊を欠くこと、土器の分量が少ないと以外は、火の使用・石器・土器・集石と概ね一致する。時期的に中期後半凹線文盛行期の1段階を欠くとはいえた集石遺構の系譜をひくものと理解しておきたい。北原遺跡集石土壙は集石の状態がやや異なり、庄内式併行期古段階の三好町・足代東原遺跡の積石墓群⁽⁴⁷⁾、鳴門市・萩原墳墓群1号墓⁽⁴⁸⁾などにつながる可能性を持っているが、「塞ぐ」集石が、墓標的な意味合いを加えた結果であるとも考えられる。やはり、凹線文盛行期の状況によって、分化し成立した可能性を踏まえてながら、被覆疊堆墓の系譜については、なお、詳細な検討が必要であろう。

なお、集石を伴わない土壙墓は SK1017 が確認できるだけである。

(4) 弥生時代の石器

本遺跡で出土した弥生中期の石器は総数326点。未製品や欠損したものも含まれている。内訳は、サヌカイトの剝片を加工した石鎌107点(32.8%)、石錐10点(3%)、石槍6点(1.8%)、楔形石器22点(6.7%)、スクレイバー25点(7.7%)。結晶片岩を主に利用した剝片石器、打製石庖丁56点(17.2%)、石鎌5点(1.5%)、石鋸2点(0.6%)、打製石斧1点(0.3%)。主に緑色片岩・黒色片岩を加工した磨製石器、柱状片刃石斧20点(6.1%)、扁平片刃石斧6点(1.8%)、大型蛤刃石斧6点(1.8%)、小型扁平石斧7点(2.1%)、小型方柱状石斧3点(0.9%)、小型円柱状石斧3点(0.9%)。砾石器、叩石17点(5.2%)、砥石30点(9.2%)である。

用途別に、まとめてみると、狩猟具(石鎌・石槍)113点(34.7%)、収穫具(打製石庖丁・石鎌・打製石斧)62点(19.0%)、食品加工具(スクレイバー・叩石・砥石)72点(22.1%)、加工工具(石錐・楔形石器・石鋸・磨製石斧)79点(24.2%)である。叩石・砥石は加工工具としても利用されているのでその割合は高くなる。全体を概観すると、収穫具の割合が弥生集落としては低く、対して狩猟具の多さが目立つ。石鎌の中には、長さ3cm以上、重さ2g以上の、戦闘用⁽⁴⁾ともみなされる大型の鎌が28点含まれる。

本遺跡の石器を概観するとき、粗雑なつくりの石器が多いことに気づく。たとえば、打製石庖丁はサヌカイト製が2点あるだけで、他は石英片岩を素材としているが、両端に抉りを施したものは全56点のうち25点、刃部を形成しただけの粗い成形のものが26点ある。石鎌は有茎のものは7点、あとは平基・凹基を中心として凸基・円基が混じる無茎鎌であるが、調整は粗いものが目立つ。磨製石斧でも柱状石斧の抉り入りは退化して消え、代わりに、抉りの部分に粒状の敲打痕が集中する場合が多い。したがって、研磨も刃部を中心とし、基部・身部は研磨以前の敲打痕を残したり、自然面のままの例が多い。粗雑な石器が多いのは本遺跡の石器づくりの特徴か、あるいは廃絶される際に利器は移動させた結果とも考えられる。

石鎌 凹基無茎(36) — 33, 34, 35, 36, 37, 70, 88, 89, 90, 92, 93, 94, 342, 520, 542, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 660, 661, 662

平基無茎(16) — 32, 86, 87, 91, 98, 215, 538, 543, 544, 653, 664, 665, 666, 668, 669, 670

平基無茎(船形)(4) — 102, 169, 218, 583

円基無茎(23) — 69, 95, 96, 97, 99, 216, 217, 632, 667, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678,

- 679, 680, 681, 682, 683, 684
 凸基無茎 (1) — 582
 平基有茎 (2) — 103, 689
 凸基有茎 (5) — 104, 105, 219, 613, 688
 基部欠損 (13) — 38, 39, 40, 41, 100, 108, 110, 111, 112, 113, 685, 686, 687
 未製品 (7) — 101, 106, 107, 109, 114, 168, 663
 石槍 (6) —————— 43, 292, 615, 691, 692, 693
 石錐 基部あり (5) — 116, 117, 118, 119, 690
 錐部のみ (3) — 42, 120, 121
 棒状 (2) —————— 115, 614
 楔形石器 (22) —————— 44, 45, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 170, 545, 546, 547, 584, 616,
 694, 695, 696, 697, 698, 699
 スクレイパー (25) — 130, 131, 132, 133, 134, 135, 197, 220, 221, 222, 293, 343, 475, 476, 506, 507,
 521, 617, 618, 619, 633, 700, 701, 702, 702
 打製石廻丁 扱りあり (25) — 47, 48, 49, 138, 139, 140, 198, 223, 224, 226, 239, 294, 344, 429,
 430, 431, 508, 548, 704, 705, 707, 715, 716, 718, 719
 扱りなし (26) — 46, 141, 142, 143, 193, 194, 225, 535, 620, 623, 706, 708, 709, 710, 711,
 712, 713, 714, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726
 不明 (5) — 144, 171, 227, 295, 525, 717
 打製石鎌 (5) — 228, 296, 621, 622, 727
 石鏃 (2) — 728, 729
 磨製石斧 小型方柱状 (3) — 148, 270, 509
 小型扁平 (7) — 54, 145, 146, 147, 532, 738, 739
 小型円柱状 (3) — 55, 345, 737
 柱状片刃 (15) — 50, 51, 53, 163, 433, 477, 516, 624, 625, 730, 731, 732, 733, 734, 735
 柱状片刃未製品 (5) — 52, 434, 435, 436, 579
 扁平片刃 (6) — 149, 150, 151, 229, 437, 736
 大型蛤壳 (3) — 555, 580, 740
 大型蛤壳未製品 (3) — 438, 526, 566
 石歛 (1) —————— 432
 叩石 円碌利用 (10) — 57, 172, 195, 230, 549, 626, 627, 628, 629, 741
 棒状碌利用 (7) — 56, 152, 153, 522, 539, 630
 砥石 (30) —————— 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 154, 155, 156, 157, 158, 173, 231,

注

- (1) 柴田昌児「桜ノ岡遺跡（I）出土弥生土器の位置付けに関する若干の予察」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 1』1990 財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- (2) 小林竹雄・佐原真「紫雲山」1964 鮎間町文化財保護委員会
- (3) 斎田耕作他「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三冊欠ノ塚遺跡」1987 香川県教育委員会他
- (4) 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51 百間川兼基遺跡・百間川今谷遺跡1』1982
- (5) 前掲（2）、佐原氏の分類による。
- (6) 佐原真「畿内地方」『弥生式土器集成本編2』1968
- (7) 高畠知功「備中地域」伊藤実「備後地域」『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編一』1992
- (8) 前掲（4）参照。
- (9) 岡山県教育委員会「門田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』55 1983
- (10) 電大阪文化財センター「美濃」1985
- (11) 正岡謙夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年一山陰・山陽編一』1992
- (12) 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の上器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』1990 勤務香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会

大久保氏は角閃石粒を多量に含むB類土器の製作地について言及し、旧香東川流域であろうと推定している。B類上器成立以前についても同様で、旧香東川流域の上天神遺跡は9割以上の土器に角閃石粒が含まれているという。

- (13) 高橋謙「入門講座・弥生土器一山陽1～4」『月刊考古学ジャーナル』173・175・179・181号 1980
- (14) 前掲（6）
- (15) 井藤義子「入門講座・弥生土器 近畿1～5」『月刊考古学ジャーナル』195・202・205・207・219号 1981
- (16) 森岡秀人「各地域の併行関係・解説」『弥生土器の様式と編年一近畿編II-1』1990 425P
- (17) 寺沢薰・森岡秀人編「弥生土器の様式と編年一近畿編I・II-1」1989・1990

この中で、河内・摂津・山城・近江は回線文の登場を第IV様式の画期とし、和泉・大和・紀伊・丹波・丹後は旧来の画期に準じている。さらに河内・大和・摂津・和泉・山城・近江で古段階の細分が行われている。

- (18) 前掲（2）
- (19) 錦木義昌「山陽地方II」『弥生式土器集成 本編1』1964

- (20) 岡山県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告』1972
- (21) 前掲 (13)
- (22) 前掲 (4)
- (23) 前掲 (11)
- (24) 関本健児「入門講座・弥生土器一四回」1~5『月刊考古学ジャーナル』88~90・92・93号 1974
- (25) 天羽利大・岡山真知子「點波川下流域における弥生文化の展開—序論—」「徳島県博物館紀要」5 1974
- (26) 徳島市教育委員会調査の名東遺跡資料の中に当該期の土器が出土している。
- 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』1~3 1989・1992・1993
勝浦康守『名東遺跡発掘調査概要』1990 名東遺跡発掘調査委員会
- (27) 香原康夫他「光勝院寺内遺跡」1984 徳島県教育委員会
- (28) 森浩一編『土取遺跡調査報告』1973 徳島県教育委員会・三好町教育委員会
- (29) 勝浦康守『名東遺跡発掘調査概要—名東西都市下水路建設工事に伴う発掘調査』『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』3 1993 徳島市教育委員会
- (30) 鹿児島県教育委員会『一般国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(I)王子遺跡』1985
- (31) 鹿児島県教育委員会『一般国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(II)前畠遺跡』1990
- (32) 日本考古学協会『日本考古学年報』39 1988
- (33) 佐賀市教育委員会『佐賀市文化財調査報告書』第24集 1989
- (34) 関金町教育委員会『大山池遺跡(上野辺地区)・大坪塚古墳発掘調査報告書』1985
- (35) 徳島県教育委員会『西長峰遺跡現地説明会資料』1990
- (36) 岩崎道也氏のご教示による。岩崎氏によれば、独立棟柱建物は特に珍しい検出例ではなく、倉庫の場合も多いという。「近江八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」などによる。
- (37) 宮本長二郎「弥生時代・古墳時代の獨立柱建物」「弥生時代の獨立性建物跡一本編」1991埋蔵文化研究会
- (38) 前掲 (30)
- (39) 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3 中国縱貫自動車道建設に伴う発掘調査1』1973
- (40) 石川直章「複次葬についてのノート 一桜ノ岡遺跡(1)出土の大型集石土壤検討のための基礎作業その1—』『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.1 財團法人徳島県埋蔵文化財センター1990
石川直章「火をともなう葬送についてのノート—桜ノ岡遺跡(1)出土の大型集石土壤検討のための基礎作業その2—』『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.2 財團法人徳島県埋蔵文化財センター1991
- (41) 徳島県埋蔵文化財センター「椎ヶ丸～芝生遺跡」「徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.2』1991
- (42) 前掲 (40) に詳しい。現段階では筆者の見解と相違するものも含まれている。
- (43) 徳島県教育委員会『土成町北原遺跡』1988

- (44) 徳島県埋蔵文化財センター「北原～大法寺遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.2』1991
- (45) 徳島県埋蔵文化財センター「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2 前田遺跡」
1993
- (46) 徳島県教育委員会『土成前田遺跡』1989
- (47) 菅原康夫「徳島県足代東原遺跡」『日本考古学年報』35 1985日本考古学協会
- (48) 菅原康夫他「荻原墳墓群」1983徳島県教育委員会
- (49) 前掲（2）
- 松木武彦「弥生時代の石製武器の発達の地域性—特に打製石鎌について」『考古学研究』35～4
1989

4 自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

桜ノ岡遺跡（I）（阿波郡阿波町桜ノ岡）は、吉野川中流域左岸の段丘上（標高約84m）に立地する。これまでの発掘調査により、弥生時代中期および中世を中心とした遺構や遺物が検出されている。とくに弥生時代中期の遺構では土壌が検出されており、土壌底部付近から土器片や炭化材が検出された。発掘調査所見によると、本土壤は土器棺墓による墓壙と推測され、本土壤で検出された炭化材は遺構に伴うものと考えられている。

今回の自然科学分析調査では、弥生時代中期の土壌の性格、とくに墓壙の可能性について検討することと、土壌底部から検出された炭化材の樹種を知ることが目的である。

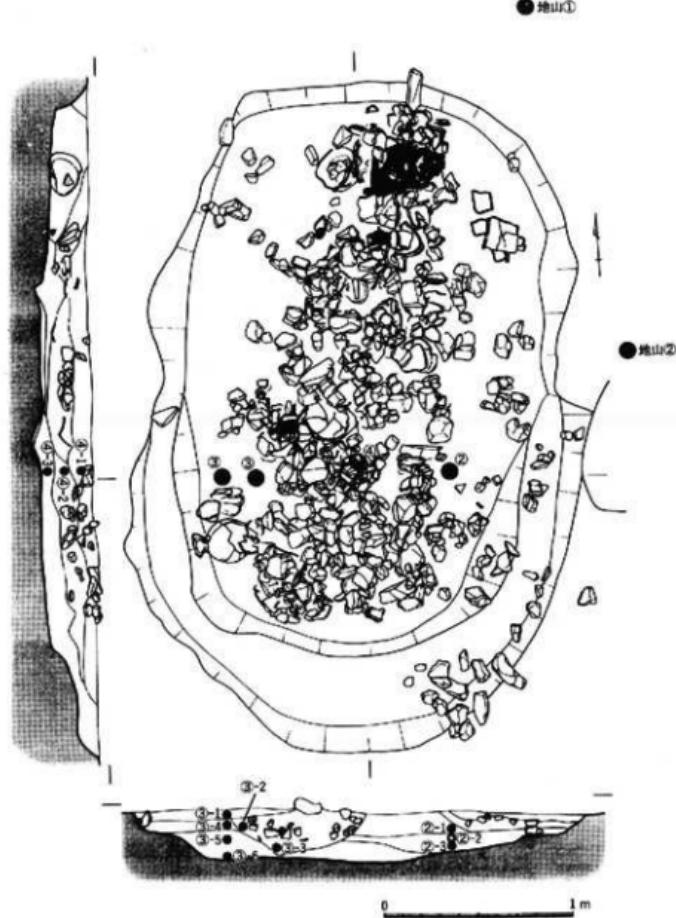
土壌あるいは土器内に人骨の痕跡が認められない場合、その痕跡を検証する理化学的分析手法として、次の2つの方法がある。ひとつは、人体とくに人骨に多量に含まれ、土壌中では比較的移動しにくいとされるリン酸の含有量を測定するリン分析（竹迫 1981）である。もうひとつは、動植物の有機成分であり、土壌中に比較的残留しやすいとされる脂肪酸の組成を測定する脂肪酸分析（中野 1986）である。とくに、後者の脂肪酸分析は脂肪酸の特徴から、動植物の種類を同定できる点で優れている。しかし、試料の取扱いの難しさと分析の繁雑さ、あるいは土壌を対象にした場合のデータの信頼性について開発しなければならない課題がある。したがって、分析調査事例が豊富で、分析操作が比較的簡便なリン分析を選択した。一方、土壌底部から検出された炭化材の種類を知るために材同定を行うこととした。

（1） 土壌分析

① 試料

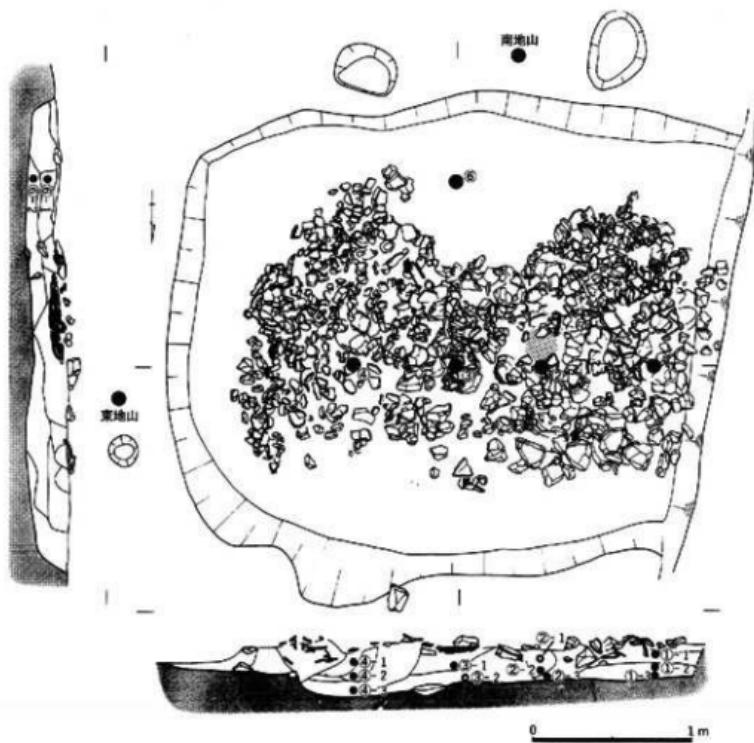
リン分析については、8号土壌（SK1008）、16号土壌（SK1016）、39号土壌（SK1039）の堆積物と8号土壌、16号土壌付近から採取された地山（自然堆積層）を対象とした。分析点数は合計30点（図1～3）である。

炭化材同定については、2基の土壌（SK1008、SK1016）内から検出された炭化材合計5点（試料名：SK1008炭化材①・炭化材②、SK1016東西壁面直上・C床面直上・⑥地点床面直上炭化材）である。表1に各分析調査の試料表を示す。



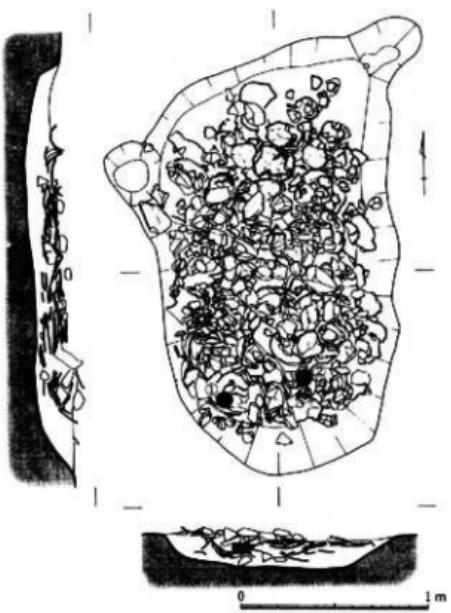
○ ● は試料採取位置を示し、● はリン分析試料とした

図1 SK1008平・断面図および試料採取位置



○・●は試料採取位置を示し、●はリン分析試料とした

図2 SK1016平・断面図および試料採取位置



●は試料採取位置を示し、リン分析試料とした

図3 SK1039平・断面図および試料採取位置

表1 分析試料の一覧

分析項目	土 壤	試料番号	質 (当社の観察結果に基づく)
リン分析	SK1008	②-1	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		②-2	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		③-1	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		③-2	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		③-3	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		③-4	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		③-5	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		③-6	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		④-1	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		④-2	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		④-3	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		地山①	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		地山②	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		土器①	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		土器⑤	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
SK1016	SK1016	①-1	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		①-2	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		①-3	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		②-2	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		②-3	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		③-1	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		④-1	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		④-2	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		④-3	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		⑥-1	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		⑥-2	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		東地山	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		西地山	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
SK1039	SK1039	土器①	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
		土器②	10YR4/2 にぶい黄褐色 壱土 (L)
炭化材同定	SK1008	炭化材① 炭化材②	炭化材 炭化材
	SK1016	東西畦面直上 C床面直上 土壤分析⑥-2下	炭化材 炭化材 炭化材

注) リン分析試料の質は、農林省農林水産技術会議事務局(1967)、ペドロジスト懇談会(1984)を参考に調査した。

② 弥生時代中期の土壤の性格

(a) リン分析の方法と結果

測定方法は、土壤標準分析・測定法委員会（1986）、土壤養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）などを参考にした。以下に具体的な操作行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2mmの顎を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料2gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO₃）5mLを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）10mLを加えて再び加熱分解を行う。分解修了後、水で100mLに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量（P₂O₅mg/g）を求める。分析結果を表2に示す。

表2 リン分析結果

土 坑	試料 番号	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	土 坑	試料 番号	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g
SK1008	②-1	0.80	SK1016	①-1	0.82
	②-2	0.71		①-2	0.85
	③-1	0.74		①-3	0.73
	③-2	0.73		②-2	0.69
	③-3	0.73		②-3	0.69
	③-4	0.70		③-1	0.72
	③-5	0.60		④-1	0.72
	③-6	0.65		④-2	0.64
	④-1	0.72		④-3	0.62
	④-2	0.73		⑥-1	0.73
	④-3	0.65		⑥-2	0.75
	地山①	0.58		東地山	0.68
	地山②	0.48		南地山	0.74
土器①	0.78		SK1039	土器①	1.01
土器⑤	0.81			土器②	1.04

注) リン酸含量の単位は乾土1gあたりのmgで表示。

(b) 考察

SK1008では、地山を除く各試料の含量が0.60~0.81P₂O₅mg/g（平均値：0.73、母標準偏差：0.063）の比較的狭い範囲の値を示す。また、SK1016においても地山を含めた含量範囲が

0.62～0.85P₂O₅mg/g（平均値：0.72、母標準偏差：0.063）で、SK1008とほぼ同じ範囲の値を示す。一方、SK1039の土器内試料では、両者ともに1.0P₂O₅mg/gの範囲にあり、SK1008、SK1016よりやや高い値が認められる。

ところで、土壤に通常含有されるリン含量については様々な報告例がある。Bowen(1983)によって調査された各国のリン含量では、中央値が2.0P₂O₅mg/g、Bolt and Bruggenwert (1980) では1.0～2.5P₂O₅mg/gとされる。川崎ほか(1991)の研究事例では、リン含量の比較的高い黒ボク土の平均値は未耕地で2.1P₂O₅mg/g、既耕地で5.5P₂O₅mg/g、天野ほか(1991)の研究事例では、リンの自然賦存量は2.7P₂O₅mg/g以下とされる。なお、それぞれの研究事例に記載されている単位がまちまちであるため、ここではすべて「P₂O₅mg/g」として統一表示した。これらの報告例から、土壤本来のリン含量は普通3.0P₂O₅mg/g以下で、最大でも5.0P₂O₅mg/g前後と推定される（以後、本文中でこの範囲の含量を標準含量と仮称する）。したがって、この値を著しく越える土壤は、何らかの影響によってリン成分が土壤中に富化されたものと考えられる。今回の結果では、いずれもこの標準含量を越えていないことから、リン成分の高い内容物による富化は認められない。したがって、分析調査の対象とした土壤あるいは土器内に人体を埋葬した可能性を指摘することは難しい。ただし、SK1039の土器内において相対的な含量の増加が認められる点についてSK1008の土器より何らかの内容物の存在が考えられる。しかしこの値では積極的に検討できるものではなく、次のことが想定される。

- ① 土器内に遺体が埋葬されていたが、分解したリン成分のほとんどが埋積物に吸着・保持されることなく系外へ流失した。
- ② 人体などの動物遺体とは異なるものが保存された（例えば、植物性の食物など）。
- ③ 埋積物そのものに含まれているリン含量が土壤内の埋積物と異なっていた。

しかし、リン分析では内容物の痕跡（人あるいは動物遺体などに限る）を定性的に捉える手法であり、人以外の動物遺体が埋納された場合や植物体が保存されたか否かを判別することはできない。

(2) 炭化材同定

① 土壤埋積物の炭化材

(a) 炭化材の同定方法

試料を乾燥させたのち木口（横断面）・柱目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

(b) 結果

同定結果を表3に示す。SK1016東西畦面直上とC床面直上の試料については、それぞれ3種類の材が認められたため、試料名にa～cの記号を付して表記した。各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的性質等を以下に記す。なお、和名・学名等は主として「原色日本植物図鑑 木本編(II)」(北村・村田, 1979)にしたがい、現生種の一般的性質等については「木の事典 第2, 3, 4, 6, 8巻」(平井, 1979-1981)も参考にした。

表3 桜ノ岡遺跡(1)出土炭化材同定結果

試料名	用途	時代	樹種名
SK1008 炭化材① 炭化材②	燃料材	弥生時代中期	ヤマグワ
	燃料材	弥生時代中期	ヤマグワ
SK1016 東西畦面直上 a 東西畦面直上 b 東西畦面直上 c C床面直上 a C床面直上 b C床面直上 c ⑥地点床面直上炭化材	燃料材	弥生時代中期	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
	燃料材	弥生時代中期	ツブライ
	燃料材	弥生時代中期	ヤマグワ近似種
	燃料材	弥生時代中期	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
	燃料材	弥生時代中期	ヒノキ属の一種
	燃料材	弥生時代中期	シキミ近似種
	燃料材	弥生時代中期	コナラ属アカガシ亜属の一種

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ヒノキ属には、ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*(Sieb. et Zucc.)Endlicher) とサワラ (*C. pisifera*(Sieb. et Zucc.)Endlicher) の2種がある。ヒノキは本州(福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州(岩手県以南)・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科

環孔材で孔眼部は1～2列、孔眼外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～橢円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独。單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。柔組織は周辺状および短接線状。柔細胞はし

しばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ節では、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson)、コナラ (*Q. serrata* Murray)、ナラガシワ (*Q. aliena* Blume)、カシワ (*Q. dentata* Thunberg) といいくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima* Charruthers) に次ぐ優良材である。枝葉を綠肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

・コナラ属アカガシ亜属の一種 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は短接線状および散在状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属（カシ類）には、アカガシ (*Quercus acuta* Thunberg)、イチイガシ (*Q. gilva* Blume)、アラカシ (*Q. glauca* Thunberg) など7種があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木～小高木のウバメガシ (*Q. phyllyraeoides* Asa Gray) も、材構造上かカシ類と類似する。カシ類は、暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要な構成種であり、主として西南日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで、宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強靭で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。また種子は食用となる。

・ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科

環孔材～放射孔材で孔隙部は3～4列、孔隙外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では梢円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った梢円形～多角形、とともに管壁厚は中庸～薄い。道管の穿孔は單穿孔であるが、小道管には1～6段前後の階段穿孔が現れることがある。道管内壁の壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。柔組織は周囲状、散在状および短接線状、年輪界は明瞭。

ツブラジイは、同属のスグジイやコナラ属アカガシ亜属（カシ類）とともに、暖温帯常緑広葉樹林の主要構成種である。本州（伊豆半島以西南）・四国・九州に分布し、また植栽され

る高木で、内陸地に多く生育する。材はやや重硬で、割裂性は大きく、加工はやや容易、耐朽性は中程度～低い。薪炭材としての用途が最も多く、器具・家具・建築材などにも用いられる。種子は食用となり、樹皮はタンニン原料となる。

・ヤマグワ (*Morus bombycina* Poiret) クワ科

環孔材で孔眼部は1～5列、晚材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は管壁は厚く、横断面では梢円形、単独または2～3個が複合、小道管は管壁厚は中庸、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II～III型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状～翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木で多くの園芸品種があり、養蚕に利用されている。ヤマグワの材はやや重硬で強韌、加工はやや困難で、保存性は高い。装飾材や器具・家具材として用いられ、樹皮は和紙の原料や染料となり、果実は食用となる。

・シキミ近似種 (cf. *Illicium anisatum* L.) シキミ科

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段は多数、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性II～I型、1～2細胞幅、1～20細胞高。年輪界は不明瞭。

シキミは本州（宮城・新潟県以南）・四国・九州自生する常緑小高木であり、庭や墓地に植栽されることもある。西日本に多く、カシ林やモミ・ツガ林の下木として普通である。材の強度は中程度で、細工物・薪炭材などに用いられる。材の利用よりも、枝葉を仏花としてよく知られている。

(c) 考察

炭化材は、ヒノキ属・コナラ節・アカガシ亜属・ツブラジイ・ヤマグワ・シキミ近似種の6種類に同定された。今回検出された炭化材の用途については、不明である。仮にこれらの炭化材が燃料材として利用されていたならば、次のことが推定される。

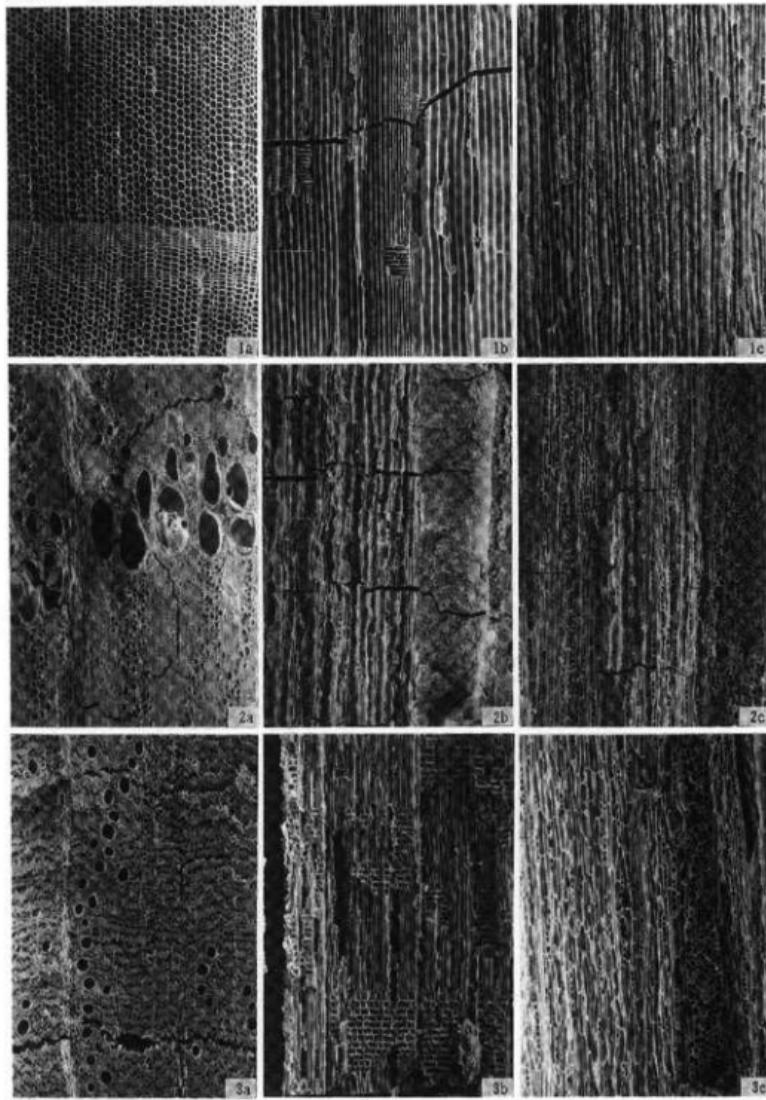
分析調査の対象とされた土壌のうち、SK1016では試料数に対して種類数が比較的多い。また、材が軽軟で燃え残りにくいと考えられるヒノキ属も1点検出されており、使用していた当時の組成に近い結果の可能性がある。同定された種類を見ると、コナラ節・アカガシ亜属・ツブラジイのようにブナ科に属する樹種が多い。これらはいずれも燃料材として優れた材であり、現在でも木炭等の燃料材に用いられている。また、地域は離れるが兵庫県佐用郡の坂遺跡及び山平B遺跡では平安時代の製鉄炉から検出された燃料材にコナラ節と同亜属のクヌギ節が（パリノ・サーヴェイ株式会社、1992）、兵庫県竹野町鬼神谷窯跡の須恵器窯から検出された燃料材にアカガシ亜属・シイ属等（伊東、1990）がそれぞれ同定されている。

今回の結果は、他地域で行われた事例と同様にブナ科の樹種が多く、これらの木材は選択して用いられた可能性がある。しかし、徳島県では過去に材同定が行われた例はこれまでに知られておらず、過去の人間の用材選択については不明な点が多い。そのため、今回の結果についても用材が選択されていたと断定することはできない。これについては、様々な木質遺物について分析調査事例を増やすことが不可欠であり、今後さらに資料の蓄積が必要である。

(引用文献)

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p. : p.28 -36.
- Bowen,H.J.M. (1983) 環境無機化学 一元素の循環と生化学一, 渋見輝男・茅野充男訳, p.297, 博友社 [Bowen,H.J.M. (1979) *Environmental Chemistry of Elements*].
- Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M. (1980) 土壤の化学。岩田進午・三輪喜太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 309p., p.235-236, 学会出版センター[Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976) *SOIL CHEMISTRY*].
- 土壤標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壤標準分析・測定法。354p., 博友社。
- 土壤養分測定法委員会編 (1981) 土壤養分分析法。440p., 販賣堂。
- 平井信二(1979-1981) 木の事典 第2、3、4、6、8巻、かなえ書房
- 伊東隆夫 (1990) 鬼神谷窯跡出土炭化材の樹種。「鬼神谷窯跡発掘調査報告」, p.45-46, 竹野町教育委員会
- 川崎 弘・吉田 謙・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p., p.23-27.
- 北村四郎・村田 源 (1979) 原色日本植物図鑑 木本編(II), 545p., 保育社。
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 第1巻。411p., 産業図書。
- 中野益男 (1986) 真鍋遺跡出土土器に残存する動物油脂、「真鍋遺跡」配石遺構の土壤に残存する脂肪の分析。大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書, 第1巻, 46p., 秋田県鹿角市教育委員会。
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1992) 炭の樹種同定。兵庫県生産遺跡調査報告書第1冊「製鐵遺跡I(佐用郡)」, p.92-95, 兵庫県教育委員会。
- ペドロジスト懇談会編 (1984) 野外土性の判定。「土壤調査ハンドブック」, 156p., p.39-40, 博友社。
- 竹追 繁 (1981) 11号住居址内埋蔵中の土壤リン酸分析。横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告, p.156-158, 横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団。

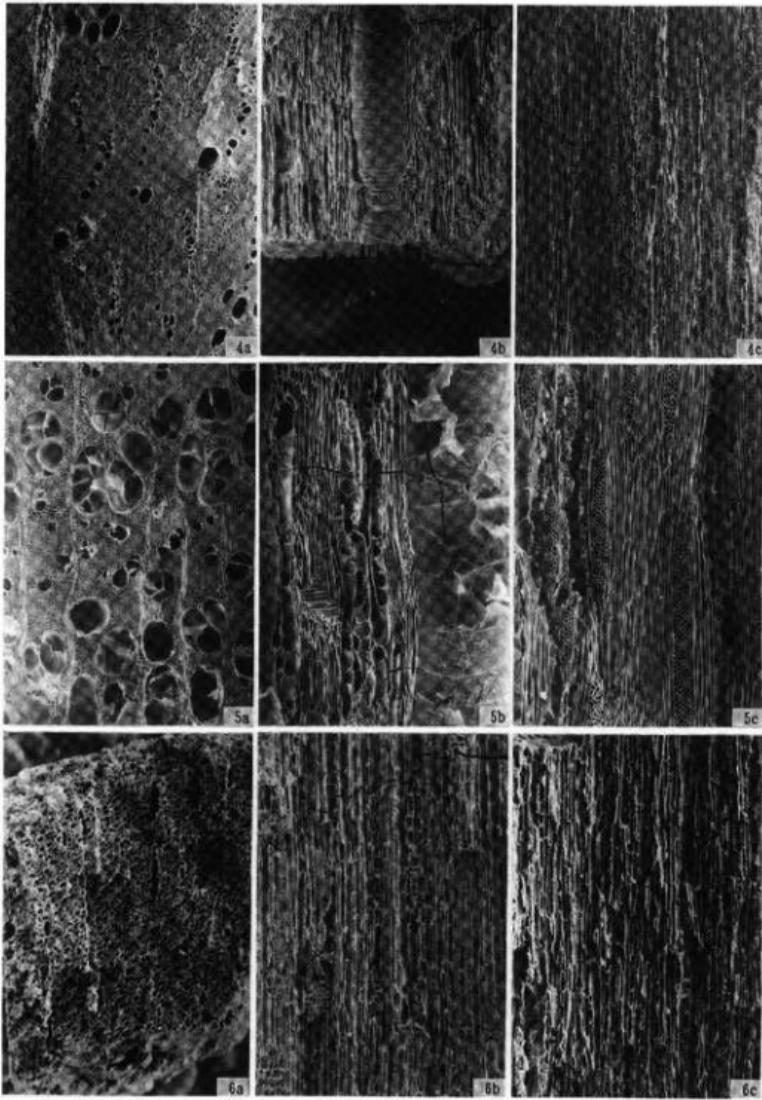
図版1 桜ノ岡遺跡（I）炭化材(1)



1. ヒノキ属の一種 (SK1016 C床面直上 b)
2. コナラ属コナラ亞属コナラ属の一種 (SK1016C床面直上 a)
3. コナラ属アカガシ亞属の一種 (SK1016 ⑥地点床面直上炭化材)
a:木口, b:柱目, c:板目

— 229 —

図版2 桜ノ岡遺跡(II) 炭化材(2)



4. ツブラジイ (SK1016 東西壁面直上 b)
5. ヤマグツ (SK1008 炭化材 c)
6. シキミ近似種 (SK1016 C 床面直上 c)
a: 木口, b: 斎面, c: 板目

— 230 —
200μm : a
200μm : b, c

B 桜ノ岡遺跡（III）

1 基本層序（第202・203図）

桜ノ岡遺跡（III）は、たちばな谷の支流によって形成された、東西幅約30m、南北の長さ200mの尾根状をなす狭い段丘面上にある。調査前の土地利用は、調査地が果樹園と畑作、調査地の北側に水田がある。調査区とその周辺の地形を第203図に示した。水田部分はもちろんのこと、果樹園部分についても北側と南側については削平を受けているようである。

調査区壁A-B間の土層図（第203図）によると北側は表土下が地山、中央部は表土下に明黄褐色の砂質土層が、比較的安定して堆積し、南側はまた、表土下が削平された地山となっている。C-D間に於いては、A地点付近までは表土直下が地山、緩やかな斜面部にかかる地点で明黄褐色土が堆積している。

この表土層・明黄褐色土層とともに密度は低いが、遺物を包含している。

2 出土遺物（第204図）

調査区内で出土した遺物は、弥生土器片17点、土師器片2点、須恵質土器片2点、サヌカイト片10点、結晶片岩片4点、細石刃1点、楔形石器1点、小型円柱状石斧1点がすべてである。

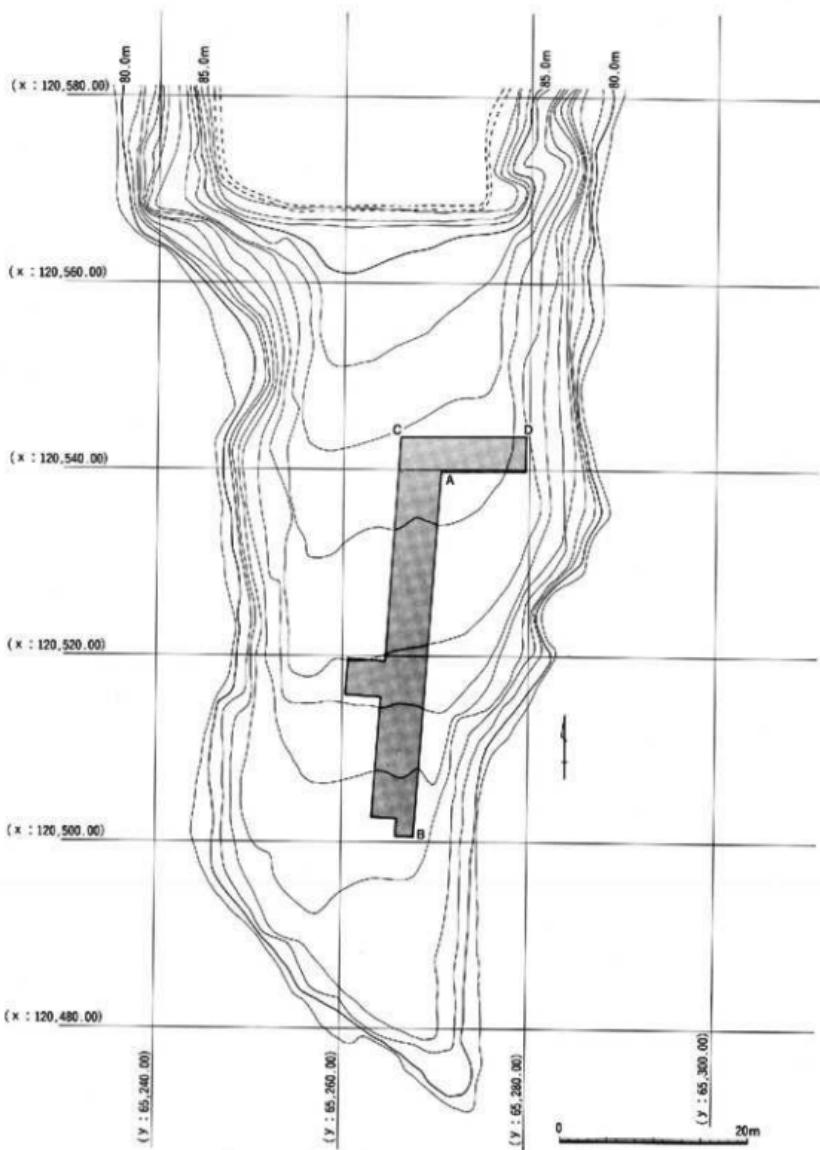
1は細石刃とみられる緑灰色のチャート製の縦長の剥片である。表面に交互剝離による2条の稜が観察でき、断面台形を呈している。井島I式段階の可能性がある。

2は楔形石器である。波紋質安山岩の自然縫合端が、両極打法による剝離状況を呈す。左側面は裁断面である。3・4はサヌカイトの横長の剥片である。ともに他の剥片に較べて風化の度合いが著しく、細石刃等と共に伴する時期の可能性がある。

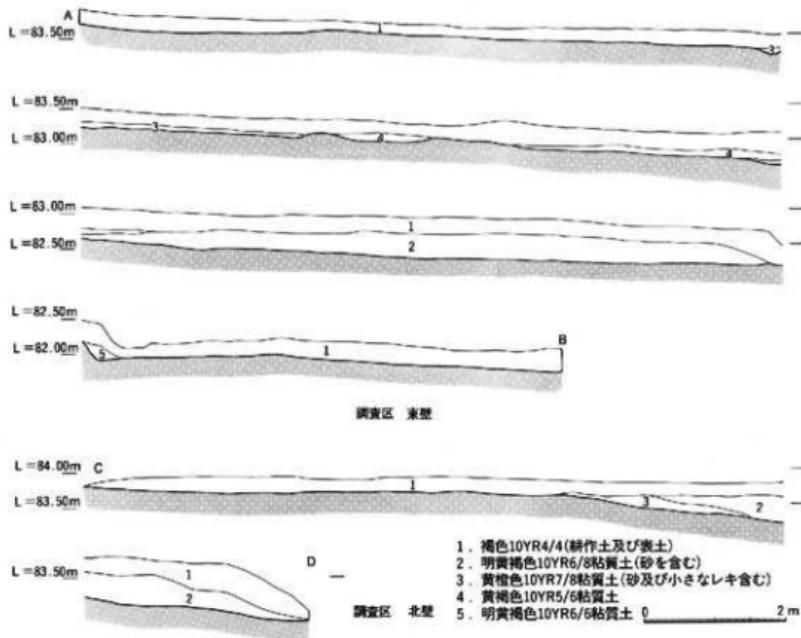
5は小型円柱状石斧である。石材は粘板岩。表面に自然面が残っているので、母岩からはぎ取った剥片の縁辺を敲打して成形し、刃部を中心とし表裏面の研磨と、側辺の研磨を行って仕上げている。口吉谷遺跡に類例⁽¹⁾がみられる。

弥生土器片は圓化できる個体はなかったが、壺・甕等の破片とみられ、あまり摩滅していない。器面調整は、粗いハケが中心で、甕の体部下半とみられる破片に、内面へラケゼリ技法がみられ、中期後半以降のものである可能性が考えられる。

須恵質土器片の中には、備前焼の攝鉢がみられる。片口の部分しか残っていないので圓化是不可能であるが、古い段階の可能性がある。土師器片は甕の口縁部の極小片があるが、口縁内面をハケで撫でて仕上げている。



第202図 横ノ岡遺跡（III）地形・調査区配置図



第203図 桜ノ岡遺跡（III）調査区壁土層図

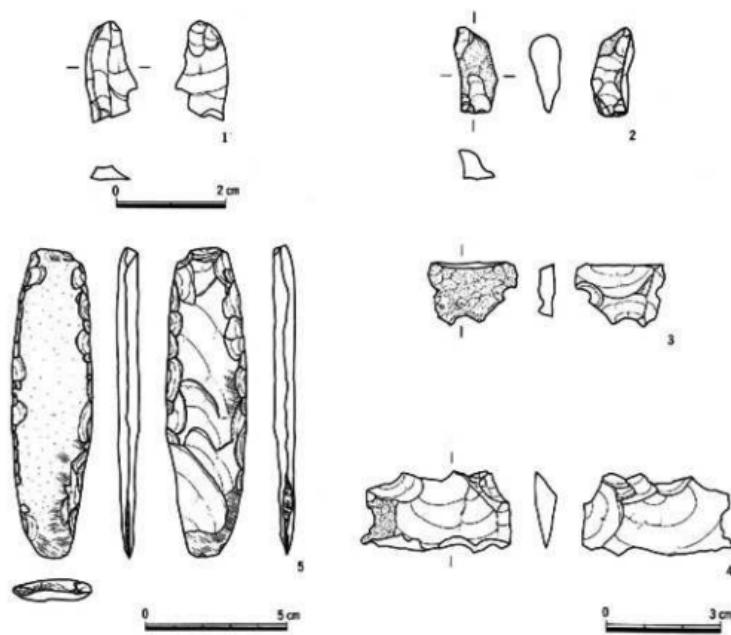
3 まとめ

桜ノ岡遺跡（III）の地点では、遺構は検出されず、遺物の出土数も少ない。遺物は旧石器時代の可能性のあるものから、弥生時代・中世と幅がある。定住的な営為は検出されなかつたものの、周辺の遺跡との関連で成立した遺物包藏地と理解しておきたい。

また、細石刃の出土は徳島県内では、まだその例が少なく廿枝遺跡に次ぐものであり、石器石材はサスカイトが圧倒的に優位な吉野川北岸にありながら、チャートを石材として使用していることも興味深い。

注

- (1) 財団法人徳島県埋蔵文化財センター「日吉谷遺跡」「徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 1」1990



第204図 桜ノ岡遺跡（III）出土遺物実測図

第2表 弥生時代堅穴住居跡一覧表

遺構名	出土地点	規模(cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	測定番号	
SB1001	2・7区 Y・Z-18・19	長60 (60)	幅60 (59)	深さ 26	102×91×15	不整円形	赤土塗、防護壁、石塊、石板、瓦 板瓦石器、石器、鐵 1. 甲石、台石、廢 石、サヌカイト片等	中期 1段階	周壁有り。 柱穴替え。 馬蹄造構あり。	10-18
		柱穴(深さ) P-1 (43) P-2 (30) P-3 (34) P-4 (20) P-5 (25) P-6 (21) P-7 (33) P-8 (11) P-9 (36) P-10 (28) P-11 (21) P-12 (20) P-13 (22) P-14 (21) P-15 (29)								
SB1002	7区 Z・AA-22	長62 (60)	幅62 (59)	深さ 100	91×26 (?)	横円形	赤土塗、石器、サヌカイト片等	中期 1段階	周壁は南側により欠 失。	19
		柱穴(深さ) P-1 (13) P-2 (16) P-3 (26) P-4 (16) P-5 (34) P-6 (43) P-7 (21) P-8 (13) P-9 (32) P-10 (26) P-11 (31) P-13 (31) P-14 (39) P-15 (21) P-16 (6)								
SB1003	7区 W・X-21・22	長60 (57)	幅60 (56)	深さ 18	—	不整円形	赤土塗、防護壁、打製 石器等	中期 1段階	炉をもたない。	20
		柱穴(深さ) P-1 (33) P-2 (26) P-3 (30) P-4 (25) P-5 (30) P-6 (15) P-7 (16) P-8 (15) P-9 (15) P-10 (12) P-11 (20) P-12 (15)								
SB1004	7区 T・V-22・23	長60 (60)	幅60 (60)	深さ 26	130×168×13 (60)	円形	赤土塗、防護壁、 石塊、板瓦石器、 スクリーパー、 サヌカイト片、打 製石器等、櫛製石 斧等	中期 1段階	周空堀あり。 建て替え・整地。	20-29
		柱穴(深さ) P-1 (20) P-2 (11) P-3 (11) P-4 (8) 3 (17) P-4 (10) P-5 (11) P-6 (42) P- 7 (10) P-8 (11) P-9 (23) P-10 (25) P- 11 (26) P-12 (18) P-13 (20) P-14 (12) P- 15 (19) P-16 (25) P-17 (27) P-18 (34)								
SB1005	9区 AC・AD-25・26	長60 (48)	幅60 (29)	深さ 8	140×98×26	不明	赤土塗、防護壁、 板瓦石器、サヌカ イト片等	中期 2段階		30
		柱穴(深さ) P-1 (25) P-2 (9) P-3 (23) P-4 (28) P-5 (25) P-6 (25) P-7 (26) P-8 (26) P-9 (30) P-10 (25) P-11 (19)								
SB1006	9区 AD・AE-28・29	長60 (62)	幅60 (49)	深さ 26	101×70×14 (50)	不整円形	赤土塗、石器、ス クリーパー、サヌ カイト片、甲石、底 石等	中期 1段階	P-8は単体構築の 可能性。 高床部あり。 馬蹄造構あり。	31-35
		柱穴(深さ) P-1 (16) P-2 (27) P-3 (31) P-4 (43) P-5 (23) P-6 (19) P-7 (19) P-8 (20) P-9 (16) P-10 (12) P-11 (16) P-12 (16) P-13 (14) P-14 (13) P-15 (13) P-16 (25)								
SB1007	9区 AC・AD-30・31	長60 (59)	幅60 (59)	深さ 8	100×95×25	不整円形	赤土塗、サヌカ イト片等	中期 (?)		36
		柱穴(深さ) P-1 (17) P-2 (43) P-3 (22) P-4 (10) P-5 (14) P-6 (6) P-7 (6) P-8 (13) P-9 (30) P-10 (31) P-11 (12) P-12 (18) P-13 (20) P-14 (27) P-15 (18) P-16 (23)								
SB1008	7区 Z・AA-23・24	長60 (56)	幅60 (56)	深さ 114	78×25	端円形	赤土塗、サヌカ イト片、打製石 底、縦承石片等	中期 1段階	周壁有り。 周壁は南側により欠 失。	37-39
		柱穴(深さ) P-1 (43) P-2 (32) P-3 (26) P-4 (22) P-5 (12) P-6 (26) P-7 (21) P-8 (18) P-9 (11) P-10 (18) P-11 (29) P-12 (26) P-13 (30) P-14 (27) P-15 (9) P-16 (26)								

遺構名	出土地点	規模 (cm)			平面形	出土遺物	時期	特徴・備考	図面番号
SB1009	11区 AE + AF-18~20	464 320	148 (48)	15	179×62×18	不規則形	弥生土器、スクレ イバー、打製石器 等、サスカイト片	中期	49
					柱穴(深さ)P-1 (30)P-2 (23)P- 3 (17)P-4 (20)P-5 (25)P-6 (21)P- 7 (23)P-8 (42)P-9 (36)P-10 (17)P- 11 (17)P-12 (22)P-13 (12)P-14 (19)P- 15 (38)P-16 (20)P-17 (21)P-18 (27)P- 19 (26)P-20 (13)P-21 (7)				
SB1010	11区 AD + AE-23~24	長36 800	幅35 656	深3 15	83×62×12 mm	不規則形	弥生土器、石器、打 製石器等、サスカ イト片、石英、結晶 片等、磨製石器、チ ヤート	中期	松葉型土器等、 無石造跡あり。
					柱穴(深さ)P-1 (12)P-2 (16)P- 3 (22)P-4 (22)P-5 (22)P-6 (18)P- 7 (18)P-8 (12)P-9 (18)P-10 (30)P- 11 (16)P-12 (9)P-13 (18)P-14 (20)P- 15 (22)P-16 (22)P-17 (14)P-18 (23)P- 19 (25)P-20 (14)P-21 (15)				41~46
SB1011	8区 Z + AA-28~29	長36 560	幅35 (305)	深3 15	—	円形	弥生土器、サスカ イト片	中期	47
					柱穴(深さ) P-1 (9)P-2 (16)P-3 (32)P-4 (24) P-5 (16)P-6 (10)P-7 (19)P-8 (33) P-9 (5)P-10 (10)P-11 (44)				

第3表 弥生時代建物遺構一覧表

遺構名	出土地点	規 模			主軸方向	出土遺物	特徴・備考	図面番号	
		長	幅	高さ					
SA2001	7区 W~Y-21	1×1	—	3.0	3.0	9.0	N~S~W	弥生土器、磨製石 器、サスカイト片 等の櫻吹付	49~54
SA2002	7区 V-W-19	1×2	—	3.0	6.0	15.0	N~E~W	なし	55

第4表 弥生時代遺構一覧表

遺構名	出土地点	規 模 (cm)			平面形	出 土 遺 物	特 徴	図面 番号
		長	幅	高さ				
SK1008	1区 V-13	260	228	25	圓丸形	弥生土器、チリト、打製石器等、 サスカイト片、石器、石礫	被覆堆塗、土器、筒化 物、黑色内壁	56~63
SK1014	1区 W-14	(220)	73	25	圓形	弥生土器、砾石、石器、打製石器等、 サスカイト片、砕裂石片	被覆堆塗、土器、黑色内壁 物、石器、黑色内壁	64~72
SK1016	2区 X-15	(190)	300	25	圓丸形	弥生土器、打製石器、打製石器、打 製石器、砾石、石英	被覆堆塗、土器、黑色内壁 物、石器、白色内壁	73~86
SK1039	3区 R-19	230	130	20	圓丸形	弥生土器、チャート、結石、磨製石 器、スクレイバー	被覆堆塗、土器、黑色内壁 物、石器、白色内壁	87~94
SK1045	1区 Z-15	(283)	(45)	35	不整形	弥生土器、チャート	一型被覆堆塗、土器、 灰灰物、黑色内壁	95~96
SK1049	1区 W-19	A 105	55	30	橢円形	弥生土器、砾石	被覆堆塗、土器、砾石	97~99
			B 48	32	25	圓丸形	弥生土器	上部
SK1061	7区 Z-AA-23~ 24	208	(192)	25	圓丸形	弥生土器、サスカイト片	被覆堆塗	100
SK1168	11区 AE-23	110	110	33	不整形	弥生土器、サスカイト片	被覆堆塗	101
SK1178	9区 AD-28	110	93	20	圓丸形	弥生土器、打製石器等、サスカイト 片、磨製石片	被覆堆塗、上部、石器、 灰灰物	102~ 103
SD1001	2区 Y-Z-16~17	915	42	36	不整形	弥生土器、チャート、瓦片	被覆堆塗、土器、石器、 黑色内壁	104~ 107

遺物名	出土地点	規 模 (cm)			平面形	出 土 遺 物	特徴・備考	類回 番号
		長軸	幅	深さ				
SK1005	1区 V-12	78	64	10	円形	弥生土器、結晶片岩、サスカイト片		
SK1017	2区 W-15	(90)	103	32	不整形	磨滅石斧	土壤層	108
SK1028	2区 W-18	100	74	14	方形	弥生土器、磁石	中位SA1002が重なる	109
SK1029	2区 W-18	121	106	21	不整形	弥生土器、石器、スクレイパー、印石	中位SA1002が重なる	109
SK1034	3区 R-18	118	86	12	橢円形	磁石	上而能平	110
SK1040	3区 P-19	190	42	38	不整形	弥生土器、結晶片岩		
SK1051	2区 Z-AA-23-26	172	166	49	扇形	弥生土器	上而能平	111
SK1052	8区 AB-26	142	128	40	不整形	弥生土器	上而能平	110
SK1057	8区 Z-27	128	107	28	椭円形	弥生土器		112
SK1058	8区 Z-28	163	65	34	圓丸方形	弥生土器		
SK1062	7区 Z-23	(268)	130	(25)	圓丸方形	弥生土器、サスカイト片		113
SK1063	7区 Y-Z-23-24	153	155	24	圓丸方形	弥生土器		114
SK1064	7区 Z-23	127	100	35	橢円形	弥生土器、結晶片岩、磁石		
SK1065	7区 Y-Z-23	266	200	32	不整形	弥生土器、サスカイト片、結晶片岩		
SK1067	7区 Y-23	120	106	21	圓丸方形	弥生土器		
SK1068	7区 X-Y-23-24	(268)	280	28	橢円形	弥生土器、石斧(?)		115
SK1069	7区 Y-23-23	220	200	21	不整形	弥生土器、サスカイト片、石斧丁、結晶片岩		116
SK1070	7区 X-Y-21	215	100	21	長椭円形	弥生土器		117
SK1082	7区 U-22	134	91	19	不整形	石器、結晶片岩、サスカイト片		118
SK1109	6区 R-7+8	(270)	(270)	10	不整形	印石		119
SK1111	6区 R-S 8	96	93	23	不整形	印石		120
SK1127	9区 AD-27	284	120	27	不整形	効應車、板状石器、石器、石斧丁		121
SK1128	9区 AC-AD-28	(120)	80	16	圓丸方形	弥生土器		
SK1129	9区 AC-AD-28	116	110	36	不整形	印石		122
SK1132	9区 AE-29	101	94	13	不整形	弥生土器	弥生後期	123
SK1133	9区 AE-29-30	129	86	11	不整形	弥生土器		124
SK1135	9区 AD-30	207	141	21	不整形		SB1007に係る	
SK1152	11区 AE-28	260	108	45	不整形	弥生土器、サスカイト片、結晶片岩		

遺物名	出土地点	規 模 (cm)			平面形	出 土 遺 物	特徴・備考	補足 資料
		長軸	短軸	深さ				
SK1153	11区 AD・AE - 19-20	280	160	21	不整形	弥生土器、サヌカイト片		
SK1157	11区 AD 17-18	218	134	22	小円形	弥生土器		125
SK1159	11区 AK 20	228	144	28	小円形	弥生土器、縄晶片石		126
SK1164	11区 AD 22	194	102	36	不整形円形	弥生土器、磨製石斧		127
SK1171	11区 AC-AD - 24	344	(146)	27	不整形円形	弥生土器、磨製石斧		128~ 130
SK1174	9区 AC 22	168	68	41	不整形	弥生土器		131
SK1175	9区 AC-AD - 28	96	54	24	椭丸方形	弥生土器、サヌカイト片		132
SK1176	9区 AC 28	124	63	31	壺円形	弥生土器、上蓋円板		133
SK1184	11区 AD-19	88	82	15	不整形		切りあい開口から弥生時代	
SK1188	11区 AF-20	122	62	12	小円形	弥生土器、縄晶片石		134
SK1194	11区 AC-AD - 23-24	166	138	27	不整形円形		切りあい開口から弥生時代	
SP1040	1区 Y 15	38	32	34	椭円形	弥生土器		
SP1043	2区 X 15	35	36	15	椭円形		SK1016付属遺構か	73
SP1050	2区 X 16	20	19	9	円形		SK1016付属遺構か	73
SP1051	2区 X-15	40	36	42	椭丸方形	弥生土器	SK1016付属遺構か	73-86
SP1052	2区 W-15-16	25	22	10	椭円形	弥生土器		
SP1120	2区 Y 18	28	24	9	円形		S B1001付属遺構か	10
SP1122	2区 Y 18	24	22	14	円形		S B1001付属遺構か	10
SP1123	2区 Y-18	18	18	4	円形		S B1001付属遺構か	10
SP1138	2区 Z-18	27	23	13	円形		S B1001付属遺構か	10
SP1139	2区 Z-18	24	21	8	円形		S B1001付属遺構か	10
SP1243	7区 Y-23	54	49	27	円形	弥生土器		135
SP1361	7区 Z 23	39	36	22	円形	弥生土器、鉢炒石器、サヌカイト片		141
SP1371	7区 Y 23	80	68	23	不整形	弥生土器、サヌカイト片		136
SP1372	7区 Y-23	62	62	37	円形	弥生土器		
SP1380	7区 X-23	35	46	20	不整形	弥生土器		
SP1382	7区 Y-23	40	35	29	不整形	弥生土器		
SP1389	7区 Y-Z-22	40	32	37	不整形円形	石器		141

遺構名	出土地点	規 模 (cm)			平面形	出 土 遺 物	特徴・備考	插図番号
		長軸	短軸	深さ				
SP1421	7区 W-21	78	30	29	小判形	弥生土器		
SP1422	7区 W-21	56	50	38	楕円形	弥生土器、サヌカイト片		
SP1448	7区 X-22	82	68	32	楕丸方形	弥生土器		141
SP1552	7区 U-18	78	66	14	不規則円形	弥生土器		
SP1603	9区 AC-AD-29	54	41	17	楕円形	弥生土器		
SP1609	9区 AE-29	87	68	17	楕円形	弥生土器		137
SP1748	11区 AK-21	76	44	28	長横円形	弥生土器、磨製石斧		138
SP1762	11区 AW-20	33	29	39	楕丸方形	磨製石斧		139
SP1769	11区 AF-29	72	60	34	不整形	弥生土器、磨製石斧		
SP1880	11区 AD-22-23	58	52	26	円形	弥生土器		140
SP1888	11区 AE-23	(84)	78	16	楕円形	弥生土器		
SX1605	2区 Y-X-17-18	750	156	49	不整長方形	弥生土器、サヌカイト片、石器、粘晶片岩		159
SR2001	4+6+10区	(50m)	(11m)	(0.6m)	—	弥生土器、須恵質土器、瓦、有茎尖頭器、石器、石盤、石壠、スクレーパー、打製石砲丁、石壁		142~149

第5表 中世建物遺構一覧表

遺構名	出土地点	規 模			主軸 方向	出 土 遺 物	特徴・備考	插図 番号
		面積	距離(m)	幅員(m)				
SA1001	1+2区 W-12~15	1×1	2.80	4.80	N82°E	土師質土器		166
SA1002	2+2区 W-X-18	1×3	3.00	4.00	N82°E	土師質土器		167
SA1003	2+2区 V-18-19	2×1	3.14	3.80	N82°W	土師質土器、須恵質土器、陶器	柱持柱あり	168
SA1004	7区 V-19-20	1×1	3.62	4.30	N84°E	土師質土器		169
SA1005	7区 U-V-19-20	1×1	3.00	3.50	N82°W			170
SA1006	7区 U-V-20-21	1×1	2.70	4.30	N82°E			171
SA1007	7区 U-V-21	1×1	2.70	3.50	N82°E			172
SA1008	7区 Y-21-22	1×1	2.20	3.20	N53°E	土師質土器		173
SA1009	7区 Y-Z-23	1×1	2.20	3.20	N55°E			174
SA1010	3区 P-Q-18-19	1×2	3.60	4.30	N7°E	土師質土器、瓦質土器、板石	南側・西側に竪あり。 中央柱穴、地盤(?)	175
SA1011	3区 R-S-20-21	1×2	3.00	4.00	N32°W	土師質土器		176
SA1012	5区 L-M-3+4	1×2	3.14	3.60	N42°W			177

遺構名	出土地点	規 模			土輪 方内	出 土 遺 物	特徴・備考	攝図 番号	
		面積	横(m)	幅(m)					
SA1013	3区 K~M-2・3	1×2	2.93	3.66	11.31	N45°W		178	
SA1014	11区 AF-20	1×3	2.14	(2.50)	(5.44)	N17°W	一部調査区外	179	
SA1015	11区 AF-20-21	2×3	2.70	3.20	9.45	N 5°E	土師質土器	柱穴あり	180
SA1016	11区 AO-AE-18-19	1×2	3.00	4.50	13.50	N13°W			181
SA1017	11区 AK-20-21	1×1	3.40	4.36	14.62	N83°E			182
SA1018	11区 AC- AE-21-22	1×3	3.74	4.86	18.18	N 7°E		柱行の柱闊差が異なる	183
SA1019	11区 AD- AF-23-24	2×2	5.20	8.10	42.12	N 5°W		柱柱	184

第6表 中世遺構一覧表

遺構名	出土地点	規 模 (m)			断面形	山 土 遺 物	特徴・備考	攝図 番号
		長さ	幅	深さ				
SD1002	2区 U-16	(1.80)	0.47	0.26	U字形	土師質土器等	削平をうける	
SD1004	3区 S-T- 21-23	(8.63)	0.35	0.13	逆台形	土師質土器、磁器等	上部削平	
SD1005	8区 AA-AB- 29-30	(6.40)	2.20	0.33	階段状	土師質土器、須恵質土器、青磁等	水流	
SD1006	7区 V-X-20	5.30	2.20	0.38	階段状	土師質土器、瓦片、瓦器、陶器等	南北	185
SD1007	7区 T-V-19- 20	(5.90)	2.80	0.48	階段状	土師質土器、須恵質土器、陶器等	南北	
SD1010	11区 AE-AP- 19-20	(4.58)	1.14	0.34	階段状	土師質土器等	東北	186
SD1011	11区 AC-AP- 20-21	(14.86)	1.98	0.23	弧形	土師質土器等	南北	

遺構名	出土地点	規 模 (m)			断面形	出 土 遺 物	特徴・備考	攝図 番号
		長さ	幅	深さ				
SK1003	1区 W-11	137	34	35	小円形	土師質土器等		187
SK1007	1区 W-13	173	28	29	不規形	土師質土器等		
SK1010	1区 W-13	185	66	23	兵備円形	土師質土器等		
SK1011	1区 W-14	90	47	43	不規格円形	土師質土器等		
SK1013	1区 Y-14	125	50	25	圓丸方形	土師質土器等		
SK1019	2区 V-16-17	173	141	57	圓形	土師質土器等		
SK1022	2区 V-17	153	106	18	圓丸方形	土師質土器、瓦器等		
SK1023	2区 X-18	(98)	78	10	不規方形	土師質土器等		
SK1030	2区 V-18	(70)	60	12	小円形	土師質土器		
SK1031	2区 Z-19	157	80	14	不規方形	土師質土器、瓦器等	土堆裏	188

遺構名	出土地点	規 模 (cm)				平面形	出 土 遺 物	特徴・備考	掘削番号
		長軸	短軸	深さ					
SK1037	3区 Q-18	121	58	29	貝方形	粘晶片岩等		土壌基	
SK1041	3区 K-20	173	59	15	楕円方形	粘晶片岩等		土壌基	
SK1042	3区 K-20	179	51	26	楕円方形	土壌質土器等		土壌基	
SK1043	3区 K-21	166	96	22	貝方形	土壌質土器、泥質質土器等		土壌基	
SK1048	4区 L-11	163	110		方形	瓦器		土壌基	189
SK1053	8区 AA-A.B - 26-27	300	180	14	楕丸方形	土壌質土器		上面削平	190
SK1056	8区 Z-25-26	265	112	45	楕丸方形	土壌質土器		上面削平、土壌基	191
SK1059	8区 Y-Z-28	172	(106)	36	不規形	土壌質土器、瓦質土器等			
SK1060	8区 X-26	(140)	128	17	小判形?	土壌質土器			
SK1078	7区 X-22	151	62	26	小判形	土壌質土器等			
SK1083	7区 T-U-22	290	112	32	楕丸方形	土壌質土器等			
SK1093	7区 X-19	133	112	27	不規方形	土壌質土器等			192
SK1096	7区 W-19	136	100	16	楕円形	土壌質土器、瓦質土器			
SK1099	7区 V-19	148	64	27	楕円形	土壌質土器			
SK1106	7区 V-20	292	116	26	楕丸方形	土壌質土器、瓦質土器			193
SK1155	11区 AD-18	225	130	21	小判形	土壌質土器等			
SK1156	11区 AE-19	163	123	20	楕丸方形	青磁	15cm大の砂岩壁が目立つ		194
SP1007	1区 W-11	35	20	36	円形		切りあい側面から中まで 以降		
SP1026	1区 V-13	23	21	17	円形	土壌質土器			
SP1055	2区 Y-16	27	26	10	円形	土壌質土器			199
SP1056	2区 X-16	26	27	9	円形	土壌質土器			
SP1072	2区 V-16	43	38	20	楕円形	土壌質土器等			
SP1087	2区 W-17	22	16	15	楕円形	土壌質土器			
SP1088	2区 V-17	35	34	51	不規円形	土壌質土器			
SP1089	2区 V-17	51	32	14	楕円形	土壌質土器			
SP1093	2区 Y-17	26	16	25	不規規円形	土壌質土器			
SP1095	2区 X-17	46	46	26	不規方形	土壌質土器等			
SP1097	2区 X-17	46	26	20	楕円形	土壌質土器等			

遺構名	出土地点	規 模 (cm)			平面形	出 土 遺 物	特徴・備考	捕図 番号
		長軸	短軸	深さ				
SP1098	2区 Y-17	24	22	13	円形	土師質土器		
SP1113	2区 Z-17	22	19	19	円形	土師質土器		199
SP1115	2区 Z-17	27	23	13	楕円形	土師質土器、瓦器等		
SP1126	2区 X-18	68	69	14	不整方形		切り合い関係から中世以降	
SP1127	2区 X-17	29	23	24	円形	土師質土器等		
SP1130	2区 W-18	30	23	20	円形	土師質土器		
SP1131	2区 V-18	68	49	9	椭円形	土師質土器		
SP1141	2区 X-18	39	27	18	椭円形	土師質土器		
SP1144	2区 X-18	48	38	38	椭円形	土師質土器		
SP1156	2区 W-18	17	15	9	円形	土師質土器		
SP1176	1区 Y-13	38	32	20	円形	土師質土器等		
SP1178	2区 X-18	42	26	21	楕円形	土師質土器		
SP1181	2区 Y-19	36	36	36	楕円形	丸窓		195
SP1198	3区 R-19	42	23	6	長方形	土師質土器		
SP1199	3区 Q-19	36	25	13	円形	土師質土器		
SP1230	3区 R-20	32	30	16	円形	土師質土器等		
SP1238	3区 Q-20	24	26	10	円形	土師質土器		
SP1258	3区 R-21	34	21	15	長方形	土師質土器等		
SP1263	3区 T-22	30	25	6	椭丸方形	土師質土器等	上部削平	
SP1268	3区 S-22	23	22	12	円形	土師質土器等		
SP1273	3区 S-21	32	29	37	円形	直腹質土器、石器	石器は弥生時代の項に記述	141
SP1304	8区 AA-AB-28	74	46	25	楕円形	土師質土器、石器		
SP1305	8区 AH-28	82	59	25	熱門形	土師質土器		
SP1306	8区 AA-AB-28	40	(32)	26	不整方形	土師質土器等		
SP1307	8区 AA-28-29	45	33	19	楕円形	土師質土器、陶器		
SP1310	8区 AB-29	53	38	34	楕円形	土師質土器等		
SP1342	7区 Z-23	52	46	49	楕円形	土師質土器		196
SP1448	7区 W-26	82	76	27	不整楕円形		切り合い関係から中世以降	

遺物名	出土地点	規 模 (cm)			平面形	出 土 遺 物	特徴・備考	括弧 番号
		長軸	短軸	深さ				
SP1464	7区 W-X 20	76	58	36	椿円形		切り合い関係から中段以降	
SP1485	7区 W 19	52	48	36	円形	土師質土器等		197
SP1487	7区 W 19	48	36	19	椿円形		切り合い関係から中段以降	
SP1494	7区 W 19	25	22	35	椿円形	土師質土器、瓦器		198
SP1497	7区 W 19	35	26	28	椿円形	土師質土器	砂岩様石あり	
SP1501	7区 W 18-19	89	52	18	四角形	土師質土器		
SP1505	7区 V 19	54	37	13	椿円形	土師質土器		
SP1515	7区 V 19	26	22	23	円形	土師質土器等		
SP1518	7区 V 26	36	32	21	椿円形		切り合い関係から中段以降	
SP1535	7区 U 20	41	(23)	68	円形	土師質土器		199
SP1749	11区 AE-21	45	40	14	椿円形		切り合い関係から中段以降	

第7表 遺物包含層等出土遺物(旧石器・縄文時代)観察表

番号	器 様	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	遺存 状態	石 材	特徴・備考
1	ナイフ形石器	7区 包含層	5.3	2.2	1.1	9.94	完存	サスカイト	切出し型ナイフ形石器
2	橢円剥片石核	2区 包含層	2.9	6.5	2.3	30.44	完存	サスカイト	圓底にちかい橢円剥片石核。 スクレーパーにも転用か。
3	スクレーパー	2区 Z-18 包含層	(3.7)	(2.8)	(1.1)	(11.1)	部欠損	サスカイト	下記、両面削離による刃部形成。
4	剣片	4区 K-12 包含層	2.0	1.6	0.3	1.31	完存(?)	チャート (灰褐色)	側刃にこまかな剣縫。
5	有茎尖頭器	4区 包含層	(5.2)	(2.6)	(0.6)	(8.15)	先端欠損	サスカイト	
6	有茎尖頭器	4区 包含層	(3.3)	1.9	0.4	(3.20)	先端欠損	サスカイト	
7	尖頭器(?)	包含層	(2.9)	1.3	0.3	(1.73)	先端・基 部欠損	チャート (乳白色)	
8	尖頭器(?)	4区 K-12 包含層	(4.3)	1.5	0.5	(2.98)	先端・基 部欠損	サスカイト	
9	石鏃	4区 K-12 包含層	(2.2)	(1.9)	0.3	(1.00)	先端・基 部欠損	サスカイト	凹基無茎。
10	石鏃	4区 K-12 包含層	(1.1)	1.4	0.3	(0.39)	先端欠損	サスカイト	凹基無茎。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	保存 状態	石材	特徴・備考
11	石錐	4区 J-12 包含層	3.2	1.7	0.5	1.61	尖端・真 縁・部分 欠損	サスカイト	凹凸無至。
12	石錐	4区 L-12 包含層	1.8	(1.6)	0.3	(0.80)	基部一部 欠損	サスカイト	平基無至。
13	石錐	9区 H-7	1.9	1.3	0.2	(0.43)	一端欠損	チャート (緑灰色)	半基無至。

第8表 SB1001 出土遺物観察表 (SB1001は掘削時に4分割、北西A、南西B、北東C、南東Dとする)

番号	器種	地點 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
14	有生土器 蓋A.a	D 覆土	口径18.9	腹き気味にたちあがる頭部か ら、ゆるやかに屈曲して外反す る(腹底)。 口縁部はわずかに肥厚させ、 周辺を凹面に仕上げる。縁部に はく状工具の痕跡によると感 われる刻印を施す。	口縁部は内外面ともヨコ ナダ。 縁部はタテ方向ナダ。	1~3mm 大砂粒含 2英 結晶片岩	褐色	
15	有生土器 蓋A.b	里土	口径18.3	大きく外反する口縁部。 口縁部は上に拡張し縁部は 下部におさめる。 表面にヘラ叩きの斜格子文を施 す。	縁部をそぞく内外面ヨコ ナダ。	1~2mm 大砂粒含 結晶片岩	にぼい緑	
16	有生土器 蓋A.b	A 覆土	口径18.4	大きく外反する口縁部。縁部は 肥厚し縁部は下部におさめる。 表面にはヘラ叩きによるもの か、直い斜格子文を施す。	口縁部内外面ともヨコ ナダ。	1mm大砂 粒少黄赤 石英 結晶片岩	褐灰	
17	有生土器 蓋A	B 覆土	底径5.0 体部最大径 11.9	底面は平底を呈す。 体部は内側でたちあがり、最 大部前面の張る算盤玉形とな す。 縁部はやや腹き気味に外反し、 さらにゆるやかに外反する口縁 部につづく。	口縁部内外面はヨコナ ダ。 縁部外面はタテハケ。 口縁部内面はナダ。 体部外面は削成のため不 規則、内面一部ハケのよう な斜条痕が確認できる。	1~3mm 大砂粒少 石英 結晶片岩	褐色	
18	有生土器 蓋	D 覆土	底径6.8 体部最大径 15.7	底面は平底だが、部分 的にわざかに窓状の上げ底と なる。 体部は内側で外方にたちあが り、底面を呈す。	内面開とも削成のため不 規則。 内面は、ユビオサエ、ユ ビナガ痕のこす。	1~8mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	褐色	
19	有生土器 蓋	B 覆土	直径6.9	底面は平底を呈す。 体部はわざかにくびれたのもち 腹き気味に外方にたちあがる。	体部外面はユビナ ガ痕のこす。	0.5~2 mm大砂 粒含 チャート	(内)褐灰 (外) にぼい青緑	
20	有生土器 蓋	覆土	直径5.3	底面は上げ底を呈す。 体部は内側で大きく外方にた ちあがる。	体部外面は削成のため不 規則。 底面はナダ。 体部内面は、ユビオサエ痕のこす。	1~8mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	(内) にぼい黄褐 (外)褐	
21	有生土器 蓋A.10	覆土	口径25.4	内側する体部から「く」の字状 に屈曲して外反する口縁部をも つ。 口縁部外側は内側し、縁部との 接があり。 口縁部はやや上方に低張。	口縁部内外面ヨコナダ。 縁部外側には、やや強 いヨコナダがある。 体部は内外面ともナダ。	1~4mm 大砂粒含 石英 チャート	灰白	

番号	器種	地点 部位	法長 (cm)	形態の特徴	技 法	胎土	色調	備考
22	弥生土器 甕A,ハ	D 腹上	口径22.2	内傾する体部から「く」の字状に延びて外反する口縁をもつ。 口縁端部は下(外)方に弧張り、上端わずかにつまみあげる。	口縁部内外側ヨコナデ。 両面は齊一でないナデ。 両面部内外面端いヨコナデ。 体部は内外面タナ方向ナデ。	1~2mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	板	
23	弥生土器 甕B,イ	底面	口径17.2	内凹してたちあがる体部から弧曲して外反する短い口縁をもつ。 口縁端部は平坦におさめる。	内外面とも剝離度しあがく、体部外面はタテハケ 内面は丸上リテナメハケ の丸脚をわずかにこす。	0.5~2mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	(内) にぶい青緑 (外)板	
24	弥生土器 甕A,ロ	D 腹土	口径17.9	内傾する体部から「く」の字状に延びて外反する口縁をもつ。 口縁端部は上方に弧張り、端部は平坦におさめる。	口縁部および体部上端内外側ヨコナデ。 体部外面はタテハケ、内面はナデ。	0.5~1mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	浅青緑	
25	弥生土器 甕A	A~C 地 盤上	口径16.3	内凹底味に外方にたちあがる体部から、弧曲して外反する口縁をもつ。 口縁端部はまるくおさめる。	内外面ともにナデ。	1~3mm 大砂粒含 結晶片岩	板	
26	弥生土器 甕A	B 腹上	口径20.2 底径6.5 脚部厚1.4 脚高11.4	内傾する短い脚台を有す。 体部は内凹して、大きくなる方にたちあがり、半球形をなす。短い口縁部はさらに弧曲して外反する。 口縁端部はまるくおさめる。	口縁部は内外面ともにヨコナデ。 体部脚部外縁はナデ。 脚台内面もナデ。 体部内面ナデ。	1~3mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	(内)黄褐色 (外)赤	
27	弥生土器 甕A	D 腹土	口径16.8 底径7.0 脚高10.6	底面は平高を呈す。 体部は内凹して外方にたちあがる。 短い口縁部は丸曲して外反する。 口縁端部はまるくおさめる。	口縁部は内外面ともにヨコナデ。 体部内面は大きく削離した部分が多いが、残存部分では、上半はタテハケ、下半はタテハラミガキが観察できる。内面は下半ヨコハラミガキ、下半右上リナメヘラミガキの観察できる部分があるが、基本的には、上端ヨコ方向にちち凹面タテ方向のていねいなナデで仕上げる。	1~1.5mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	(内)灰褐色 (外)赤褐	
28	弥生土器 甕B	腹土	口径19.8	わずかに内凹気味に直立する体部。 口縁部はわずかに弧張り、上端面は圓面に仕上げる。	口縁部内外面ともにヨコナデ。 体部外縁はタテハケのちナデ。 内面はヨコハケのちナデ。	0.5~2mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	にぶい青	
29	弥生土器 甕(?)	D 腹土	底径9.5	底面は高台上の上げ底を呈す。 体部は内凹気味にやや外方にたちあがる。	体部外縁はタテハラミガキ、断面外縁はハラミガキのちヨコナデ。 底面はユビオサエ、ユビナデ。 内面はユビナデ。	1~2mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	(内)にぶい 赤褐色 (外)にぶい 青	
30	弥生土器 高杯	A 腹土		脚台部は、外側に縦に内傾し、中腹の短い脚柱はほぼ直立し、器体部に接続する。	脚台・脚柱部外縁および 脚柱部内面はタテハラミガキ。 脚台部内面は、ユビナデ。 器体部内面は、ていねいなナデ。	1~3mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	板	

番号	器種	地点層位	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	胎土	色調	備考
31	土製円板	D 覆土	3.5	3.2	0.5	0.3	4.44	1~2mm大 砂粒含	褐色	未製品。孔、貫通せず。 完全。

番号	器種	地点層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	遺存状態	石材	特徴・備考	
32	石棒	A 覆土	2.1	1.3	0.4	0.94	完存	サヌカイト	平基無茎。	
33	石棒	B 覆土	2.4	1.2	0.3	0.69	完存	サヌカイト	凹基無茎。	
34	石棒	覆土	(2.0)	1.2	0.4	(1.60)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎。	
35	石棒	D-B ⁴ 覆土	3.5	2.3	0.5	4.74	完存	サヌカイト	接合品。凹基無茎。	
36	石棒	覆土	(2.3)	1.8	0.5	(1.67)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎。	
37	石棒(?)	P 13 覆土	(3.3)	(2.1)	0.4	(3.18)	先端基部 欠損	サヌカイト	凹基無茎。	
38	石棒	炉上面	2.1	1.3	0.4	1.17	完存	サヌカイト	基部木調整	
39	石棒	P 13 覆土	(2.0)	(1.4)	(0.3)	(0.74)	基部欠損	サヌカイト		
40	石棒	B 覆土	(2.0)	(1.4)	(0.4)	(1.28)	基部欠損	サヌカイト		
41	石棒	覆土	(2.4)	(2.0)	(0.3)	(1.21)	基部欠損	サヌカイト		
42	石棒	覆土	(2.1)	(0.6)	(0.3)	(0.39)	基部欠損	サヌカイト		
43	石棒	D 覆土	(4.6)	(2.3)	(1.1)	(12.39)	先端基部 欠損	サヌカイト	両端打抜によるとと思われる階段状の削 離で構成される。	
44	楔形石器	覆土	4.4	2.4	1.1	17.30	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。上下辺は両端打抜に よる。上辺両側に、長軸方向の擦痕。 下辺端縁部。	
45	楔形石器	覆土	2.6	2.2	0.7	476	—	サヌカイト	上断下辺は両端打抜による。 左辺、右上辺は裁断面。	
46	打製石砲丁	覆土	9.6	3.2	0.8	28.17	光存(?)	結晶片岩 (石英片岩)	下辺に刃部形成。抉りなし。	
47	打製石砲丁	A 覆土	10.2	4.7	0.7	(36.37)	一部欠損	結晶片岩 (石英片岩)	結晶片岩 (石英片岩) 片面自然面。両面に抉りあり。	
48	打製石砲丁	覆土	(8.5)	4.6	0.9	(44.55)	一部欠損	結晶片岩 (紅麻石片 岩)	両面に自然面のこす。端部抉りあり。	
49	打製石砲丁	A 覆土	(4.3)	(4.1)	(0.7)	(22.0)	半分欠損	結晶片岩 (紅麻石片 岩)	結晶片岩 (紅麻石片 岩) 端部抉りあり。	
50	柱状片刃石斧	A 覆土	(13.2)	2.0	4.35	(246)	刃部欠損	結晶片岩 (緑色片岩)	表、高頂を中心研磨。両側面は平滑 な剝離面をわずかに研磨。	
51	柱状片刃石斧	A 覆土	(3.2)	(0.8)	(2.3)	(9.89)	刃部破片	結晶片岩 (無色片岩)	全面丁字に研磨。	
52	柱状片刃石斧	D 集石 床面	17.8	2.3	4.35	398	完存	結晶片岩 (緑色片岩)	未製品 粗成形のもの、奥深くに斜状の敲打痕。 表面の一部、裏面は大部分を研磨。 左側面も半分程度を研磨。	

番号	岩種	地点 位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	保存 状態	石材	特徴・備考
53	柱状片岩	A 覆土	(14.2)	2.4	(2.4)	(160.0)	欠損	結晶片岩 (緑色片岩)	保存面のうちについては斜面を施しているが、十分ではなく、斜面面、自然面のそのままのところもある。
54	小形扁平石	B 覆土	4.6	2.5	0.6	8.63	完存	結晶片岩 (緑色片岩)	本製品。 斜面敲打による成形。左側面のみ研磨。
55	小型円柱状石	A 覆土	7.2	2.0	1.0	23.75	一部欠損 (?)	結晶片岩 (緑色片岩)	扁平な棒状の自然面をそのまま利用。 万能のみ削ぎにより形成。 基部の削除面。
56	叩石	D 覆土	14.7	7.2	3.4	650	完存	結晶片岩 (緑色片岩)	縦溝、とくに両端部に強い打撃による 剥離あり。中央に弱い敲打痕。 表面左側自然面、わずかな研磨。 扁平・棒状の自然面を利用している。
57	叩石	A 覆土	8.6	6.1	4.2	332	完存	ハンレイ岩	凹面を利用。斜面を中心に無目的な粒 状の敲打痕。
									被熱。
58	礫石	覆土	(12.3)	(11.3)	(8.0)	(1360)	欠損	砂岩	自然面の2面を研磨とする。 表面わずかに凹面をなす。 裏面は弱い研磨、筋状の深い敲打痕あ り。
									被熱。
59	礫石	D 集石	(11.3)	(10.5)	(4.6)	(760)	欠損	砂岩	自然面の2面を研磨とする。裏面もごく一部に剥離を もつ、3面については人念に研ぎ込み、 表面と右側については塑面を出す。
60	礫石	床面	28.0	9.3	9.1	3920	完存	砂岩	被熱。 4面を研磨とする。4面ともに入念に 研ぎ込み、凹面を出す。
									被熱。
61	礫石	床面	29.9	24.5	7.6	6700	完存	砂岩	自然面の内面を研磨とする。また筋状、 粒状の敲打痕を両面とともに一部のこ す。
									被熱。
62	礫石	集石 床面	12.8	8.1	6.1	(845)	一部欠損	砂岩	自然面、打削面のうち3面を研磨とす る。
									被熱。
63	礫石	集石 床面	19.0	13.4	7.1	(2460)	一部欠損	砂岩	自然面の2面を研磨とする。 2面とも研ぎ込み、凹面を出す。
									被熱。
64	礫石	集石 床面	28.1	27.6	15.2	1750	完存	砂岩	自然面2面を剥離、斜面に粒状の敲打 痕多数。
									被熱。
65	礫石	覆土	21.0	9.9	9.7	(2800)	欠損	砂岩	自然面の3面を研磨とする。
									被熱。
66	礫石	集石 床面	36.7	22.6	13.2	(1540)	一部欠損	砂岩	自然面の表裏2面に剥離。右側面に6 ごく弱い研磨。筋状および粒状の敲打 痕。
									被熱。
67	礫石	覆土	20.5	11.6	8.8	2460	完存(?)	砂岩	自然面2面、打削面2面に剥離。 いずれも入念に研ぎ、凹面をなす。

第9表 SB1002 出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴			技 法	胎土	色調	備考
68	陶生土器 Beg	P 14 覆土	腹部径10.5	内側する体部から、直立する腰部がなるやかに外反する。 腹部に沈縫で区隔された、横筋文3条模様である。			文様等以外の部分は剥離 激しく有る。 腰部・体部の境界には、 内面にぼり底のこす。	1~4mm 大砂粒合 結晶片岩 石英	(内)黄 (外) 明赤褐色 石英	
番号	器種	地点層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石材	特徴・備考	
69	石錐	伊 覆土	3.0	1.2	0.2	0.30	完存	サスカイト	円錐形。	
70	石錐	P 4 覆土	2.0	1.5	0.2	0.51	腰端 一部欠損	サスカイト	凹基無茎。	

第10表 SB1004 出土遺物観察表

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴			技 法	胎土	色調	備考
71	陶生土器 Beg A,b	覆土	IIE径18.8	大きく外反する口縫部。 口縫部はわざと上下に下張りし。 腰部は平底にせまる。 口縫部上面に2条単位の複雑な 筋文を施す。			内外面ともヨコナデによる。	1~3mm 大砂粒合 石英 結晶片岩	(内)におい 味 (外)におい 黃褐色	
72	陶生土器 Beg A,b	覆土	IIE径14.6	大きく外反する口縫部。 口縫部は肥厚させ、上方に張 張する。 腰部は2条の凹縫を施す。 口縫部上面にヘラ括きの斜格子 文を施す。			内外面ともヨコナデ。	1~2mm 大砂粒合 石英 黑雲母	におい味 (?) (頭板)	腹入土器 (?)
73	陶生土器 Beg C	覆土	口径14.8	直線的に外反する口縫部。 腰部に断続三角形の突起を附 つけ、肩目を入れる。			内外面ともヨコナデ。	1~2mm 大砂粒合 石英 吳石		極入土器 (頭板)
74	陶生土器 Beg C,d	覆土	口径10.0	ほぼ直立する口縫部。 口縫部はやや肥厚させ、上縫を 開口とし、半開口せまめる。 腰部に突起を貼り付け、ヘラ状 工具による刻目を施す。			口縫部外側は剥離のため 不明。 内面はヨコナデ。	1~4mm 大砂粒多 く含 石英 結晶片岩	(内)におい 味 黄	
75	陶生土器 Beg A,a	覆土	口径16.8	直立する短い腰部から直角に、 屈曲して外反する長い口縫部を もつ。 口縫部は肥厚く、端面は、平場 にせめて、ヘラ状工具による 刻目を施す。			内外面ともヨコナデ。	1~4mm 大砂粒合	黄	
76	陶生土器 盤	覆土		内側する体部上半。 上から都道府県文と内質文を 施す。			外表面ナゲ 内面は剥離のため不明。	1~4mm 大砂粒多 く含 石英 結晶片岩	味	
77	陶生土器 盤	覆土	井部最大径 18.15	内側する体部最大幅付近。 最大幅部分や上部にハケ、T型 による圧痕文を施す。			体部上半はタテハケ。 最大幅付近は、ヨコハケ とヨコハラミガキ。 体部内面は、最大径部分にユ ビオザエ痕を多数残し、 タテハケによって仕上げ る。	1~3mm 大砂粒合 石英 吳石	(内)灰褐 (外) 明赤褐色 黑斑あり	腹入土器 (?) (頭板) 黑斑あり

番号	器種	地点層位	法量(cm)	形態の特徴	技 法	胎土	色調	備考
78	弥生上層 型(?)	P-1 覆土	底径5.9	底面は平底を呈す。 底部端は、まことにさめる。 体部は、直線的に外方にたちあがる。	体部外側および底部はナ ダ。 内面は、ヨコオサエ底を のこしながら、ハケ、お よびナダで仕上げてい る。	1~2mm 大砂粒含 泥存 細密母	(内)褐灰 (外)棕	
79	弥生下層 型(?)	P-5 覆土	底径10.9	底面は上げ底を呈す。 体部は内窓欠缺におおきく外方 にたちあがる。	内外面とも制御のため不 明。	1~4mm 大砂粒含 石英	棕	
80	弥生土器 型A.ii	覆土	口径15.4	内壁は体面から屈曲して大き く外反するU字型をもつ。 口輪端部は平頭におおめ少し上 方に紙張。	口縁端内外面および体部 外側にヨココナダ。 体部内面にヨコハケの痕 跡のこす。	1~2mm 大砂粒含 石英 美石	素入上層 (?) (原城)	
81	弥生土器 型	覆土	底径5.2	底面は平底を呈す。 底部端はわざかに上げ底を呈し、 底部端は外方に張張る。	体部外側はタテヘラミガ キ、底面はユビナダ。 内面はナダ。	1~2mm 大砂粒含 石英	(内)灰青褐 (外)灰褐	
82	弥生土器 型	覆土	底径6.0	底面はわざかに上げ底を呈し、 底部端は外方に張張る。 体部は直線的にわざかに外方に たちあがる。	内外ともにナダによる 仕上げ。	1~3mm 大砂粒含 石英 結晶片岩	(内)黑褐 (外) にぶい黒	
83	弥生土器 型(?)	覆土	高径6.8	底面は上げ底を呈し、底部端は 外方に張張る。	底面および、内面はてい ねいなナダ。 表面外側はヨコハケ底を のこし、ヨコオサエ底も 多數残す。	1~2mm 大砂粒含 石英 細密母	にじい褐	

番号	器種	地点層位	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	胎 土	色 調	備考・特徴等
84	上製鉢底	覆土	3.8	3.4	0.5	0.6	6.68	1~2mm (内)黑 (外) にぶい黒 砂粒含 石英	本製品 土器片利用。 内面より孔を穿つ途中の もの。	
85	土製鉢底	覆土	4.5	3.7	0.5	0.45	9.37	1~4mm 大 砂粒含 石英 結晶片岩	(内)褐褐色 (外) 灰オリーブ	土器片利用。

番号	器種	地点層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状態	石 材	特徴・備考
86	石器	覆土	2.5	2.0	0.4	1.53	完存	サヌカイト	平基無茎。
87	石器	覆土	2.5	2.0	0.55	2.43	完存	サヌカイト	平基無茎。
88	石器	覆土	(2.9)	1.7	0.4	(1.51)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎。
89	石器	覆土	(3.1)	(1.3)	0.4	(1.60)	先端・脚 端欠損	サヌカイト	凹基無茎。
90	石器	覆土	2.4	1.9	0.4	2.22	完存	サヌカイト	凹基無茎。
91	石器	覆土	2.0	1.9	0.4	1.51	完存	サヌカイト	平基無茎。
92	石器	覆土	1.9	1.4	0.4	0.74	完存	サヌカイト	凹基無茎。
93	石器	覆土	(2.5)	2.2	0.5	(4.36)	先端欠損	サヌカイト	凹基無茎。

番号	器 様	地 点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	遺 存 状 态	石 材	特徴・備考
94	石器	覆土	(3.0)	1.3	0.5	(1.89)	先端欠損	サヌカイト	円錐形基。側縁内斜
95	石器	覆土	3.3	1.3	0.3	(1.35)	一部欠損	サヌカイト	円錐形基。側縁内斜
96	石器	覆土	(3.0)	1.5	0.5	(1.85)	先端欠損	サヌカイト	円錐形基。側縁内斜
97	石器	覆土	2.1	1.2	0.4	1.0	完存	サヌカイト	円錐形基。
98	石器	覆土	2.7	1.7	0.5	(2.35)	一部欠損	サヌカイト	平基無基。
99	石器	覆土	1.7	1.0	0.3	0.44	完存	サヌカイト	円錐形基。
100	石器	覆土	(2.2)	1.7	0.3	(1.98)	基部欠損	サヌカイト	一部欠損。
101	石器	覆土	4.4	2.1	0.5	6.16	完存	サヌカイト	未製品。 左辺未開発。
102	石器	覆土	(2.3)	(1.6)	0.3	(1.81)	先端欠損	サヌカイト	平基無基。
103	石器	覆土	4.0	2.3	0.5	3.14	完存	サヌカイト	平基有基。
104	石器	覆土	2.7	1.1	0.5	1.44	完存	サヌカイト	凸基有基。
105	石器	覆土	3.0	1.5	0.4	1.88	完存	サヌカイト	凸基有基。
106	石器	覆土	2.3	1.4	0.3	0.96	完存(?)	サヌカイト	未製品 左辺および基部は未調査。
107	石器	覆土	(2.8)	1.5	0.4	(1.90)	先端欠損 (?)	サヌカイト	未製品
108	石器	覆土	(2.2)	1.3	0.5	(1.37)	先端基部 欠損	サヌカイト	
109	石器	覆土	(2.0)	1.5	0.4	(1.40)	先端欠損 (?)	サヌカイト	未製品(?)
110	石器	覆土	(1.8)	(1.1)	(0.4)	(0.81)	基部欠損	サヌカイト	
111	石器	覆土	(1.5)	(1.2)	(0.2)	(0.30)	基部欠損	サヌカイト	
112	石器	覆土	(1.6)	(1.3)	(0.3)	(0.43)	基部欠損	サヌカイト	
113	石器	覆土	(1.6)	(1.4)	(0.3)	(0.48)	先端・基 部欠損	サヌカイト	
114	石器	覆土	2.0	1.4	0.2	0.70	完存(?)	サヌカイト	未製品(?)
115	石器	覆土	(3.8)	1.1 (0.4)	0.6	3.32	基部先端 欠損	サヌカイト	棒状
116	石器	覆土	(3.2) (2.0)	2.4 (0.8)	0.5 (0.5)	(2.32)	基部先端 欠損	サヌカイト	
117	石器	覆土	(2.7) (0.7)	2.2 (0.6)	0.45 (0.3)	2.51	基部欠損	サヌカイト	
118	石器	覆土	2.3	2.7	0.9	4.96	完存	サヌカイト	鉛部は、表面からの片剥離
119	石器	覆土	(1.9)	2.2	0.7	(2.73)	基部欠損	サヌカイト	鉛部欠損
120	石器	覆土	(2.1)	(0.7)	(0.4)	(0.36)	基部欠損	サヌカイト	断面二角形の主張剥離面側に片面剥離 による鉛部形成
121	石器	覆土	(2.0)	(0.5)	(0.3)	(0.30)	基部欠損	サヌカイト	円錐調整による鉛部形成。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	保存 状態	石材	特徴・備考
122	楔形石器	覆土	2.6	1.6	0.9	3.24	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。 上端と下辺は内側打法による。
123	楔形石器	覆土	2.3	1.2	0.6	2.18	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。 上下辺は内側打法による。
124	楔形石器	覆土	3.7	1.4	1.0	5.11	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。 両面に擦痕が確認できる。
125	楔形石器	覆土	2.1	1.1	0.7	2.19	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。 上下辺は内側打法による。
126	楔形石器	覆土	3.0	1.9	0.73	4.57	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。 上下辺は両側打法による。
127	楔形石器	覆土	2.4	1.1	1.1	2.05	—	サヌカイト	左右辺および上辺は裁断面。 下辺は両側打法による。
128	楔形石器	覆土	1.8	1.1	0.45	1.05	—	サヌカイト	左右辺は裁断面。 上下辺は両側打法による。
129	楔形石器	覆土	1.2	2.5	0.6	2.40	—	サヌカイト	上辺、左右辺は裁断面。 下辺、内側打法による刃部形成。
130	スクレイパー	覆土	2.5	2.4	0.5	3.27	完存	サヌカイト	各辺とも、両面削型による刃部形成。
131	スクレイパー	覆土	3.4	2.9	1.2	9.43	完存	サヌカイト	下辺は、両側打法による刃部形成。 一部は剥片状況をそのまま利用。右辺に内側打法による刃部(?)形成。
132	スクレイパー	覆土	1.9	3.6	0.6	4.30	完存(?)	サヌカイト	下辺から右辺にかけて、内側打法による刃部形成。上辺、左辺は裁断面。
133	スクレイパー	覆土	2.2	2.8	0.6	4.43	完存(?)	サヌカイト	右辺および下辺に両側打法による刃部形成。
134	スクレイパー	覆土	1.2	2.5	0.6	2.40	完存(?)	サヌカイト	上辺、左右辺は裁断面。 下辺、内側打法による刃部形成。
135	スクレイパー	覆土	5.1	3.7	1.0	17.50	完存(?)	サヌカイト	下辺に両側打法による刃部形成。 他の辺は裁断面。
136	石核	P-1 様 床面	9.2	10.2	1.1	194	—	サヌカイト	
137	石核	P-1 様 床面	7.2	11.4	1.0	71.4	—	サヌカイト	
138	打製石核丁	覆土	4.4	11.1	0.9	(64)	一部欠損	結晶片岩 (石英片岩)	両端抉りあり。
139	打製石核丁	覆土	9.9	5.2	1.3	89	完存	結晶片岩 (石英片岩)	左端は抉りあり。右端も、抉りを意識した剝離あり。
140	打製石核丁	覆土	11	4.3	0.9	59	完存	結晶片岩 (石英片岩)	両端抉りあり。
141	打製(底)丁	覆土	(10.0)	(4.7)	(0.7)	(39.0)	一部欠損	結晶片岩 (石英片岩)	抉りなし。 片面白無面。刃部使用痕あり。
142	打製(底)丁	覆土	(5.7)	(6.2)	(1.3)	(58)	欠損	結晶片岩 (石英片岩)	抉りなし。
143	打製石底丁	覆土	(5.8)	(4.5)	(0.9)	(34.0)	欠損	結晶片岩 (石英片岩)	抉りなし。

番号	器 様	地 点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	遺存状態	石 材	特徴・備考
144	打製石砲丁	覆土	(4.6)	(3.3)	(0.8)	(18)	欠損	結晶片岩 (石英片岩)	
145	小型扁平石斧	覆土	1.7	3.3	0.4	4.53	完存	結晶片岩 (綠色片岩)	刃部と片側のみ研磨。刃部は研磨による成形。
146	小型扁平石斧	覆土	2.8	2.1	0.4	4.06	完存	テメカイト	研磨による刃部形成。刃部を中心とする部分のみ削製。
147	小型扁平石斧	覆土	4.15	1.9	0.35	5.87	完存	結晶片岩 (綠色片岩)	縦邊、敲打による成形。刃部のみ研磨。
148	小量方往状片刃 石斧	覆土	(4.3)	0.7	(1.3)	(7.70)	基部欠損	結晶片岩 (綠色片岩)	柱状の石材の表面裏面のみ研磨して、刃部形成。両側面ともに自然面。
149	扁平片刃石斧	覆土	5.3	3.6	0.6	22	完存(?)	結晶片岩 (石英片岩)	刃部を中心に研磨。
150	扁平片刃石斧	覆土	6.1	2.95	1.1	(42)	一部欠損	結晶片岩 (綠色片岩)	ほぼ全形研磨により仕上げる。
151	扁平片刃石斧	覆土	(10.8)	(4.2)	(1.3)	(100.0)	欠損	結晶片岩 (石英片岩)	かなりの加熱をうけ、表面赤褐色に変色
152	甲石	覆土	11.2	5.3	3.8	378	完存	結晶片岩 (綠色片岩)	棒状自然面、下端は、長軸方向の強い打撃による断打痕、中央上、底面の解打痕、裏面の一部研磨。
153	甲石	覆土	14.85	2.6	2.2	143	完存	結晶片岩 (石英片岩)	棒状の自然面の一端で強く敲打
154	鐵石	覆土	20.3	6.0	3.9	856	完存	砂岩	方柱状の自然石をもい、3面に平面をもつ。表面、裏面については、鉄面は、2~3のまとまりに分割される。
155	鐵石	覆土	17.9	8.9	2.3	600	一部欠損	結晶片岩 (綠色片岩)	自然面の一端を平面とする。
156	鐵石	覆土	17.6	16.0	6.0	2100	完存	砂岩	自然面の一端を延長とする。裏面にも一部長いいたぬきあり。
157	鐵石	覆土	27.9	16.7	11.0	6000	完存(?)	砂岩	一部被熱。打削面を含む4面を延長とする。
158	鐵石	覆土	19.9	7.8	8.6	1370	欠損	砂岩	被熱。自然面を延長とする。

第11表 SB1005 出土遺物観察表

番号	器 様	地 点 層位	法 異 (cm)	形 狽 の 特 徴	技 法	胎 土	色 調	備 考
159	赤生土器 蓋	覆土		直立する楕円 板に2条の縫隙を貼りつけた後、縫隙を縫りつけ、格子文を形成する。	割離のため不明。	1~7mm 大砂粒合 石英	黄褐色	
160	鉢生土器 台付鉢(?) (脚台鉢)	伊 覆土	脚台径9.3	平底にさきめた腹縫から直線的に内傾して、器体と接合する。 外腹縫間にV字形の貫通しない透かしを施す。	内外面とも割離のため不明。 器体底面には、ていねいなナナフジ。 内板充填法か。	1~3mm 大砂粒合 石英	(内)灰褐色 (外)灰白	
161	鉢生土器 鉢	伊 覆土	口徑27.0	器部はや肩を張るかたちで内 壁し、口縫沿を肥厚させ。 口縫部下に4本の凹縫を施す。	器体外周凹縫充填はナ ナフジ。 肩下は右よりハケとチヂ による。 内面は板ナナフジ。	1~3mm 大砂粒合 石英	(内)褐灰 (外)灰	

番号	器種	地点 層位	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	胎土	色調	特徴・備考
162	土製切妻車	伊 覆土	3.8	3.7	0.55	0.5	8.97	0.5mm 大砂 吸含 網膜母	(内)灰褐色 (外)赤褐色	上部片利用。 表(外)面にハケ調整痕を 残す。
番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石 材	特徴・備考	
163	柱状片刃石斧	伊 覆土	8.5	2.4	3.0	132	完存(?)	粘晶片岩 (緑色片岩)		4面研磨による整形および刃部形成。 側面については自然削をわずかに想き こんだ程度と考えられ、鍛造部にのこ る敲打痕は、粗成形時のものと考えら れる。 基部欠損面については非加工。

第12表 SB1006 出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴			技 法	胎土	色調	備考
164	弥生土器 甌A	覆土	口径14.3	大きく外反するU字縫部。 縫部は、下に弧張りし、端面はわ ずかに凹面に仕上げる。			内外面ともヨコナラ。	1~2mm 大砂粒含 石英	(内)オリ ブ黒 (外)赤褐色	
165	弥生土器 甌A:a	集石	口径12.4	直立する縫部からゆるやかに外 反するU字縫部。 U字縫部はやや下方に弧張りし、 端面は平版におさま、開口を族 す。			内外面とも剥離のため不明。	0.5~1 mm大砂粒 含	(内)灰褐色 (外)褐	
166	弥生土器 甌	覆土	直径5.1	端面は平版を呈す。 体部は、外壁気泡にくびれて外 方にたらあがる。			体部外面クテヘラミガ キ。 内面はナデ。	1~2mm 大砂粒含 石英 網膜母	(内)灰褐色 (外) に青い斑	
167	弥生土器 甌(?)	伊 覆土	直径7.2	端面はわずかに上げ溝を呈す。 体部はくびれて、内壁気泡に外 方へたらあがる。			内外面とも剥離のため不明。	1~5mm 大砂粒含 粘晶片岩	に青い斑	

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石 材	特徴・備考
168	石鏃	P 10 覆土	1.9	1.4	0.3	0.73	完存(?)	サスカイト	未製品?
169	石鏃	覆土	(2.5)	(1.5)	(0.5)	(1.53)	先端欠損	サスカイト	平基無基。
170	楔形石鏃	覆土	2.1	3.3	0.55	5.26	—	サスカイト	下刃をのぞく3辺は粗断面。 下刃に両極打透(?)による刃部形成。
171	打突石盾丁	覆土	(3.0)	(2.0)	(0.7)	(?)	欠損	粘晶片岩 (石英片岩)	
172	叩石	覆土	7.6	11.1	4.7	650	完存	ハンレイ岩	横凹形自然縫をそのまま利用。 両面および側縫凹に、筋状、粒状の敲 打板を多数のこす。
173	破片	集石	31.5	24.9	8.5	9700	完存	砂岩	被削。 自然縫の一面前を削いた延縫とする。 一面に筋状の敲打痕。

第13表 SB1006 P-8 出土遺物観察表

番号	器種	地点 部位	法量 (cm)	形態の特徴	技 法	胎土	色調	備考
174	陶生土器 盤A	覆土	口径13.0 体部最大径 22.1	断面円形の体部から扁曲して、ラッパ状にひらく口部をもつ。 口縁部は平坦におさめる。	口縁部内外面はココナダ。 側面内外面および体部外縁はナダ。 体部内面、腹大辺付近上半はエビナダ。 他の横方向ナダ。	1~4mm 大砂粒多く含む 新晶片岩 石英	(体部内) 褐色 (外、蓋内部) 青 新晶片岩 石英	
175	陶生土器 碗A	覆土	口径13.2	やや突き気味の盤部から、ゆるやかに外反する口部をもつ。 口縁部は、半幅におさめる。	内外面ともにナダによるものとおもわれる。	0.5~3 mm大砂粒 含 新晶片岩	灰黄 2次焼成をうけたものか、気泡多く軽石状を呈す。	
176	陶生土器 碗D	覆土	口径22.3	ゆるやかに外反する口部	内外面とも剥離のため不明。	1~6mm 大砂粒含 石英 新晶片岩	橙	
177	陶生土器 碗A	覆土	口径19.4	内側する体部から扁曲して、点立する盤部につながる。 口縁部はゆるやかに剥離して外反する。	口縁部は内外面ともココナダ。 側面は外反タテハケ、内面はココロハケ。 体部外縁は、タテハケのちナダ。内面は剥離のため不明。	1~3mm 大砂粒含 石英 新晶片岩	灰黄	
178	陶生土器 碗	覆土		内側し、直通につながる体部と手平。	内外面とも剥離のため不明であるが、内面にユビオサエ痕をこす。	1~3mm 大砂粒含 石英 新晶片岩	灰オリーブ	
179	陶生土器 板	覆土	直径5.9 外部最大径 29.2	底面はわざかに上げ返をせず。 体部は内側気味に外方にたちあがり最大径から内側して底部にづく。 球形に近い形態をなす。	体部外縁、無い左上りへタミガキの部分と、ナダによる往上げの部分がみられる。 最大径により上部剥離のため不明。直面および体部内面はナダ。	1~10mm 大砂粒多 く含 石英 チャート 新晶片岩	(内) にぶい黄褐 (外) 暗	
180	陶生土器 甌	覆土	底径19.0	底面は平底を呈す。 体部はくびれず、直線的に外方にへたちあがる。	体部外縁板ナダ。底面はナダ。内面はナダでユビオサエ痕をこす。	1~5mm 大砂粒含 石英 新晶片岩	(内) 橙 (外) にぶい橙	
181	陶生土器 盤(?)	覆土	直径5.5	底面はわざかに丸底を呈す。 体部は直線的に外方にへたちあがる。	内外面とも剥離のため不明。	1~5mm 大砂粒含 新晶片岩 石英	浅黄	
182	陶生土器 甌	覆土	底径7.0	底面は上げ返を呈す。 体部は直線的に大きめ外方にへたちあがる。	体部外縁板ナダ。 直面および体部内面けナダ。 底面はユビナダ。	1~4mm 大砂粒含	(内) 橙 (外) 淡黄褐	
183	陶生土器 盤	覆土	底径8.6	底面は平底を呈す。 体部は、わざかに内側気味に外方にへたちあがる。	体部外縁はタテハラミガキを底部外縁ユビオサエ痕強くこす。 底面はユビナダ。 内面は、直面にユビオサエ、窓はないなどナダ。	2~3mm 大砂粒多 く含 新晶片岩 石英	淡青色 墨斑あり	

番号	器種	地点 層位	法景 (cm)	形態の特徴	技 法	胎土	色調	備考
184	弥生土器 鉢	表土	底径8.5	底面は上げ底を呈す。 体部は直筒的に外方にたちあがる。 内面はなめらかに彫造する。	体部、外側はナデ。 一部ていねいに仕上げられている。 内面はヨコヘラミガキ。 くもの糞状に施される。	1~3 mm 大砂粒含	明褐色	外側に、 シイの葉 状の木の 実圧痕あり。

第14表 SB1008 出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	法景 (cm)	形態の特徴	技 法	胎土	色調	備考
185	弥生土器 笠A ₁	表 表土	口徑17.1	やや外方に傾く底部から、ゆる やかに現在して外にするU縫部 をもつ。 口縫部は表面が堅いのがほ 平底におさめているものと考え られる。	U縫部外側は、タテハケ のヨコナデ。底部はタ テハケをよくこの寸部分 と、板ナデにより平滑に 仕上げられている部分が ある。 内面は刻画壓しく調整不 明。	1~8 mm (外) 黄赤褐色 (内) 黄褐色 大砂粒含 く黄 粘晶片岩		
186	弥生土器 笠D ₁	表 表土	口徑20.8	ゆるやかに外反するU縫部。 口縫部は平底におさめる。	口縫部外側はヨコナデ。 間にかけてタテハケ。 口縫部内面はヨコナデ。 底部にかけてヨコハケ。	1~2 mm 大砂粒含 石英 粘晶母岩	板	
187	弥生土器 蓋	周溝 表土		内側する底部・体部。 上から昭和西文2条、波状文 (?)を施す。	外側ナデ。 内面ユビオサフ板多數残 す。	1~3 mm (外) 大砂粒含 石英 粘晶片岩	にせい地 (内) 浅灰	
188	弥生土器 蓋	周溝 表土		内側してたらあがる体部上半。 下から昭和西文状、直線文、円 弧文を施す。	外側、タテハケ、ヨコヘ クナギ。 内面、ユビオサフ板多數 残す。	1~3 mm 大砂粒含 石英 粘晶片岩	赤褐	
189	弥生土器 鉢	P-9 表土	底径9.4	底面は平底を呈す。 体部はむざかに内青氣味で大き く外方にたちあがる。	体部外側、底面はナデ。 内面、削離のためぐ開で あるがユビオサフ版をよ く残す。体へ張りの板片 多數残るが、非焼成。	1~9 mm 大砂粒含 石英 粘晶片岩	明赤褐	
190	弥生土器 要	P-9 表土	底径6.1	底面はわざかに上げ底を呈す。 体部はわざかに内青氣味に外方 にたちあがる。	体部外側はタテヘラミガ キを施すが、へた圓部で おさえたような跡跡を多 数のす。 底部外側はユビナデ。基 面および内面はついでい なナデ。	1~3 mm (外) 浅灰 (外) 褐 大砂粒含 粘晶片岩 石英		
191	弥生土器 鉢(?)	周溝 表土	底径6.1	底面は上げ底を呈す。 体部は内青氣味に大きく外方に たちあがる。	内外ともにナデ。	1~2 mm 大砂粒含 粘晶片岩 石英	明赤褐	
192	弥生土器 鉢	表 表土	底径8.2	底面は、平底を呈す。体部は内 側して外方にたちあがる。 底部は体部より盛部がうすい。	外側は、タテハケのち板 ナデ。 内面は、板ナデないしは ユビナデ。	1~3 mm 大砂粒含 石英 チャート	(内) 浅灰 (外) 褐	

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石 材	特徴・備考
193	打製石刀(?)	表 表土	4.4	14.2	0.8	(73)	一部欠損	粘晶片岩 (石英片岩)	抉りなし。

番号	器種	地点 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	遺存状態	石材	特徴・備考
194	打製石底丁	伊 根上	11.2	5.0	0.7	45	完存	結晶片岩 (紅葉石片 岩)	半月形。抉りなし。
195	石石	根 根土	9.6	7.4	4.1	(466)	一部欠損	砂岩	自然の刃鎌を利用。表面中央部に異物内蔵の包みあり。縁辺部のほとんどの斜状の敲打痕をこし、敲打面を形成する。

第15表 SB1009 出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴			技 法	胎土	色調	備考
196	弥生土器 底A1ハ	根土	口徑15.4	内側気泡にちあがる体部から、加熱して外反する開口縫合部をもつ。 口縫合部はわずかに肥厚させ、平坦におさめる。	体部外側および口縫合部はナダ。 体部内側面ナダ。 なま、接合面なく、固化不能であるが、体部外側下部はクテヘラミガセが観察できる。	1~3mm (内) 橙 火砂粒含 石英 結晶片岩 (外) にまく黄緑				
197	スクレイパー	根土	4.3	2.5	0.75	9.34	完存	サメカイト		下辺は大きな削痕による刃部形成。使用による刃こぼれとと思われる小さな削痕あり。 上辺は兩面調整による刃部形成。
198	打製石底丁	根土	(5.8)	(3.1)	(0.6)	(18)	欠損	結晶片岩 (紅葉石片岩)	黒	

第16表 SB1010 出土遺物観察表

番号	器種	地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴			技 法	胎土	色調	備考
199	弥生土器 底A1ハ	集石 根土	口徑19.6	大きく外反する口縫合部。 口縫合部は肥厚させ、縫合部は平坦におさめる。 縫合部には縫合の刻目を施し、縫合部に穿孔(焼成孔)する。孔は2孔確認できる。	内外面ともナダ。	1~4mm 火砂粒少 量含 石英 結晶片岩				
200	弥生土器 底A1	根土	口徑17.3	縫合部から大きく外反する口縫合部。 口縫合部は肥厚させ、縫合部はやや凹面に仕上げる。	内外面ともにヨコナダ。	1~3mm 火砂粒含 石英 結晶片岩				
201	弥生土器 底A1ハ	集石 根土	口徑17.5	外反する口縫合部。 縫合部を上方に軽度させ、縫合部は平面におさめる。 U縫合縫合面に剥離による刻目を施す。	内外面ともにナダ。	0.5~2 mm大砂粒 含 石英 結晶片岩				
202	弥生土器 底D1ハ	根土	口徑28.0	ゆるやかに外反する口縫合部。 縫合部は平面におさめ、上端に刻目、縫合部下端に指紋状文を施す。	内外面ともにナダ。	1~3mm 火砂粒含 石英 (外) 結晶片岩 (内) にまく黄緑				
203	弥生土器 底	集石 根土		内寄する体部から、直立気味に立ちあがる断面。 集石下端に指紋状文を施す。	体部内外面ナダ。	0.5~3 mm大砂粒 含 石英				

番号	器種	地點 部位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
204	非生土器 甕	覆土		内側してちあがる体部上半。 外縁に上から唇部波次文、直線 文を施す。内縁文に重ねて、円 形浮文が1つだけ確認できる。	体部外縁、上半はタテハ ケ、最大径付近はヨコヘ ラミガキ。 体部内面、上半はナデ、 下位はヨコハケ。	1~3 mm 大砂粒 結晶片岩 石英	(内)薄灰 (外)棕	
205	非生土器 甕	集石 覆土	底径9.2	底面は平底を呈す。 体部はくびれて、内縁気味に大 きく外方にたちあがる。	底面はナデ、体部外縁は 横ナデ。 内面は、ユビオサエ模を のこす。	0.5~2 mm 大砂粒 合 結晶片岩	(内) よい黄褐 (外)赤	
206	非生土器 甕	覆土	底径9.8	底面は上げ底を呈す。 体部は内縁気味に大きく外方に たちあがる。	内外面とも斜傾のため不明 顯。	1~5 mm 大砂粒 石英 結晶片岩	(内)薄灰 (外)棕	
207	非生土器 甕A.二	覆土	口径16.8	内側してちあがる体部から屈 曲して外反する近いU縁部をもつ。 U縁部は平底におさめる。	内外面ともナデ。 體部外縁にユビオサエ模 をのこす。	1~4 mm 大砂粒 石英 砂岩	よい黄褐	
208	非生土器 甕A.イ	集石 覆土	口径16.6	内側してちあがる体部から 「U」の字状に屈曲して外反す るU縁部をもつ。 U縁部は平底におさめる。	U縁部内外縁ヨコナデ。 体部外縁はていねいなナ デ。 開口部内面はヨコヘラミガ キを施し、体部内面はて いねいなナデ。	1~3 mm 大砂粒 石英 結晶片岩	明灰	
209	非生土器 甕A.イ	集石 覆土	口径16.0	内側気味にちあがる体部から 直角に近い角度で屈曲して外反す るU縁部をもつ。 U縁部内面はやや丸味をおびが ら、平底におさめている。開口 内面にナデによるわずかな凹み が確認できる。	体部外縁タテハケのちヨ コナデ。 口縁部および体部内面ナ デ。	1~4 mm 大砂粒 石英 結晶片岩	佳	
210	非生土器 甕	集石 覆土	底径5.8	底面はわずかに上げ底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあ がる。	体部外縁タテヘラミガ キ。 底面はナデ、体部内面も ナデ。	0.5~2 mm 大砂粒 合 石英	(内)薄灰 (外)淡黃棕	
211	非生土器 甕	覆土	底径4.0	底面は平底を見す。 体部はわずかに内縁気味に外方 にたちあがる。	体部外縁板ナデ。 底面および内面ナデ。 内面一部にユビオサエ模 をのこす。	1~2.5 mm 大砂粒 合 結晶片岩	佳	
212	非生土器 鉢	覆土	底径7.0	高台状の上げ底を呈す。 体部は直線的に外方にたちあ がる。	体部外縁はタテヘラミガ キ。 底面外縁ヨコナデ、底面 はナデ。 体部内面はヨコヘラミガ キ。	0.5~1.5 mm 大砂粒 合 結晶片岩 納型付	よい橙	

番号	器種	地點 部位	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	胎土	色調	備考
213	上製紡錘	覆土	3.0	2.5	0.6	0.4	4.66	1~3 mm 大砂粒 結晶片岩 石英	佳	土器片利用。
214	土製紡錘	覆土	4.5	(2.8)	1.0	0.3	(14.22)	1~3 mm 大砂粒 結晶片岩 石英	佳	土器片利用。